續國譯漢文大成

文學部　三十四

309
65

始

續國譯漢文大成

文學部 第三十四册（第九帙の二）

白樂天詩集一の二

吉田律郎氏 寄贈本

昭和六年 三月

309
65

白樂天詩集　卷三

諷諭三　新樂府上　二十首

新樂府

並序　元和四年爲左拾遺時作。

序曰。凡九千二百五十二言。斷爲五十篇。篇無定句。句無定字。繫於意。不繫於文。首句標其目。卒章顯其志。詩三百之義也。其辭質而徑。欲見之者易諭也。其言直而切。欲聞之者深誡也。其事覈而實。使采之者傳信也。其體順而律。可以播於樂章歌曲也。總而言之。爲君爲臣爲民爲物爲事而作。不爲文而作也。

【訓讀】序に曰く、凡て九千二百五十二言、斷めて五十篇と爲す。篇に定句無く句に定字無し。意に繫けて文に繫けず。首句に其目を標はし、卒章に其志を顯はすは、詩三百の義なり。其辭質にして

徑、之を見る者の論り易からんことを欲してなり。其言直にして切、之を聞く者深く誡めんことを欲してなり。其事覈にして實、之を采る者をして信を傳へしめんとなり。其體順にして律、以て樂章歌曲に播す可し。總て之を言へば、君の爲め臣の爲め民の爲め物の爲め事の爲めにして作る、文の爲にして作らざるなり。

【字解】【一】新樂府　汪立名云く、元稹の集に李校書の新題樂府、上陽白髮人、華原磬等十二首に和するあり。序に云く、予が友李公垂(名は紳)予に樂府新題二十首を貺ふ。雅より所謂虛しく文を爲らざるあり。予其の時を病ふるの尤急なる者を取り、列して之に和する蓋し十二のみ云云と。語未だ嘗て白に及ばず、而して此序中又李の作に和することを言はず。當に是れ李の作に因りて推廣する者なるべし云云と。【二】定句　一定の句數。【三】繫二於意一云云　目的は詩意に在るので文字を弄するに在るのではない。【四】標二其目一　この下に我邦に傳はる古寫本には、古十九首之例也とある。古十九首は文選の古詩十九首をいふ。【五】卒章　詩の結末の段。【六】詩三百　詩經をいふ。古寫本には詩三百篇とある。【七】采之者　此詩を採收する人。【八】律　音調の整つてゐること。

七德舞　美撥亂陳王業也

七德舞七德歌。　七德の舞七德の歌、
傳自武德至元和。　傳へて武德より元和に至る。
元和小臣白居易。　元和の小臣白居易、
觀舞聽歌知樂意。　舞を見歌を聽きて樂意を知る。
樂終稽首陳其事。　樂終つて稽首して其事を陳ぶ。
太宗十八舉義兵。　太宗十八にして義兵を舉げ、
白旄黃鉞定兩京。　白旄黃鉞兩京を定め、
擒充戮竇四海清。　充を擒にし竇を戮し四海清し。
二十有四功業成。　二十有四功業成り、
二十有九卽帝位。　二十有九帝位に卽き、
三十有五致太平。　三十有五太平を致す。
功成理定何神速。　功成り理定まること何ぞ神速なる。
速在推心置人腹。　速は心を推して人の腹に置くに在り。
亡卒遺骸散帛收。　亡卒の遺骸帛を散じて收め、
飢人賣子分金贖。　飢人の賣子金を分つて贖ふ。
魏徵夢見天子泣。　魏徵夢に見えて天子泣き、

【字解】【一】七德舞　左傳宣公十二年に、夫れ武は暴を禁じ兵を戢め大を保ち功を定め民を安んじ衆を和し財を豐にするものなりとあり。之を武の七德となす。唐の太宗が舞を作つて之を七德舞と名づけた。【二】七德歌　七德舞の歌なり。その歌今傳はらず。【三】武德　唐の高祖の年號。元和は憲宗の年號。【四】樂意　舞樂を作られた趣意。【五】稽首　頭を垂れて地に至り暫く之をとどめるなり。【六】白旄　白い旄牛の尾、指揮するもの。黃鉞は黃金で飾つたマサカリ。刑具なり。【七】兩京　洛陽・長安。【八】充　王世充。竇は竇建德。【九】理定　理は治なり。唐の高宗の諱は治なる故、之を避けて理の字を代用す。【一〇】推心云云　後漢の光武帝の故事、赤心を推して人の腹中に置く

張謹哀聞辰日哭。
怨女三千放出宮。
死囚四百來歸獄。
剪鬚燒藥賜功臣。
李勣嗚咽思殺身。
含血吮瘡撫戰士。
思摩奮呼乞效死。
不獨善戰善乘時。
以心感人人心歸。
爾來一百九十載。
天下至今歌舞之。
歌七德舞七德。
聖人有作垂無極。

張謹哀聞して辰日哭す。
怨女三千放して宮を出し、
死囚四百來つて獄に歸る。
鬚を剪り藥に燒いて功臣に賜ひ、
李勣嗚咽して身を殺さんことを思ふ。
血を含み瘡を吮うて戰士を撫し、
思摩奮ひ呼んで死を效さんことを乞ふ。
獨り善く戰ひ善く時に乘ずるのみならず、
心を以て人を感せしめ人心歸す。
爾來一百九十載、
天下今に至るまで之を歌舞す。
七德を歌ひ七德を舞ふ。
聖人作有り無極に垂る。

なり。人を信じて疑はぬこと。

【二一】亡卒　死亡した兵卒。

【二二】魏徵　太宗の重臣。徵の病篤き時太宗は夢に徵と別れ、覺めて淚を流す。天子は一に子夜に作る。子夜は夜半なり。

【二三】張謹　張公謹の卒するや太宗哀禮を擧げんとす。有司奏す、今日は辰の日なり、陰陽家の忌む所なれば哭すべからずと。太宗情に於て忍ぶべからずとて遂に哀禮を擧げた。

【二四】怨女　夫のない女。太宗は宮女三千人を解放して皆人に嫁せしめた。

【二五】死囚　貞觀六年、死刑の囚人三百九十人を縱して家に歸らしめ、明年秋來りて刑に就かんことを約した。期に至り悉く來りて刑に就き後るる者なし。

豈徒耀神武。
豈徒誇聖文。
太宗意在陳王業。
王業艱難示子孫。

豈に徒神武を耀すのみならんや、
豈に徒聖文に誇るのみならんや。
太宗の意は王業を陳じ、
王業の艱難をば子孫に示すに在り。

【題義】此詩は唐の太宗皇帝が隋末の禍亂を平定し、此舞を作つて王業を創める艱難を陳ね示したことをほめたのである。

【詩意】七德の舞、七德の歌が武德の御宇から今日まで傳つてゐる。元和の微臣たる白居易は此舞を觀、此歌を聽いて、此舞樂を製作せられた御趣意を知り、謹んでここに其事を陳べる。太宗皇帝は御年十八で義兵を擧げ、白旄や黃鉞を手にして洛陽・長安の二京を鎭定し、王世充や竇建德を誅戮し、二十四の時に至りて功業全く成り、二十九で天子の位に卽き、三十五で天下を太平ならしめられた。どうしてかくも速に治功が成つたかと申せば、それは太宗が人を信じて疑はぬからである。戰死した兵卒の骸骨をば金帛を散じて埋葬させたり、飢に迫つた人民が吾が子を賣つたのを金を分け與へて身受けさせたり、魏徵が御夢の中に別を告げた時、夜半に別れを悲んで御泣きになつたり、張公謹の死を聞きになつて辰の日にも拘らず哭泣されたり、三千の宮女を解放したり、四百の死囚が約を違へずに

【一六】不獨善　この上、一本に則知の二字がある。

歸つたり、李勣が病氣の時、醫者が龍鬚を燒いて灰にして飲めば癒えると言つたので、太宗は己の鬚を剪り藥に燒いて勣に賜うたので、李勣は身を棄てて君恩に報いようと期したり、李思摩が負傷した時、太宗は其瘡を吮つてやつたので、李思摩が感激して太宗の爲に一身を捧げんことを乞うた如きは、皆其實例である。されば唯戰が上手でよい時運に乘じたから天下が取れたのではなく、眞心を以て人を感せしめたから自然と人が歸服したので、此舞や歌が作られてから百九十年の今日まで傳はつて亡びないのも之が爲である。さて七德の歌、七德の舞は、聖人たる太宗がお作りになつて無窮の後の世に殘されたもので、ただ己の聖文神武を見せびらかす爲ではなく、王業の艱難を述べ、その艱難をば子孫に示さうとの御趣意である。

法曲　美列聖正華聲也

法曲　列聖の華聲を正すを美するなり

法曲法曲歌大定。
積德重熙有餘慶。
永徽之人舞而詠。
法曲法曲舞霓裳。

【字解】【一】法曲　朝廷で定めた標準の樂曲。
【二】大定　一或大定樂。高宗の時創定した樂曲である。
【三】積德重熙　代代の天皇が德光を積みかさねえ。

政和世理音洋洋。
開元之人樂且康。
法曲法曲歌堂堂。
堂堂之慶垂無疆。
中宗肅宗復鴻業。
唐祚中興萬萬葉。
法曲法曲雜夷歌。
夷聲邪亂華聲和。
以亂干和天寶末。
明年胡塵犯宮闕。
乃知法曲本華風。
苟能審音與政通。
一從胡曲相參錯。

政和し世理まりて音洋洋たり。
開元の人樂んで且つ康し。
法曲法曲歌堂堂を歌ひ、
堂堂の慶無疆に垂る。
中宗肅宗鴻業を復し、
唐祚中興萬萬葉。
法曲法曲夷歌を雜ふ。
夷聲は邪亂にして華聲は和なり。
亂を以て和を干す天寶の末、
明年胡塵宮闕を犯す。
乃ち知る法曲は本華風なるを。
苟に能く音を審にせば政と通ず。
一たび胡曲の相參錯せしより、

【四】永徽　高宗の年號。
【五】霓裳　霓裳羽衣曲。玄宗の時に制定した樂曲である。
【六】洋洋　盛なる貌。
【七】開元　玄宗の年號。
【八】堂堂　歌曲の名。自註に永隆元年太常丞李嗣貞、よく音律を審にし、能く興衰を知る。云く近ごろ樂府堂堂の音あり、唐祚再興の兆也とあり。
【九】鴻業　大業なり。
【一〇】天寶末　自註に天寶十三載始めて諸道に詔して法曲を訓せしめ、胡部の新聲と合作せしむ。識者深く之を異とす。
【一一】胡塵云云　安祿山叛し長安を陷れしこと。
【一二】與政通　禮記の樂記に、聲音之道、與政通矣とあり、音樂の正亂と政治の善惡とは大關係ありとの意。

不レ辨興衰與哀樂。　興衰と哀樂とを辨せず。
願求牙曠正華音。　願はくは牙曠を求めて華音を正し、
不レ令夷夏相交侵。　夷夏をして相交侵せしめざらんことを。

【題義】唐の歴代の天皇が音樂を正し給ひしことをほめた詩である。

【詩意】朝廷の法曲として一戎大定樂が歌はれた。祖先以來代代德を積み光を累ね子孫が其餘慶を蒙つて、高宗の永徽年間に、此樂を舞ひ且つ歌つたのである。又法曲として霓裳羽衣の曲が舞はれた。時恰も政和し世治まり音樂も洋洋として盛で、玄宗の開元時代の人は皆樂しく且つ康らかであつた。又永隆年代には法曲として堂堂の曲を歌つた。其曲を歌ふ餘慶は永く無窮の後の世まで傳へられた。中宗も肅宗も大亂の後を承けたが、よく大業を恢復せられ、帝位中興して萬世までも續くべき氣運を示した。然るに法曲の中に夷狄の樂曲が混ずるやうになつた。夷狄の樂曲は邪亂で中國の樂曲は和平である。天寶十三年に夷華の混淆が行はれ、その翌年には胡人安祿山が帝都を蹂躙するに至つた。此に由つて音樂は政道と相通ずることがわかる。一たび夷狄の歌曲が中國の歌曲と混淆するやうになつてから、國家の盛衰と人情の哀樂とを辨知することが出來なくなつた。どうか伯牙・師曠のやうな大音樂家を求めて、中國の音樂を正させ、夷狄と中國との音樂が相侵害することのないやうにありたいものだ。

【三】胡曲　夷歌なり。
【四】牙曠　伯牙・師曠。古の音樂家の名。
【五】夷夏　夷狄と中國。

二王後　明祖宗之意也

二王後　祖宗の意を明にするなり

二王後。彼何人。　二王の後、彼れ何人ぞ。
介公鄴公爲國賓。　介公鄴公國賓と爲る。
周武隋文之子孫。　周武隋文の子孫なり。
古人有言天下者。　古人言へる有り天下なる者は、
非是一人之天下。　是一人の天下に非ず。
周亡天下傳于隋。　周亡びて天下隋に傳はる。
隋人失之唐得之。　隋人之を失うて唐之を得。
唐興十葉歲二百。　唐興つて十葉歲二百、
介公鄴公世爲客。　介公鄴公世、客たり。
明堂太廟朝享時。　明堂太廟朝享の時、

【字解】【一】二王後　唐の前の隋及び北周の天子の子孫。
【二】介公　隋の開皇元年、北周の靜帝を介國公となした。其死後、宇文仲の孫紹を介國公として隋室の賓とした。唐の武德元年、隋の恭帝を鄴國公となした。
【三】明堂　天子の政事堂。
【四】朝享　朝は臣下を參内せしめること。享は神を祭り饗すること。

引居賓位備威儀。
備威儀助郊祭。
高祖太宗之遺制。
不獨興滅國。
不獨繼絶世。
欲令嗣位守文君。
亡國子孫取爲戒。

引かれて賓位に居り威儀を備ふ。
威儀を備へ、郊祭を助く。
高祖太宗の遺制なり。
獨り滅國を興すのみならず、
獨り絶世を繼ぐのみならず。
嗣位守文の君をして、
亡國の子孫を取つて戒と爲さしめんと欲す。

【題義】此詩は唐の皇室が其前代の天皇の子孫を優待することを明にしたのである。

【詩意】二王の子孫とは何人であるか。介公と鄴公との二人で皇室が客分として優待してゐる。それは北周の武帝、隋の文帝の子孫である。天下は一人の私有すべきものでないと古人も言つてゐるが、實に其のとほりで、北周が亡びてから天下は隋に傳はり、隋が亡びて唐が得た。唐が興つてから十代二百年を經たが、介公と鄴公とは常に客分となつて朝享の時には國賓の位に据わり威儀を備へ祭禮の手傳をした。これは高祖、太宗以來の遺制であつて、其趣意は滅びた國を興し、絶えた世を繼ぐのみならず、祖宗の成業を守る君主をして、亡國の子孫を見て己の戒となさしめようといふに在るのだ。

【三】郊祭　天子が天を祭ること。

海漫漫　戒求仙也　　海漫漫　仙を求むるを戒むるなり

海漫漫(一)。
直下無底旁無邊。
雲濤煙浪最深處。
人傳中有三神山(二)。
山上多生不死藥。
服之羽化爲天仙(三)。
秦皇漢武信此語。
方士年年采藥去(四)。
蓬萊今古但聞名。
煙水茫茫無覓處。

海漫漫たり。
直下底無く旁邊無し。
雲濤煙浪最深の處、
人は傳ふ中に三神山有り。
山上多く不死の藥を生じ、
之を服すれば羽化して天仙と爲ると。
秦皇漢武此語を信じ、
方士年年藥を采りて去る。
蓬萊今古但名を聞くのみ、
煙水茫茫として覓むる處無し。

【字解】【一】漫漫　廣き貌。
【二】三神山　蓬萊、方丈、瀛洲。
【三】羽化　羽が生える。天仙は天上の仙人。
【四】方士　仙術を說く者。

海漫漫。風浩浩。
眼穿不見蓬萊島。
不見蓬萊不敢歸。
童男卯女舟中老。
徐福文成多誑誕。
上元太一虛祈禱。
君看驪山頂上茂陵頭。
畢竟悲風吹蔓草。
何況玄元聖祖五千言。
不言藥不言仙。
不言白日昇青天。

海漫漫たり、風浩浩たり。
眼穿たんとするも蓬萊島を見ず。
蓬萊を見ずんば敢て歸らず。
童男卯女舟中に老ゆ。
徐福文成誑誕多し。
上元太一虛く祈禱す。
君看よ驪山の頂上茂陵の頭、
畢竟悲風蔓草を吹く。
何況んや玄元聖祖の五千言、
藥を言はず仙を言はず、
白日青天に昇るを言はざるをや。

【題義】古の天子が仙人を求めた愚を嗤つた詩である。

【詩意】海がひろびろとしてゐる。下は深くして底なく、四方は廣くして際限がない。其最も深い處に三神山があつて、不死の藥が多く生えてゐて、其れを飲めば自由に天上を飛び廻る仙人になれると傳へられてゐる。秦の始皇帝や漢の武帝は其言を信じて方士を遣して不死の藥を求めしめた。併し蓬萊山などは今も昔も名を聞くばかりで、實際は何處を搜しても見つからない。けれども蓬萊山を見出さないうちは歸らぬとあつて、一緒につれて行つた若い男女は皆舟の中で老いてしまつた。徐福や文成はうそをついたのであるが、始皇や武帝は其れを信じて上元夫人だの太一星だのに祈禱を捧げたが何の效果もなく、不老不死も空頼で、驪山や茂陵の墓の主となり、悲風が草葉を吹きそよがせてゐる。それも其筈で神仙の元祖と謂はれる老子の道德經には藥のことも仙人のことも言うてはない。又白晝青天を飛び廻ることが出來るなどとも言つてない。要するに愚者を欺く妄言に過ぎないのだ。

立部伎　刺雅樂之替也

立部伎。鼓笛諠。
舞雙劒。跳七丸。
嬝巨索。掉長竿。
太常部伎有等級。

立部伎、鼓笛諠すし。
雙劍を舞はし、七丸を跳らす。
巨索を嬝め、長竿を掉ふ。
太常の部伎等級有り。

【字解】【一】立部伎　唐では音樂の部を分けて立部と坐部とした。
【二】巨索　ふとい綱。

堂上者坐堂下立。
堂上坐部笙歌清。
堂下立部鼓笛鳴。
笙歌一曲衆側耳。
鼓笛萬曲無人聽。
立部賤。坐部貴。
坐部退爲立部伎。
擊鼓吹笙和雜戲。
立部又退何所任。
始就樂懸操雅音。
雅音替壞一至此。
長令爾輩調宮徵。
圓丘后土郊祀時。

堂上の者は坐し堂下は立つ。
堂上の坐部笙歌清く、
堂下の立部鼓笛鳴る。
笙歌一曲衆耳を側て、
鼓笛萬曲人の聽く無し。
立部は賤しく、坐部は貴し。
坐部退けられて立部伎と爲り、
鼓を擊ち笙を吹いて雜戲に和す。
立部又退けらるれば何の任ずる所ぞ。
始めて樂懸に就いて雅音を操る。
雅音替壞して一に此に至る。
長く爾が輩をして宮徵を調へしむ。
圓丘后土郊祀の時、

【三】樂懸　樂器を懸けならべる枠。雅樂に用ふ。雅音は雅樂。
【四】爾輩　立部伎から退けられて來た拙工。宮徵は音樂の調子の名。
【五】圓丘　天の祭。后土は地の祭。郊は天を祭ること。

言將此樂感神祇。
欲望鳳來百獸舞。
何異北轅將適楚。
工師愚賤安足云。
太常三卿爾何人。

言ふ此樂を將て神祇を感せしむと。
鳳來り百獸舞ふを望まんと欲するは、
何ぞ轅を北にして將に楚に適かんとするに異ならん。
工師は愚賤安んぞ云ふに足らんや、
太常三卿爾何人ぞ。

【六】鳳來百獸舞　書經の堯典、益稷に見ゆ。音樂に感じて鳳凰が來り百獸が舞ふのである。
【七】工師　樂工。
【八】三卿　太常寺には卿一人、少卿二人あり、合せて三人。

【題義】白樂天の自註を見ると、太常（音樂を掌る役所）で、坐部伎に屬する拙工を退けて立部伎に入れ、又立部伎に屬する拙工を退けて雅樂部に入れた。だから雅樂部は大に衰微してしまつたとあるが、此詩は雅樂の衰替したことを刺つたのである。

【詩意】立部伎が演奏せられる。太鼓や笛をやかましくうちならし、二本の劍を振り舞はし、七箇の丸を跳らし、太い繩を張つて之を渡りながら長い竿を振りまはす。これが立部伎である。太常の部伎が立部と坐部と等級づけられてゐて、堂上に坐する（坐部）方が貴く、堂下に立つ（立部）方が賤しい。坐部の方では笙歌の聲清らかに響き、立部の方では太鼓や笛がやかましい。坐部の拙工は退けられて立部に入れられ、太鼓を打を傾けて聽くが、立部の方は誰も聽く者がない。坐部の拙工は退けられて何になるかと
ち笛を吹きなどして雜戲（曲とりや綱わたり）に和する。その立部の拙工は退けられて何になるかと

いへば、雅樂の方へまはされるのである。今や雅樂は此程までに衰廢し、他から退けられた拙工が演奏してゐる有樣である。天地の祭祀にかくも衰廢した雅樂を奏して天地の神祇を感ぜしめ、鳳凰來儀し百獸率ゐ舞ふやうにならしめようと思ふのは、車の楫棒を北に向けて南の楚に往かうとすると同じで、とても出來るものではない。樂工は愚賤であるから責めはしないが、一體太常の三卿は何と心得てゐるのであるか、其氣が知れない。

華原磬　刺樂工非其人也

華原磬　樂工の其人に非ざるを刺るなり

華原磬、華原磬。
古人不聽今人聽。
泗濱石、泗濱石。
今人不擊古人擊。
今人古人何不同。
用之捨之由樂工。
樂工雖在耳如壁。
清濁不分卽爲聾。
梨園弟子調律呂。
知有新聲不知古。
古稱浮磬出泗濱。
立辨致死聲感人。
宮懸一聽華原石。
君心遂忘封疆臣。
果然胡寇從燕起。
武臣少肯封疆死。
始知樂與時政通。
豈聽鏗鏘而已矣。
磬襄入海去不歸。
長安市兒爲樂師。

華原磬、華原磬。古人聽かず今人聽く。泗濱石、泗濱石。今人擊たず古人擊つ。今人古人何ぞ同じからざる。之を用ひ之を捨つるは樂工に由る。樂工在りと雖も耳壁の如し。清濁を分たず卽ち聾たり。梨園の弟子律呂を調ふ。新聲有るを知つて古きを知らず。古稱す浮磬は泗濱より出づと。辨を立て死を致して聲人を感ぜしむ。宮懸一たび華原石を聽き、君心遂に封疆の臣を忘る。果然胡寇燕より起り、武臣肯て封疆に死するもの少なし。始めて知る樂は時政と通ずるを。豈に鏗鏘を聽くのみならんや。磬襄海に入り去つて歸らず。長安の市兒樂師と爲る。

【字解】【一】華原　地名、今陝西省西安府に屬す。そこに產する石で磬を作る。磬は樂器の名。【二】泗濱石　泗水のほとりに產する石。【三】樂工　音樂師。【四】梨園弟子　宮廷直屬の音樂教習所の講習生。【五】律呂　六律六呂。音律。【六】新聲　新流行の音樂。【七】浮磬　書經の禹貢に、泗濱浮磬とあり。註に、泗水の涯、水中に石を見る、以て磬となすべしとあり、疏に浮磬は水上に浮ぶが如く然るに似たりとある。【八】立辨云云　禮記の樂記に、磬以て辨を立て、辨以て死を致す。君子磬聲を聽けば、則ち封疆に死するの臣を思ふとある。【九】宮懸　宮廷の樂器を懸けならべる枠。【一〇】封疆臣　國境を守る臣。【一一】胡寇　安祿山の叛をいふ。燕は今の直隸省地方。【一二】與時政通　前の法曲を見よ。【一三】鏗鏘　金石の聲。【一四】磬襄　古の樂師の名。擊磬襄、論語微子篇に見ゆ。【一五】長安　唐の都。市兒は若者。【一六】清濁　清は泗濱石の音、濁は

華原磬與泗濱石。　華原磬と泗濱石と、
清濁兩聲誰得知。　清濁兩聲誰か知るを得ん。

【題義】　當時の音樂者が技能のないことを刺つた詩である。

【詩意】　華原石で作つた磬がある。これは今こそ樂器として用ひるが、昔はこんなものは用ひなかつた。泗水の濱から產する磬石は、今の人は擊たないが昔は珍重して擊つたものである。昔は泗濱石を用ひ今は華原石を用ひる。昔と今とはなぜかう違ふか。それは樂工に由るのである。今の樂工は耳が聾のやうで、音の清濁を聽き分けることも出來ず聾同樣である。今は梨園の弟子が音樂家で候などと謂つてゐるが、現代の新聲はわかりもしようが、古の音樂は少しもわからない。昔の言傳へに據れば、泗濱の磬聲を聞けば、人をして職務を辨知する心を起さしめ、職務の爲に身命を抛つに至らしめる。故に君主が之を聽けば國境に死するの臣を思ふとあるが、今日は華原磬の聲を聽いて君が心に國境に死んだ臣を忘れてゐる有樣である。さればこそ安祿山が謀叛しても、武臣が防戰して國境に死する者もない。音樂は時の政治と密接な關係があることがこれに因つてよくわかる。ただ音を聽くばかりが音樂ではないのだ。昔擊磬襄は世を厭つて海島に去つたといふが、今は長安の若者等が樂工となつて、華原石と泗濱石との清濁を辨知することも出來ない狀態である。擊磬襄でなくとも、つくづく此世がいやになる。

華原石の音。白樂天の自註に、天寶中、始めて泗濱磬を廢して華原石を代用したとある。

上陽人　愍怨曠也[二]

上陽人[一]。上陽人。
紅顏暗老白髮新。
綠衣監使守宮門。
一閉上陽多少春。
玄宗末歲初選入。
入時十六今六十。
同時采擇百餘人。
零落年深[三]殘此身。
憶昔呑悲別親族。
扶入車中不敎哭。

上陽人　怨曠を愍むなり。

上陽の人、上陽の人。
紅顏暗に老いて白髮新なり。
綠衣の監使宮門を守る。
一たび上陽に閉されて多少の春ぞ。
玄宗の末歲初めて選ばれて入る。
入りし時は十六今は六十。
同時に采擇せらるるもの百餘人、
零落年深うして此身を殘す。
憶ふ昔悲みを呑んで親族に別れし時、
扶けて車中に入れて哭せしめず。

【字解】【一】上陽　自註に、天寶五載、楊貴妃が寵を專にしてから後は、宮人の邂逅を得る者なく、美色ある宮人は皆別な宮殿に置かれた。上陽宮は其一であるとある。一本には上陽白髮人と題す。
【二】怨曠　怨女曠夫。配偶者を得られない男女。
【三】年深　年久しきを經る。

皆云入内便承恩。
臉似芙蓉胷似玉。
未容君王得見面。
已被楊妃遙側目。
妬令潛配上陽宮。
一生遂向空房宿。
宿空房秋夜長。
夜長無寐天不明。
耿耿殘燈背壁影。
蕭蕭暗雨打隣聲。
春日遲。
日遲獨坐天難暮。
宮鶯百囀愁厭聞。
梁燕雙栖老休妬。
鶯歸燕去長悄然。
春往秋來不記年。
唯向深宮望明月。
東西四五百廻圓。
今日宮中年最老。
大家遙賜尙書號。
小頭鞵履窄衣裳。
青黛點眉眉細長。
外人不見見應笑。
天寶末年時世粧。
上陽人。苦最多。
少亦苦。老亦苦。

皆云ふ内に入らば便ち恩を承けんと。
臉は芙蓉に似胷は玉に似たり。
未だ君王面を見るを得るを容れず、
已に楊妃に遙かに目を側てらる。
妬みて潛かに上陽宮に配せしむ、
一生遂に空房に向つて宿す。
空房に宿す、秋夜長し。
夜長く寐ぬる無くして天明けず。
耿耿たる殘燈壁に背ける影、
蕭蕭たる暗雨隣を打つ聲。
春日遲し。
日遲うして獨坐すれば天暮れ難し。
宮鶯百囀するも愁へて聞くを厭ひ、
梁燕雙び栖めども老いて妬むことを休む。
鶯歸り燕去つて長く悄然。
春往き秋來りて年を記せず。
唯深宮に向つて明月を望む。
東西四五百廻圓なり。
今日宮中に年最も老いたり。
大家遙に尙書の號を賜ふ。
小頭の鞵履窄き衣裳。
青黛眉に點じ眉細長。
外人見ず見ば應に笑ふべし。
天寶末年の時世粧。
上陽の人、苦最も多し。
少にも亦苦み、老いても亦苦しむ。

【一四】入内　宮中に入ること。
【一五】芙蓉　蓮花。
【一六】楊妃　楊貴妃。
【一七】空房　空閨といふが如し。
【一八】耿耿　小明の貌。
【一九】背壁　壁によせて置くこと。
【二〇】蕭蕭　淋しき貌。
【二一】春日遲　日が永くて容易に暮れないこと。
【二二】悄然　憂ふる貌。

【二三】記年　幾年になるか記憶しない。
【二四】向深宮　向は於に同じ、上陽宮に於ての意。
【二五】大家　小吏は天子を稱して天家といひ、親近の臣は大家といふ。
【二六】小頭　さきのとがつた。鞵履はクツ。窄衣裳はぴつたりと身について、たるみのない衣裳。
【二七】外人　世間の人。
【二八】時世粧　流行の服裝。
【二九】呂尙　尙は向の誤。呂向、字は子回。玄宗召して翰林に入る。時に帝諭歲使を遣し天下の美女を求めしめ之を後宮に納る。之を花鳥使と號す。向、美人賦を進めて以て諷す。嘗て、李善の文選を釋するを繁となし、呂延濟・劉良・李周翰等と註解

少苦老苦兩如何　少苦老苦兩つながら如何せん。
君不見昔時呂尚美人賦。　君見ずや昔時呂尚が美人の賦を。
又不見今日上陽宮人白髮歌。　又見ずや今日上陽宮人白髮の歌を。

【題義】　此詩は配偶を得ない男女を愍んで作つたのである。

【詩意】　上陽宮に閉ぢ籠められてゐる宮女は、花の顏もいつしか老いて今では白髮の老婆になつてゐる。綠衣をまとうた役人が宮門を監守してゐるが、いつから此宮に閉ぢ籠められたのであらうか。この宮女の自ら言ふ所を聞くに、玄宗皇帝の御世の末に初めて選ばれて宮中に入り、その時は年十六であつたが今は早や六十になる。同時に採用された宮女は百餘人あつたが、久しく年を經る間に死亡して、今は我獨り生き殘つてゐる。昔悲を含んで親族に別れて來る時は、手を取つて車に載せられ、お前は顏は花の如く肌は玉の如く美しいから、宮中に入れば必ず御寵愛を得るにきまつてゐる故、泣くには及ばぬなどと慰められたが、まだ天子樣の御顏さへ拜せぬうちに楊貴妃に睨まれ、此上陽宮に斥けられてしまつて、一生淋しく暮して來た。殊に秋の夜長には目が冴えて眠れず、夜は仲仲に明けず、壁に倚つて立つ小暗い燈の下に、淋しく窗を打つ夜雨の音を聞き盡し、春になれば日が永くて、獨り坐してゐると退屈でたまらない。宮殿のあたりで鶯が囀いてはゐるが、愁ある身には聞くさへ懶をなす、時に五臣註と異す。

く、梁の上に雌雄羽を竝べて栖む燕を見ても、年老いては妬む心さへ起らない。かくて春になつて鶯が來、秋になつて燕が去る。毎年之を繰返して今既に幾年を經たか殆ど記憶しないが、四五百回は滿月を見たであらう（四五十年を經たとの意。東西とは東から出て西に沈む月の經路をいふ）。で、自分は宮中での最年長者なので、今は天子樣から尙書の稱號を賜はつてゐる。先の尖つた靴、びつたりと身についた衣裳、青い黛で細長くかいた眉。世間の人が見ないからよいが、若し一目見たらば必ず笑ふであらう。我が粧は今から四五十年前の天寶の末頃の流行なのだ。との事だ。さても此宮女は少い時も年老いた時も苦みとほしである。ああ此苦を如何にしようぞ。昔玄宗皇帝の時に呂向が美人賦を上つて宮女を多く納れることを諷諫した事、并に今日自分が上陽宮人白髮の歌を作つて、此宮女に同情を寄せる事を、どうぞ諸君は心を留めて見てくれよ。

胡旋女　戒近習也

胡旋女、胡旋女。　胡旋女、胡旋女。　近習を戒るなり
心應絃、手應鼓。　心は絃に應じ、手は鼓に應ず。
絃鼓一聲雙袖舉。　絃鼓一聲雙袖舉り、

【字解】【一】胡旋女　えびすの身を回旋して舞ふ女。自註に、天寶の末、康居國より之を獻ずとある。康居は西城の國名。

廻雪飄颻轉蓬舞。
左旋右轉不知疲。
千匝萬周無已時。
人間物類無可比。
奔車輪緩旋風遲。
曲終再拜謝天子。
天子爲之微啓齒。
胡旋女。出康居。
徒勞東來萬里餘。
中原自有胡旋者。
鬬妙爭能爾不如。
天寶季年時欲變。
臣妾人人學圓轉。

廻雪飄颻として轉蓬のごとく舞ふ。
左旋右轉して疲るるを知らず、
千匝萬周して已む時無し。
人間の物類比ぶ可き無く、
奔車輪緩うして旋風遲し。
曲終つて再拜して天子に謝す、
天子之が爲めに微く齒を啓く。
胡旋女は、康居より出づ。
徒らに勞す東來萬里餘。
中原自ら胡旋する者有り、
妙を鬬はし能を爭へば爾如かず。
天寶の季年時變せんと欲し、
臣妾人人圓轉を學ぶ。

【一】季年　末年。
【二】圓轉　自由に身を回轉して舞ふこと。世渉りの態度の捕捉すべからざる意をも含む。

中有太眞外祿山。
二人最道能胡旋。
梨花園中册作妃。
金雞障下養爲兒。
祿山胡旋迷君眼。
兵過黃河疑未反。
貴妃胡旋惑君心。
死棄馬嵬念更深。
從茲地軸天維轉。
五十年來制不禁。
胡旋女。莫空舞。
數唱此歌悟明主。

中に太眞有り外には祿山、
二人最も道ふ能く胡旋すと。
梨花園中册して妃と作し、
金雞障下養つて兒と爲す。
祿山胡旋して君の眼を迷はし、
兵黃河を過ぐるも未だ反せずと疑ふ。
貴妃胡旋して君の心を惑はし、
死して馬嵬に棄つるも念更に深し。
茲より地軸天維轉じ、
五十年來制すれども禁まず。
胡旋女、空しく舞ふ莫れ。
數唱此歌を唱へて明主を悟らしめよ。

【四】太眞　楊貴妃をいふ。祿山は安祿山。
【五】册　辭令書の如きもの。
【六】金雞障　金雞を畫いてあるツイタテ。新唐書安祿山傳に、帝登三勤政樓一、御坐之左、張二金雞大障一、前置二特榻一、詔三祿山一坐とある。
【七】馬嵬　天寶十五載、玄宗の蜀に蒙塵する時、陣玄禮等に迫られ、楊貴妃を馬嵬坡に誅す。
【八】地軸　地を支ふる中軸。天維は天を維持する綱。

【題義】天子の側近に侍する者を戒むる詩である。

【詩意】胡國の舞をする女がある。心は絃音に應じ手は鼓聲に應じ、兩の袖を擧げて舞ふ。其の疾いことは雪の飄るが如く蓬の飛ぶが如くである。左に旋り右に轉じて幾回なるを知らず。殆ど此世に比ぶべきものもない疾さで、奔る車の輪でも旋風でも、これに比べては遙に遲い位だ。一曲舞ひ終り再拜して天子樣に挨拶すると、天子樣は微笑して御褒めになる。さて此胡旋女は康居國の生れで、萬里の道を遙遙と渡つて來たのであるが、甚だ御苦勞千萬な話で、中國には既に胡旋をする者があつて、お前などは到底その敵ではないのだ。といふのは外でもないが、天寶の末に世柄が變らうとして男も女も圓轉滑脫の態度を取つて、信を置き難い人情になつた。其實例を擧ぐれば宮中には楊貴妃があり宮外には安祿山があつた。この二人が何と謂つても胡旋の名人だといふ世評が高い。玄宗皇帝は楊太眞をば梨の花咲く宮園に冊立して貴妃となし、安祿山をば金雞障下に召して楊貴妃の養子にした。所で安祿山は胡旋して君の目を迷はし、それが爲に玄宗は祿山の叛兵が既に黃河を渡つても、まだ叛いたのではあるまいと疑つた。貴妃は胡旋して君の心を惑はし、それが爲に既に馬嵬で斬り棄ててからも、玄宗は尙ほ忘れることが出來なかつた。爾來天地變轉して五十年になるが、胡旋を禁制しても仲仲絕やすことが出來ない。ああ胡旋する女よ。徒に舞ふことを止めよ。度度自分の作つた此歌を歌つて賢明なる君を悟らしむるがよい。

折臂翁　戒邊功也

折臂翁　邊功を戒むるなり

新豐老翁八十八。
頭鬢眉鬚皆似雪。
玄孫扶向店前行。
左臂憑肩右臂折。
問翁臂折來幾年。
兼問致折何因緣。
翁云貫屬新豐縣。
生逢聖代無征戰。
慣聽梨園歌管聲。
不識旗槍與弓箭。
無何天寶大徵兵。
戶有三丁點一丁。

新豐の老翁八十八、
頭鬢眉鬚皆雪に似たり。
玄孫に扶けられて店前に向つて行く、
左臂は肩に憑り右臂は折る。
翁に問ふ臂折れてより來幾年ぞ、
兼て問ふ折るを致すは何の因緣ぞと。
翁云ふ貫は新豐縣に屬し、
生れて聖代の征戰無きに逢ふ。
梨園歌管の聲を聽くに慣れ、
旗槍と弓箭とを識らず。
何も無く天寶大に兵を徵し、
戶に三丁有れば一丁を點ず。

【字解】【一】新豐　縣名。今の陝西省西安府臨潼縣新豐鎭。
【二】玄孫　孫の孫、やしやご。
【三】貫　原籍。
【四】梨園　前の鞠原宮に見ゆ。
【五】點　戶籍の姓名の上に點を打つこと。點を打たれた者は徵兵として徵發される。

點得驅將何處去。
五月萬里雲南行。
聞道雲南有瀘水。
椒花落時瘴煙起。
大軍徒涉水如湯。
未過十人二三死。
邨南邨北哭聲哀。
兒別爺娘夫別妻。
皆云前後征蠻者。
千萬人行無一廻。
是時翁年二十四。
兵部牒中有名字。
夜深不敢使人知。

點じ得驅り將つて何處にか去る。
五月萬里雲南に行く。
聞道く雲南に瀘水有りと。
椒花落る時瘴煙起る。
大軍徒涉するに水湯の如し。
未だ過ぎざるに十人に二三は死す。
邨南邨北哭聲哀し。
兒は爺娘に別れ夫は妻に別る。
皆云ふ前後蠻を征する者、
千萬人行いて一も廻る無しと。
是時翁年二十四、
兵部牒中に名字有り。
夜深けて敢て人をして知らしめず、

【九】雲南　省の名。唐の時は南詔といふ國あり。
【七】瀘水　川の名。
【八】瘴煙　毒氣。
【九】爺娘　父母なり。
【一〇】兵部　兵事を掌る役所。牒は帳簿。

偸將大石槌折臂。
張弓簸旗俱不堪。
從茲始免征雲南。
骨碎筋傷非不苦。
且圖揀退歸鄉土。
此臂折來六十年。
一肢雖廢一身全。
至今風雨陰寒夜。
直到天明痛不眠。
痛不眠。終不悔。
且喜老身今獨在。
不然當時瀘水頭。
身死魂孤骨不收。

偸かに大石を將つて臂を槌折す。
弓を張り旗を簸ふ俱に堪へず。
茲より始めて雲南を征するを免る。
骨碎け筋傷んで苦まざるに非ず。
且揀び退けられて鄉土に歸らんことを圖る。
此臂折れて來六十年、
一肢廢すと雖も一身全し。
今に至るまで風雨陰寒の夜、
直に天明に至るまで痛んで眠られず。
痛んで眠らざるも、終に悔いず。
且つ喜ぶ老身の今獨在るを。
然らずんば當時瀘水の頭、
身死し魂孤にして骨收められず、

【一】揀退　えらび退ける。

應作雲南望鄉鬼。　應に雲南望鄉の鬼と作り、
萬人塚上哭呦呦。　萬人塚上哭して呦呦たるべし。
老人言。君聽取。　老人の言、君聽取せよ。
君不聞開元宰相宋開府。　君聞かずや開元の宰相宋開府、
不賞邊功防黷武。　邊功を賞せずして黷武を防げるを。
又不聞天寶宰相楊國忠。　又聞かずや天寶の宰相楊國忠、
欲求恩幸立邊功。　恩幸を求めんと欲して邊功を立て、
邊功未立生人怨。　邊功未だ立たずして人怨を生ぜるを。
請問新豐折臂翁。　請ふ問へ新豐の折臂翁に。

【題義】　此詩は朝廷の權臣が好んで外國と戰端を構へ、功を立てて恩賞を貪らんとするのを戒めたのである。

【詩意】　新豐生れの老翁は今年八十八で髮も鬚も雪のやうだ。玄孫に扶けられて茶店の方に歩いて行く。左の臂は孫の肩に倚りかかり右の臂は折れてゐる。之を觀て予は老翁に尋ねた。あなたの臂が折れてから何年になるか。又折れたのは何故であるか。老翁の答に、私は新豐縣の生れで、太平無事の聖代に逢ひ、戰爭などは見たこともなく、音樂の聲などは聽き慣れてゐたが、弓箭の業などは全く識らなかつた。間もなく天寶年間に大に兵を徵すことになり（楊國忠が南詔を伐つた時のこと）一戸に三人の若者があれば一人は必ず徵發し、之を驅つて何處へ行くかといへば、五月の炎天に熱帶に近い雲南へつれて行くのである。聞けば雲南には瀘水といふ川があつて、山椒の花の落ちる頃になると毒氣が湧き起り、其川の水が湯のやうに熱くて、之を涉る兵士は十人の中に二三人は死んでしまふさうだ。そんな恐ろしい所へやられるのであるから、そちらでもこちらでも徵兵に採られた者が泣き叫んで、子は親に別れ夫は妻に別れて行く。人の噂では雲南征伐に行つたものは千萬人の中に一人も生きて歸る者はないといふ。其時自分は二十四で徵兵名簿に自分の名も載つてゐた。そこで自分は人に知れぬやうに大きな石で自分の臂を折つてしまつた。弓を張ることも旗を振ることも出來なくなつたので雲南征伐に加はることを免れた。筋骨が碎けて苦痛を感せぬのではないが、擇り除けられて鄉里に歸らうと企てたのだ。それから丁度六十年の今日まで手は一本缺けたがお蔭で命に別狀はない。今でも雨風の晩などには疵痕が痛んで夜中眠れないが、少しも後悔はしない。寧ろ今以て獨り無事に生殘つてゐることを喜んでゐる。もしあの時此臂を折らなかつたら、瀘水のほとりに死して死骸を取片附ける人もなく、永く望鄉の鬼となつて萬人塚の上に哭泣してゐるであらう。翁の言は正に此の如く

【三】　萬人塚　多くの戰死者を合葬した塚。呦呦は魂の哭する聲。
【三】　宋開府　開府儀同三司宋璟。
【三】　黷武　武事を濫用すること。

である。ああ讀者諸君は此翁の言をよく聽かれよ。開元時代の名宰相宋璟は邊功を賞せずして武を黷すことを防ぎ、天寶時代の惡宰相楊國忠は君の恩寵を求めん爲に邊功を立てようとし、邊功の立たないうちに人の怨を買つた。うそだと思ふならば此新豐の折臂翁に聞いて見給へ。

太行路　借夫婦以諷君臣之不終也

太行路　夫婦を借りて以て君臣の終へざるを諷するなり

(一)太行之路能摧車。　太行の路能く車を摧く、
若比君心是坦途。　若し君の心に比せば是れ坦途。
(二)巫峽之水能覆舟。　巫峽の水能く舟を覆す、
若比君心是安流。　若し君の心に比せば是れ安流。
君心(三)好惡苦不常。　君が心の好惡苦だ常ならず、
好生(四)毛羽惡生瘡。　好すれば毛羽を生じ惡めば瘡を生ず。
與君結(五)髮未五載。　君と結髮未だ五載ならざるに、
豈期牛女爲參商。　豈に期せんや牛女の參商と爲らんとは。
古稱(六)色衰相棄背。　古稱す色衰ふれば相棄背すと。
當時美人猶怨悔。　當時の美人猶怨悔す。
何況如今(七)鸞鏡中。　何ぞ況んや如今鸞鏡の中、
妾顏未改君心改。　妾が顏未だ改まらざるに君が心改まる。
爲君薰(八)衣裳。　君が爲に衣裳を薰ずれば、
君聞蘭麝(九)不馨香。　君蘭麝を聞いて馨香とせず。
爲君盛容飾。　君が爲に容飾を盛にすれば、
君看(一〇)珠翠無顏色。　君珠翠を看て顏色無しとす。
行路難難重陳。　行路難、重ねて陳べ難し。
人生莫作婦人身。　人生婦人の身と作る莫れ。
百年(一一)苦樂由他人。　百年の苦樂他人に由る。
行路難難於山。險於水。　行路難、山よりも難く、水よりも險し。
不獨人家夫與妻。　獨り人家の夫と妻とのみならず、

【字解】【一】太行　山の名。直隸省と山西省との界に在り。
【二】巫峽　四川省夔州府巫山縣に在り。長江の險所なり。
【三】好惡　愛憎なり。
【四】生毛羽　張衡の西京賦に所レ好生毛羽、所レ惡成瘡痍とあるに本づく。強ひて美點をさがし出すこと。生瘡は強ひて缺點をさがし出すこと。
【五】結髮　結婚すること。五載は五年。
【六】牛女　牽牛星と織女星。夫婦に比す。參商も二星の名、互に反對の方角に出る。相隔るに喩ふ。
【七】如今　今。唯今。鸞鏡は鏡なり。
【八】薰　香を焚きこめること。
【九】蘭麝　芳香なり。
【一〇】珠翠　眞珠、翡翠。
【一一】百年　一生をいふ。

近代君臣亦如此。　近代君臣も亦此の如し。
君不見左納言右納史。　君見ずや、左は納言、右は納史、
朝承恩暮賜死。　朝に恩を承け、暮に死を賜ふ。
行路難不在水不在山。　行路難、水に在らず、山に在らず。
只在人情反覆間。　只人情反覆の間に在り。

【題義】夫婦の關係を借りて君臣の交の終を全うしないことを諷したのである。

【詩意】太行山の路はよく車を摧くが、君（妻から夫を指す）の心の險に比ぶればまだまだ平坦だと謂つてよい。巫峽の水はよく舟を覆すが、君の心の險に比ぶれば安泰な流だと謂つてよい。君の心の愛憎は一向定まりがなく、愛する時は妄にほめそやし、憎む時は糞味噌にけなしつける。君と結婚してから、まだ五年にならないのに、もとは牽牛織女のやうな親しい間柄であつたのが、今は參商のやうに懸け離れてしまつた。容色が衰へると男から棄てられると、昔の美人が怨み悔いてゐるが、今鏡にうつして吾が顏色を見るに、少しも衰へてはゐない。然るに君の心は既に吾が身を去つてしまつた。君の爲に自分の衣裳に香を焚きこめると、君は蘭麝の香をかぎながら、香しとは言はず。君の爲に容飾を盛にすれば、吾が珠玉を見ながら、少しも美しくないと言ふ。人生の行路は難儀なものだ。重ねて陳べるに堪へない。人生れて婦人の身となるなかれ、一生の苦樂は夫次第で、惡い夫を持つたが最後である。この婦人の言ふとほり、人生の行路は難い。それは山よりも水より危險だ。夫妻の間柄ばかりでなく、君主と家來との關係も此と同じだ。諸君見給へ。天子の左右には納言だの內史だのといふ役人が居るが、此等の役人が朝には君恩を受けてゐるかと思ふと、夕には早くも死を賜はるやうな有樣である。行路の難は水や山に在るのではなくて、只人情の反覆定まらざる間に在るのだ。

司天臺　引古以儆今也

司天臺　古を引いて以て今を儆むるなり

(一)司天臺、
仰觀俯察天人際。
(二)羲和死來職事廢。
官不求賢空取藝。
昔聞西(三)漢元成間。
下陵上替(四)謫見天。
北(五)辰微暗少光色。

【字解】【一】司天臺　天文臺なり。
【二】羲和　堯の時天文を掌りし、羲氏和氏。書經堯典に見ゆ。
【三】西漢　前漢なり。元成は元帝・成帝。
【四】謫見天　謫は譴なり。天譴が天文に現はれた。
【五】北辰　北極星。天子に喩ふ。
【六】四星　星の名。后妃に喩ふ。

【二】左納言　官名。右納史は右內史の誤。同じく官名である。

四星煌煌如火赤。
耀芒動角射三台。
上台半滅中台坼。
是時非無太史官。
眼見心知不敢言。
明朝趨入明光殿。
唯奏慶雲壽星見。
天文時變兩如斯。
九重天子不得知。
不得知。安用臺高百尺爲。

四星　煌煌として火の如く赤し。
芒を耀し角を動かして三台を射る、
上台半滅えて中台坼く。
是時太史の官無きに非ず、
眼に見心に知れども敢て言はず。
明朝明光殿に趨り入り、
唯慶雲壽星の見るるを奏す。
天文時變兩ながら斯の如し、
九重の天子知るを得ず。
知るを得ずんば、安んぞ臺の高さ百尺を用ふることを爲さん。

【題義】天文臺はあつても其效のないことを惜んだ詩である。

【詩意】天文臺がある。仰いでは天象を觀、俯しては人事を察する爲に作つたものである。併し堯の時の羲氏和氏が死んでから後は天文の官職が廢れ、賢者を求めないで藝能のある者のみを任用するやうになつた。聞けば漢の元帝・成帝の頃には、下は上を陵ぎ上は勢が替れて、爲に天譴の象が天に現れ、北極星は暗くして光なく四星が益〻照り輝き（天子が勢を失つて宮妃が勢を振ふに喩ふ。）芒角を動かして三台星を射、それが爲に上台は半ば光を失ひ、中台は裂けてしまつた。此時に太史の官がなかつたのではないが、太史は天象の變異を見、心に天譴を知りながら何とも言はず、翌朝明光殿に入りて、慶雲や壽星が天に現はれまして吉祥此上も御座らぬなどと申上げた。ああ天文の變、時世の變、竝に此の如くであるのに、九重の奥に御座る天子は少しも其れを知ることが出來ない。かかる變異を知ることが出來ないくらゐならば、百尺も高い天文臺などを作る必要はないのだ。

捕蝗　刺長吏也

捕蝗　長吏を刺るなり

捕蝗捕蝗誰家子。
天熱日長飢欲死。
興元兵久傷陰陽。
和氣蠱蠹化爲蝗。
始自兩河及三輔。

蝗を捕へ蝗を捕ふ誰が家の子ぞ。
天熱し日長くして飢ゑて死せんと欲す。
興元兵久うして陰陽を傷り、
和氣蠱蠹して化して蝗と爲る。
始め兩河より三輔に及び、

【字解】【一】蝗　いなむし。稻を食ふ害蟲。
【二】興元　唐の德宗の年號。
【三】蠱蠹　損傷といふが如し。
【四】兩河　河南・河北。三輔は京兆・左馮翊・右扶風。漢の時長安を此三區に分けた。

【五】耀芒動角　芒角は放射する光をいふ。三台は星の名。上台中台下台をいふ。共に六星あり、兩兩相比し、斗魁の下に在り。又三階といふ。上階を天子となし、中階を諸侯卿大夫となし、下階を士庶人となす。
【八】太史　天文曆象を掌る。
【九】明光殿　宮殿の名。
【一〇】慶雲　めでたき雲。壽星は星の名、南極老人星ともいふ。

荐食如蠶飛似雨。
雨飛蠶食千里間。
不見青苗空赤土。
河南長吏言憂農。
課人晝夜捕蝗蟲。
是時粟斗錢三百。
蝗蟲之價與粟同。
捕蝗捕蝗竟何利。
徒使飢人重勞費。
一蝗雖死百蝗來。
豈將人力競天災。
我聞古之良吏有善政。
以政驅蝗蝗出境。

荐食　蠶の如く飛ぶこと雨に似たり。
雨飛蠶食す千里の間、
青苗を見ず空しく赤土あり。
河南の長吏農を憂ふと言ひ、
人に課して晝夜蝗蟲を捕へしむ。
是時粟斗に錢三百、
蝗蟲の價粟と同じ。
蝗を捕へ蝗を捕ふ竟に何の利かある。
徒に飢人をして勞費を重ねしむ。
一蝗死すと雖も百蝗來る。
豈に人力を將つて天災と競はんや。
我聞く古の良吏善政有り、
政を以て蝗を驅り蝗境を出づと。

【荐食】　しきりに食ふ。

【六】　良吏　唐の太宗の年號。

又聞貞觀之初道欲昌。
文皇仰天吞一蝗。
一人有慶兆民賴。
是歲雖蝗不爲害。

又聞く貞觀の初道昌んならんと欲す。
文皇天を仰ぎて一蝗を呑めりと。
一人慶有れば兆民賴る。
是歲蝗ありと雖も害を爲さず。

【七】　文皇　太宗をいふ。

【八】　一人云云　書經の呂刑に見ゆ。一人は天子をいふ。天子が善を行へば人民皆其惠に浴するをいふ。

【題義】　地方の長官が無益の事をさせて人民の勞力と經費とを徒消するの愚を刺つた詩である。

【詩意】　頻に蝗を捕へてゐる者があるが、あれは一體どこの家の者であらう。天熱く日の長い時に蝗を捕へる爲に飢ゑて死ぬやうな苦をしてゐる。興元年中には久しく兵亂が續いた爲に陰陽の氣が傷害を受け、和氣が變じて蝗となり、河南・河北から始めて長安の地方まで及び、荐に稻を食ふこと蠶の桑を食ふが如く、羣を成して飛ぶことは雨のやうだ。それが千里の間にひろがつて、青い苗を悉く殘らず食ひ盡し、ただ赤土を餘すのみである。河南の長官は自ら農を憂ふと稱し、人民に割當てて蝗を捕へさせてゐる。時に米價は一斗三百錢であるが、蝗を一斗捕へるには丁度米一斗の代金ぐらゐの金がかかる。かかる金を費し蝗を捕へて何になるかといふに、徒に飢人をして勞力と費用とを重ねしむるのみで、一匹の蝗が死んでも更に百匹の蝗が來るのであるから何の役にも立たない。要するに人力では天災に勝つことは出來ないのだ。聞く所に據れば、古の良吏（後漢の魯恭をいふ。恭が

河南の中牟縣令となつた所が、鄰境には蝗の害があつたが中牟縣だけは其害を受けなかつた。）は善政を施した爲に蝗を境外に驅逐したといふ話だ。又貞觀の初に太宗皇帝は天を仰いで一匹の蝗を呑んだといふが、天子に善行があれば萬民其惠に浴するので、太宗が蝗を呑んだ歳には蝗は生じたが害をしなかつたさうだ。要するに、善政を布いて蝗が害をしないやうにするのが本で、蝗を捕へて其害を除かうとするのは抑末である。

昆明春　思王澤之廣被也

昆明春　王澤の廣被を思ふなり

(一)昆明春。昆明春。
春池岸古春流新。
影浸(二)南山(三)青滉瀁。
波沈(四)西日(五)紅(六)𤄍淪。
往年因旱靈池竭。
龜尾曳(七)塗魚喣(八)沫。
詔開(九)八水(一〇)注恩波。
千介萬鱗同日活。
今來(一一)淨淥水照天。
游魚(一二)鱍鱍蓮田田。
洲香杜(一三)若抽心短。
沙暖鴛鴦鋪翅眠。
動植飛沈性皆遂。
皇澤如春無不被。
漁者仍豐網罟資。
貧人又獲(一四)菰蒲利。
詔以昆明近帝城。
官家(一五)不得收其征。
菰蒲無租魚無稅。
近水之人感君惠。

【字解】【一】昆明　池の名、長安の西南に在り。
【二】南山　終南山。長安の南に在る山。
【三】滉瀁　泥なり。沫は泡なり、喣は息を吹くこと。
【四】𤄍淪　廣く波たつ貌。
【五】今來　現今。淨淥は水の清き貌。
【六】鱍鱍　尾を振ふ貌。田田は蓮葉の水に浮ぶ貌。
【七】杜若　かきつばた。
【八】動植　動物植物。飛沈は鳥と魚とをいふ。
【九】菰蒲　まこも、かば。
【一〇】官家　政府。

感君惠。獨何人。
吾聞率土皆王民。
遠民何疎近何親。
願推此惠及天下。
無遠無近同忻忻。
吳興山中罷榷茗。
鄱陽坑裏休稅銀。
天涯地角無禁利。
熙熙同似昆明春。

君の惠に感ずるは、獨何人ぞ。
吾聞く率土は皆王民なりと。
遠民何ぞ疎んぜられ近きは何ぞ親しまるる。
願はくは此惠を推して天下に及ぼし、
遠と無く近と無く同じく忻忻たらん。
吳興山中榷茗を罷め、
鄱陽坑裏稅銀を休め、
天涯地角無禁利を禁ずる無く、
熙熙として同じく昆明の春に似ん。

【題義】天子の恩澤の廣く天下に被るやうにと願ふ詩である。

【詩意】昆明池にも春がめぐつて來て、昔ながらの岸に春流を湛へてゐる。水面には青青とした終南山の影を浮べ、波間には紅の夕日を沈めてゐる。先年旱魃の爲に此池が涸上つてしまつて、鮒は泥に尾を曳き魚は泡に息を吹く有樣であつたが、德宗皇帝が詔をお下しになつて八水（涇・渭・滻・灞・

【一】率土　天下中。

【二】忻忻　よろこぶ貌。

【三】吳興　浙江省湖州府、茶の名産地。榷茗は茶を專賣すること。

【四】鄱陽　江西省饒州府、金銀銅鐵を產す。稅銀は採掘した銀に課稅すること。

【五】熙熙　やはらぐ貌。

灞・灃・潏の八川）を開通し、水を此池に注いだ爲に魚も貝も同時に活き返つた。今や水清くして天を照し、游ぐ魚は尾を掉かし蓮葉は波上に浮び、池中の洲には杜若が短く其心を抽出し、沙には暖に鴛鴦が翅を敷いて眠つてゐる。されば魚も鳥も皆其性を遂げ天子の惠澤に浴せぬものはない。漁夫は澤山の獲物があり、貧民も菰や蒲の利を得られる。おまけに昆明池は帝城の近くだから、政府でも其處から稅を取つてはならないとの詔があつたから、菰でも蒲でも魚類でも無稅で取ることが出來て、此池の近くに住む人民は皆君の惠に感じてゐる。さても君の惠に感ずるのは何人であるか。自分は天下の民は皆王民だと聞いてゐる。然るに遠方の民はなぜ疎んぜられて近くの人民のみがなぜ親愛されるのであらうか。願はくは此惠を徧く天下に及ぼし遠近を論せず皆欣欣として惠の露に潤ふやうにありたいものだ。吳興の山では茶の專賣を罷め、鄱陽の銀坑では銀に課稅することを罷め、天下到處民の利を取ることを禁ぜず、昆明池の近くの人民のやうに熙熙として皇恩に浴するやうにしたいものだ。

城鹽州　美聖謨而誚邊將也

城鹽州。城鹽州。
城在五原原上頭。

鹽州に城く、鹽州に城く。
城は五原原上の頭に在り。

城鹽州　聖謨を美して邊將を誚るなり

【字解】【一】鹽州　甘肅省寧夏府靈州の東南、花馬池の北に在り。
【二】五原　鹽州の古名。

蕃東節度鉢闡布。
忽見新城當要路。
金鳥飛傳贊普聞。
建牙傳箭集羣臣。
君臣赭面有憂色。
皆言勿謂唐無人。
自築鹽州十餘載。
左衽氈裘不犯塞。
晝牧牛羊夜捉生。
長去新城百里外。
諸邊急警勞戍人。
唯此一道無煙塵。
靈夏潛安誰復辯。

蕃東の節度鉢闡布、
忽ち新城の要路に當るを見る。
金鳥傳を飛ばして贊普聞く、
牙を建て箭を傳へて羣臣を集む。
君臣赭面して憂色有り、
皆言ふ唐に人無しと謂ふ勿れと。
鹽州に築きてより十餘載、
左衽氈裘塞を犯さず。
晝は牛羊を牧ひ夜は生を捉ふ、
長く新城を去る百里の外。
諸邊急警戍人を勞す、
唯此の一道のみ煙塵無し。
靈夏潛に安きも誰か復辯せん、

【三】蕃東節度　吐蕃の東方節度使。
【四】金鳥飛傳　急使を發して事を報すること。贊普は新唐書吐蕃傳に、其俗謂二雄一曰贊、丈夫曰普、故號三君長一曰三贊普一とある。
【五】建牙　牙は大將旗。傳箭は使者を驛すること。新唐書吐蕃傳に、其擊兵、以七寸金箭爲契、百里一驛、有三急兵一驛人驛前加二銀鶻一、甚急鶻益多とある。
【六】赭面　赤き顏。
【七】左衽　著物を左前にあはせること。夷狄の風なり。氈裘は毛織の服。夷狄の服なり。
【八】捉生　野生の禽獸を捕へる。
【九】新城　鹽州城。
【一〇】戍人　戍卒。警備の兵。
【一一】靈夏　靈は靈州、甘肅省寧夏府の南に在り、夏は中國。靈州あたりの中國の地といふ意。

秦原暗通何處見。
鄜州驛路好馬來。
長安藥肆黃著賤。
城鹽州。
鹽州未城天子憂。
德宗按圖自定計。
非關將略與廟謀。
吾聞高宗中宗世。
北虜猖狂最難制。
韓公創築受降城。
三城鼎峙屯漢兵。
東西亙絕數千里。
耳冷不聞胡馬聲。

秦原暗に通じて何處にか見ん。
鄜州の驛路より好馬來る、
長安の藥肆に黃著賤し。
鹽州に城く。
鹽州未だ城かざるとき天子憂ふ。
德宗圖を按じて自ら計を定む、
將略と廟謀とに關するに非ず。
吾聞く高宗中宗の世、
北虜猖狂して最も制し難し。
韓公創めて受降城を築く、
三城鼎峙漢兵を屯む。
東西亙絕す數千里、
耳冷なるも胡馬の聲を聞かず。

【一二】秦原　昔の秦の地方、長安附近をいふ。
【一三】鄜州　長安の北に在る州の名。好馬は駿馬。
【一四】藥肆　賣藥店。黃著は藥草の名。吐蕃に產す。
【一五】韓公　韓國公韓仁風。
【一六】三城　東西中の三受降城。漢兵は唐の兵。
【一七】亙絕　絕もヲヌルと訓ず。
【一八】耳冷　秋になること。秋になれば夷狄の入寇するが常とす。

(一七)如今邊將非無策。
心笑韓公築城壁。
相看養寇爲身謀。
各握强兵固恩澤。
願分今日邊將恩。
褒贈韓公封子孫。
誰能將此鹽州曲。
(二〇)翻作歌詞聞至尊。

如今邊將策無きに非ず、
心に韓公が城壁を築きしを笑ふ。
相看て寇を養つて身の謀を爲す、
各强兵を握つて恩澤を固うす。
願はくは今日邊將の恩を分ち、
韓公に褒贈して子孫を封せん。
誰か能く此鹽州の曲を將つて、
翻して歌詞と作して至尊に聞せん。

【題義】德宗皇帝の城を鹽州に築かしめたことを稱美し、邊將の態度を誚つたのである。

【詩意】鹽州は唐の西邊に在りて吐蕃に臨んでゐる。唐は此に城を築いて吐蕃の入寇を防ぐことにした。吐蕃の東方節度使たる鉢闡布は此城の要路に築かれたのを見て大に驚き、急使を馳せて其王に報告した。其王は早速命を傳へて羣臣を招集し、會議を開いた。君臣皆昂奮した顏色をして唐にも人物がないと傷つてはならぬと語り合つた。かくて鹽州城を築いてから十餘年の間、吐蕃入寇の禍なく、彼等は晝は牛羊を牧し夜は野獸を獵して活計を立て、遠く鹽州から百里の奥に退去した。故に他の邊境では警備に勞したが、ただ鹽州の一道だけは無事平穩であつて、靈州地方は人の知らぬ間に、いつしか安泰になり、長安のあたりまで交通が出來るやうになつた。こんな事は他の地方には見られないことだ。されば鄜州の驛路には吐蕃の駿馬が來たり、長安の藥肆には吐蕃の良藥黃著を安價に販賣するやうになつた。初め此に城を築かなかつた頃は、天子が吐蕃の入寇を御心配になつた。因つて德宗皇帝は親ら地圖を按じて築城の計をお立てになつた。此事は將軍の方略にもあらず、朝臣の謀議にもあらず、全く德宗の叡慮によつたのである。昔高宗・中宗の時、突厥が入寇して其勢制し難かつたので、韓國公は受降城を三個處に築いて中國の兵を駐屯せしめたので、秋になつても胡馬の聲を聞かないやうになつた。今の邊將も策略がないわけではなからうが、韓公築城の事を心中に冷笑し、互に顏を見合せて寇敵の勢を長養し、自己一身の謀に汲汲として、强兵を擅にして天子の恩寵を固うすることに憂身をやつしてゐる。願はくは今日邊將に對する恩寵を分ちて韓公を追褒し、其子孫を封じたいものだ。誰か能く此「城鹽州」の曲を飜譯して歌詞を作り天子の御耳に入れる者はないであらうか。

道州民　美賢臣遇明主也

(一)道州民多侏儒。

道州民　賢臣の明主に遇へるを美するなり

道州の民、侏儒多し。

【字解】【一】道州　湖南省永州

【一七】如今　只今。

【二〇】翻　音曲を辭句に譯すること。

長者不過三尺餘。
市作矮奴年進奉。
號爲道州任土貢。
任土貢。寧若斯。
不聞使人生別離。
老翁哭孫母哭兒。
一自陽城來守郡。
不進矮奴頻詔問。
城云臣按六典書。
任土貢有不貢無。
道州水土所生者。
只有矮民無矮奴。
吾君感悟璽書下。
歲貢矮奴宜悉罷。
道州民。
老者幼者何欣欣。
父兄子弟始相保。
從此得作良人身。
道州民。
民到于今受其賜。
欲說使君先下淚。
仍恐兒孫忘使君。
生男多以陽爲字。

長者三尺餘に過ぎず。
市うて矮奴と作して年ごとに進奉す、
號して道州の任土貢と爲す。
任土の貢、寧ろ斯の若くならんや。
聞かずや人をして生ながら別離せしめ、
老翁は孫を哭し母は兒を哭するを。
一たび陽城が來りて郡に守たりしより、
矮奴を進らず頻に詔問せらる。
城云く臣六典の書を按ずるに、
任土有を貢し無を貢せず。
道州の水土生ずる所の者、
只矮民有りて矮奴無しと。
吾君感悟して璽書下る、
歲ごとに矮奴を貢すること宜しく悉く罷むべしと。
道州の民。
老者幼者何ぞ欣欣たる。
父兄子弟始めて相保ち、
此より良人の身と作ることを得たり。
道州の民。
民今に到るまで其賜を受く、
使君を說かんと欲して先づ涙を下す。
仍つて恐る兒孫の使君を忘れんことを、
男を生めば多く陽を以て字と爲す。

府に屬す。侏儒は一寸法師、身體の短小な人。
【二】矮奴　一寸法師を奴隸として使ふ。
【三】任土貢　書經禹貢に、任レ土作レ貢とあり、其地に產する物を貢として納むること。
【四】陽城　人名。貞元十五年九月、道州刺史に任ぜらる。
【五】六典　書名。唐の制度を記述せるもの。
【六】璽書　御印を押したる文書。詔書なり。
【七】良人　良民なり。
【八】使君　刺史の尊稱。

【題義】賢臣が明君に遇ひ、其言が聽容せられたことを稱美したのである。
【詩意】道州には短身矮軀の人が多く、身の長の高い者でも、三尺餘に過ぎない。之を買つて矮奴と稱して毎年朝廷に進貢し、之を號して道州の任土貢と云ふ。任土貢といふものは豈此の如きものであ

らうか。骨肉の親をして生きながら離別せしめ、老翁は孫を哭し母は子を哭せしめ、其哭聲聞くに堪へない。然るに陽城が來りて道州の刺史となつてから、矮奴の朝貢を止めたので、天子頻りに詔を下して其理由を問ひ給うた。陽城對へて曰く、臣六典を按ずるに、任土貢とは、其土地に有るものを貢するので、無きものを貢するにあらず、道州の水土の產するところ、矮民はあれども矮奴は無しと。天子感悟して璽書を下し、矮奴の歲貢を全廢せしめられたので、道州の民老幼悉く欣欣として、父子兄弟鄕里に在りて相保護し以て生涯を送ることを得るを喜び、これより普通の良民となつた。されば道州の民今に至るも其恩惠を感謝し、陽使君の事を說かんとすれば先づ感泣して涙を垂れ、仍其子孫の陽城の德を忘るることを恐れ、男子を生めば多く陽の字を取つて其字とする。

馴犀　感爲政之難終也

馴犀馴犀通天犀。
軀貌駭人角駭雞。
海蠻聞有明天子。
驅犀乘傳來萬里。

馴犀　爲政の終へ難きを感ずるなり

【字解】【一】馴犀　ならされてゐる犀。通天犀とは犀の一種、其角の一尺以上なるを得て刻して魚となし、之を銜んで水に入れば、水爲に開くといふ。

【二】海蠻　南海の蠻國。

【三】乘傳　宿次馬車に乘る。

【四】大明宮　宮殿の名。

【五】六譯　六回通譯を重ねる。

【六】餓　秣なり。食はせること。

【七】瑤蕊　瑤は玉の如き草。蕊は鍼。

【八】迢遞　遙なる貌。

【八】上林　天子の御苑。

一朝得謁大明宮。
歡呼拜舞自論功。
五年馴養始堪獻。
六譯語言方得通。
上嘉人獸俱來遠。
蠻館四方犀入苑。
餓以瑤蕊鏁以金。
故鄕迢遞君門深。
海鳥不知鐘鼓樂。
池魚空結江湖心。
馴犀生處南方熱。
秋無白露冬無雪。
一入上林三四年。

一朝大明宮に謁することを得、
歡呼拜舞して自ら功を論ず。
五年馴養して始めて獻ずるに堪へ、
六譯して語言方に通ずるを得。
上人獸の俱に來ること遠きを嘉し、
蠻は四方に館し犀は苑に入れしむ。
餓するに瑤蕊を以てし鏁するに金を以てす、
故鄕迢遞として君門深し。
海鳥は鐘鼓の樂を知らず、
池魚は空しく江湖の心を結ぶ。
馴犀生るる處南方熱す、
秋は白露無く冬は雪無し。
一たび上林に入つて三四年、

又逢今歲苦寒月。
飲冰臥霰苦跧跼。
角骨凍傷鱗甲縮。
馴犀死。蠻兒啼。
向闕再拜顏色低。
奏乞生歸本國去。
恐身凍死似馴犀。
君不見建中初。(一〇)
馴象生還放林邑。(一一)
君不見貞元末。
馴犀凍死蠻兒泣。
所嗟建中異貞元。
象生犀死何足言。

又今歲苦寒の月に逢ふ。
冰に飲み霰に臥して跧跼に苦み、
角骨凍傷し鱗甲縮まる。
馴犀死して、蠻兒啼き、
闕に向つて再拜して顏色低る。
奏して乞ふ生きて本國に歸り去らん、
恐らくは身凍死して馴犀に似んことを。
君見ずや建中の初、
馴象生還林邑に放たしむるを。
君見ずや貞元の末、
馴犀凍死して蠻兒泣くを。
嗟く所建中は貞元に異り、
象は生き犀は死す何ぞ言ふに足らん。

【九】跧跼　せぐくまる。

【一〇】建中　德宗の年號。

【一一】林邑　地名。今の暹羅地方。

【題義】善政を爲しても終まで全うすることは難いものだといふことを述べたのである。貞元十二年に南海から馴犀を獻上したので、之を上苑に飼つて置いたが、翌十三年冬の大寒の爲に死んでしまつた。此事に感じて作つたのである。

【詩意】通天犀といふ馴らされた犀がある。其體貌は人を驚かし其角は鷄を驚かす。南海の蠻人がはるばる海山を越えて唐の明天子に獻上する爲に、此犀を牽いて唐に來た。蠻人は大明宮で天子に拜謁を賜はり、歡呼拜舞して己の功勞を述べ立てた。其言に據れば、五年も馴らして始めて獻上するまでになつた。又唐の京まで來るには六回も通譯を重ねたとの事である。天子は蠻人と犀とが遠方から來たことを嘉し給ひ、蠻人には諸處を見物させ、犀をば御苑に養はせた。瑤草を食はせ金の鎖で繫ぎなどして置くが、馴犀の身に取つては一向ありがたくもない。ただ宮門深き處に遙なる故國を慕つてゐるのみである。丁度鐘鼓の音樂を奏して祭られても海鳥には其味がわからず、(事魯語に見ゆ)池に養はるる魚は初め住んでゐた江湖を慕つてやまないやうなものだ。馴犀の生れた處は南方熱帶の國で、白露も降らず雪も降らない。それが一たび御苑に飼はれて三四年(事實と合はず)を經、今年の苦寒に氷のはつた處に飲み霰の上に寢て、身も骨も爲に縮んでしまつて遂に死んだ。すると蠻人が宮門に向つて再拜し、しをたれた樣子をして、どうぞ生きて本國へ歸りたいもので御座る。この寒さでは馴犀のやうに私も凍死致すであらうと嘆願した。諸君見られよ、建中の初には馴らされた象を林邑へ生

きながら還されたのに、貞元の末には馴犀が凍死して蠻人が泣いて歸國を願つた。予は建中の仁政が貞元に至つて終を全うしないことを嘆く者である。ただ象は生き犀は死んだといふだけならば何も言ふべき程の大問題ではない。

五絃彈　惡鄭之奪雅也　五絃彈　鄭の雅を奪ふを惡むなり

五絃彈。五絃彈。
聽者傾耳心寥寥。
趙璧知君入骨愛。
五絃一一爲君調。
第一第二絃索索。
秋風拂松疎韻落。
第三第四絃泠泠。
夜鶴憶子籠中鳴。

五絃を彈じ、五絃を彈ず、
聽く者耳を傾けて心寥寥たり。
趙璧知る君が骨に入つて愛するを、
五絃一一君が爲めに調ふ。
第一第二絃索索、
秋風松を拂つて疎韻落つ。
第三第四絃泠泠、
夜鶴子を憶うて籠中に鳴く。

【字解】【一】五絃　五絃琴。樂中吟にも五絃琴の流行せる由を述べてある。
【二】寥寥　沈靜すること。
【三】趙璧　人名。五絃の名手。
【四】索索　さびしき調。
【五】疎韻　まばらな聲韻。
【六】泠泠　清涼の調。

第五絃聲最掩抑。
隴水凍咽流不得。
五絃竝奏君試聽。
凄凄切切復錚錚。
鐵擊珊瑚一兩曲。
氷寫玉盤千萬聲。
鐵聲殺。冰聲寒。
殺聲入耳膚血慘。
寒氣中人肌骨酸。
曲終聲盡欲半日。
四座相對愁無言。
座中有一遠方士。
唧唧咨咨聲不已。

第五絃聲最も掩抑、
隴水凍り咽んで流れ得ず。
五絃竝び奏す君試に聽け、
凄凄切切復錚錚。
鐵珊瑚を擊つ一兩曲、
氷玉盤に寫す千萬聲。
鐵聲は殺なり、冰聲は寒なり。
殺聲耳に入つて膚血慘に、
寒氣人に中つて肌骨酸し。
曲終り聲盡きて半日ならんと欲す、
四座相對して愁へて言無し。
座中に一遠方の士有り、
唧唧咨咨として聲已まず。

【七】掩抑　おさへつける。
【八】隴水　甘肅省鞏昌府に隴山あり。其吸九回、上に清水あり四方に注下す。所謂隴頭水なり。
【九】凄凄　風の寒き調。切切は金切なる調。錚錚は金の聲。
【一〇】玉盤　玉で製した盆。寫は瀉に通ず。
【一一】鐵聲殺　殺は殺氣を含むこと。この二句通行本誤り脫す。
【一二】唧唧　蟲の聲。咨咨は嘆く聲。

自歎今朝初得聞。
始知孤負平生耳。
唯憂趙璧白髮生。
老死人間無此聲。
遠方士。
爾聽五絃信爲美。
吾聞正始之音不如是。
正始之音其若何。
朱絃疎越清廟歌。
一彈一唱再三歎。
曲淡節稀聲不多。
融融曳曳召元氣。
聽之不覺心平和。

自ら歎ず今朝初めて聞くを得たるを、
始めて知る平生の耳に孤負するを。
唯憂ふ趙璧白髮生じ、
老死して人間此聲無からんことを。
遠方の士。
爾五絃を聽いて信に美なりと爲す、
吾聞く正始の音は是の如くならず。
正始の音其れ若何、
朱絃疎越して清廟を歌ふ。
一彈一唱再三歎ず、
曲淡く節稀にして聲多からず。
融融曳曳として元氣を召く、
之を聽けば覺えず心平和なり。

【一三】孤負　そむく。

【一四】正始之音　正しき始めの音樂。

【一五】朱絃云云　禮記樂記に、清廟之瑟、朱絃而疎越、壹唱而三歎、有遺音者矣とある。清廟之瑟とは清廟の詩を歌ふ時彈ずる所の瑟なり。朱絃とは朱絲を練りて絃となすをいふ。練れば聲濁るなり。越とは瑟底の孔をいふ。之を疎通して聲をして遲からしむ。故に疎越といふ。

人情重今多賤古。
古瑟有絃人不撫。
更從趙璧藝成來。
二十五絃不如五。

人情今を重んじて多く古を賤む、
古瑟絃有るも人撫せず。
更に趙璧藝成りてより來、
二十五絃五に如かず。

【題義】鄭は鄭聲、卽ち淫靡な俗樂をいふ。雅は雅樂である。俗樂が高尙な雅樂を壓倒して世間に流行してゐることを恨んで作つた詩である。

【詩意】五絃琴を彈すると、聽く人は耳を傾け氣を奪はれて聽き惚れる。されば此技の達人趙璧は世人が心から此音を愛好するを知り、世人の爲に一一五絃の音を調べる。第一第二の絃を調べると、其音索索として秋風が松の枝を拂ふやうである。第三第四の絃を調べると、其音泠泠として夜の鶴が子を憶うて籠の中で鳴くやうである。第五の絃は最もおさへつけるやうで、譬へば隴頭の水が咽んで流れない時のやうだ。この五絃を同時に搔き鳴らす時は、凄凄切切また錚錚として、或は鐵を以て珊瑚を擊つが如く、氷塊を玉盤に瀉ぐが如くである。鐵聲は殺氣を帶び氷聲は人の心を寒からしめる。殺聲を聞けば流血の慘を思はしめ、寒氣に遇へば肌骨を痛ましめる。趙璧の妙技を聽いて半日を經るまで、一座の人人は皆感に堪へざる者の如く物も言はずに相對して坐つてゐる。一座の中に一人の遠方

【一六】融融　和樂の貌。曳曳は洩洩、又は澤澤に同じ、舒散の貌。左傳隱公元年に見ゆ。

【一七】元氣　天地の間に流行する氣。

【一八】二十五絃　瑟をいふ。五は五絃琴。

の士がゐて頻に嘆聲を漏らしてゐる。其人の言ふには、こんな結構な音樂は今朝初めて聞いた。今迄かかる音樂を聽かせなかつたのは耳に對してすまなかつたと思ふ。それにつけても心配なことは、趙璧が老死して此妙音が世間になくなりはせぬかといふことだと言つてゐる。ああ遠方の士よ、君は五絃琴の音を信に美音であると思つてゐるが、自分の聞く所では、正始の雅音といふものはこんなものではない。正始の音は如何なるものかといへば、清廟の詩を歌ふに瑟といふ樂器を用ひ、瑟の底には孔がまばらにあけてあつて聲を遲緩にする。その絃は練つた朱絲を用ひて音を濁らせるやうにしてある。この朱絃を彈じて一人が一句を唱へると二三人の人が從つて歎稱する。其曲調があつさりとしてあくどくない。然もやはらぎのびのびとして天地の元氣をも喚び起すほどで、聽く者をして平和な心に浸らせる。人情は新しきを好んで古きを賤むものだ。されば古瑟などは今は誰も彈ずる者がなく、殊に趙璧の藝が成熟してからは、五絃琴が大流行になつて、二十五絃の瑟は到底五絃琴に敵することは出來なくなつた。

蠻子朝　刺將驕而相備位也

蠻子朝。　蠻子朝　將驕りて相位に備はるを刺るなり

蠻子朝す。

【字解】【一】蠻子　南方の蠻人。

汎皮船兮渡繩橋。
來自嶲州道路遙。
入界先經蜀川過。
蜀將收功先表賀。
臣聞雲南六詔蠻。
東連牂牁西接蕃。
六詔星居初瑣碎。
合爲一詔漸强大。
開元皇帝雖聖神。
唯蠻倔强不來賓。
鮮于仲通六萬卒。
征蠻一陣全軍沒。
至今西洱河岸邊。

皮船を汎べ繩橋を渡り、
嶲州より來りて道路遙なり。
界に入つて先づ蜀川を經て過ぐ、
蜀將功を收めて先づ表賀す。
臣聞く雲南六詔の蠻、
東牂牁に連り西蕃に接す。
六詔星居して初め瑣碎なり、
合して一詔と爲つて漸く强大。
開元の皇帝聖神なりと雖も、
唯蠻のみ倔强にして來賓せず。
鮮于仲通が六萬の卒、
征蠻の一陣に全軍沒す。
今に至るまで西洱河岸の邊、

【一】皮船　獸皮で作つた船。
【二】繩橋　繩で作つた橋。
【三】嶲州　今の雲南地方。漢の嶲嶲郡。
【四】蜀川　今の四川省。
【五】蜀將　劍南西川節度使韋皐。
【六】表賀　賀表を奉る。
【七】六詔蠻　舊唐書南詔蠻傳に、「南詔蠻ハモト烏蠻ノ別種、ソノ先渠帥六アリ、自ラ六詔ト號ス」云云とある。
【八】牂牁　漢の郡名、今の雲南貴州の地方。蕃は吐蕃。
【九】星居　星の如く散在する。瑣碎は細小なること。
【一〇】開元皇帝　玄宗皇帝。
【一一】倔强　つよいこと。
【一二】鮮于仲通　人名。天寶十三載兵六萬を率ゐて雲南王閣羅鳳を西洱

箭孔刀痕滿枯骨。
誰知今日慕華風。
不勞一人蠻自通。
誠由陛下休明德。
亦賴微臣誘諭功。
德宗省表知如此。
笑令中使迎蠻子。
蠻子道從者誰何。
摩挲俗羽雙隈伽。
清平官持赤藤杖。
大將軍繫金呿嗟。
異牟尋男尋閤勸。
特敕召對延英殿。

箭孔刀痕枯骨に滿つ。
誰か知らん今日華風を慕ひ、
一人を勞せずして蠻自ら通せんとは。
誠に陛下休明の德に由るも、
亦微臣が誘諭の功に賴れりと。
德宗表を省て此の如きを知り、
笑つて中使をして蠻子を迎へしむ。
蠻子道從の者は誰何ぞ、
摩挲俗羽雙隈伽。
清平の官は赤藤の杖を持ち、
大將軍は金呿嗟を繫く。
異牟尋が男尋閤勸、
特に敕して延英殿に召對す。

【一四】休明　休は美なり。
【一五】微臣　蜀將自ら謂ふ。
【一六】中使　宮中の使者。
【一七】道從　先導し隨從する。誰何は誰人何者。
【一八】摩挲　手で撫摩すること。俗羽以下未詳。
【一九】清平官　唐宋詩醇に新唐書南蠻傳を引き、「清平官ハ國事ノ輕重サ決スル所以ニシテ猶ホ唐ノ宰相ノ如シ」とある。
【二〇】大將軍　唐宋詩醇に、「大軍將ノ訛ナラン」とある。呿嗟は、なめしかはの帶。
【二一】異牟尋　南詔王の名。尋閤勸は異牟尋の子。
【二二】延英殿　宮殿の名。

上心貴在懷遠蠻。
引臨玉座近天顏。
冕旒不垂親勞倦。
賜衣賜食移時對。
移時對不可得。
大臣相看有羨色。
可憐宰相拖紫佩金章。
朝日唯聞對一刻。

上の心貴ぶは遠蠻を懷くるに在り、
引いて玉座に臨みて天顏に近かしむ。
冕旒垂れず親ら勞倦し、
衣を賜ひ食を賜ひて時を移して對す。
時を移すまで對すること、得可からず。
大臣相看て羨色有り。
憐む可し宰相紫を拖き金章を佩ぶるも、
朝日唯聞く對すること一刻のみと。

【二三】冕旒　天子の冠。旒は冠の前後に垂れてあるもの。勞倦はれぎらふこと。
【二四】拖紫　紫は紫綬。金章は金印。
【二五】一刻　十五分の時間。

【題義】武將が驕りて宰相は唯位に備はるのみなることを刺つた詩である。
【詩意】蠻夷が來朝した。獸皮で作つた船に乘り、繩で架けた橋を渡りなどして嶲州の方から來た。嶲州は西南の蠻夷で其道程が遙遠である。中國の界に入りて先づ蜀から過ぎると、蜀の守將蠻夷懷柔の功を收め賀表を朝廷に捧げて「雲南の六詔蠻は東は牂牁に連り西は吐蕃に連り、初は諸處に散居して星の天に在る如くなりしが、合して一詔となつてから漸く强大を致し、玄宗の如き聖神の御德を以

てしても之を來朝せしむる能はず、鮮于仲通六萬の兵を以て之を征するも、一戰にして全軍覆沒し、今に至るも西洱の河岸に當時戰歿者の遺骨を見る。其遺骨は刀箭の創痕を以て蔽はれてゐる。激戰の狀想ふべし。然るに其倔强なる蠻族も、今や中國の德風を慕ひ、一介の使を勞せずして自ら來りて歸を通ずるに至つた。是れ陛下の聖德に由ると雖も、亦臣等勸誘諭告の功に由るので御座る」と、申上げた。德宗皇帝其表を見て此の如きを知り、笑つて中使に命じ蠻子を迎へしめた。蠻子の拜謁する時先導隨從する者は何人ぞといふに、清平官卽ち彼國の宰相が赤藤杖を携へ、其大將軍が金色の草帶を繫けて從つた。天子特に敕して延英殿に召對す、天子の御心は遠蠻を懷柔するを貴ぶゆゑ、更に玉座に引いて天顏に咫尺せしめ、冕旒をも垂れず龍顏の見えるやうにして、親しく勞問して衣食を賜ひ、召對時を移した。實に是れ異數の光榮であつて、朝廷の諸大臣も羨望の色あり、紫綬金章を佩びたる宰相も登朝の日、唯一刻の拜謁あるのみなるに、天子の蠻子に謁を賜ふこと此の如く叮嚀なるを見ても、宰相空しく位に備はり、徒らに至尊をして社稷を憂へしむるの狀あること察すべきである。

驃國樂　欲王化之先邇後遠也

驃國樂。驃國樂。

驃國樂、驃國樂、驃國樂、王化の邇きを先にし遠きを後にせんことを欲するなり

【字解】【一】驃國　今の緬甸地方に在りし國の名。新唐書禮樂志に、「貞元十七年、驃國王雍羌ソノ弟悉利移城主舒難陀ヲ遣シ、其國樂ヲ獻ズ。韋皐其聲ヲ譜次シテ以テ獻ズ」とある。

【二】南音　南蠻の音樂。正朔は唐の曆なり。

【三】立仗　儀仗を備へる。紫庭は宮庭なり。

【四】鈸鐮　黃色の綿で作つた玉。天子の兩耳のあたりに垂れる。妄に聽かざるを意味す。

【五】玉螺　玉で飾つた法螺の貝。椎髻は頭のまげ。

【六】文身　いれずみした身體。

【七】珠纓　珠で飾つた冠の紐。星宿は星。

【八】花鬘　美しきかつら。斗藪は、ふるふこと。

出自大海西南角。
雍羌之子舒難陁。
來獻南音奉正朔。
德宗立仗御紫庭。
鈸鐮不塞爲爾聽。
玉螺一吹椎髻聳。
銅鼓一擊文身踊。
珠纓炫轉星宿搖。
花鬘斗藪龍蛇動。
曲終王子啓聖人。
臣父願爲唐外臣。
左右歡呼何翕習。
至尊德廣之所及。

大海西南の角より出づ。
雍羌が子舒難陁、
來つて南音を獻じて正朔を奉ず。
德宗仗を立てて紫庭に御し、
鈸鐮塞がず爾が爲に聽く。
玉螺一たび吹いて椎髻聳え、
銅鼓一たび擊ちて文身踊る。
珠纓炫轉して星宿搖ぎ、
花鬘斗藪して龍蛇動く。
曲終りて王子聖人に啓す、
臣が父唐の外臣たらんことを願ふと。
左右歡呼して何ぞ翕習たる、
至尊德の廣きの及ぶ所なりと。

須臾百辟詣閤門。
俯伏拜表賀至尊。
伏見驃人獻新樂。
請書國史傳子孫。
時有擊壤老農父。
暗測君心開獨語。
聞君政化甚聖明。
欲感人心致太平。
感人在近不在遠。
太平由實非由聲。
觀身理國國可濟。
君如心兮民如體。
體生疾苦心憯悽。

須臾に百辟閤門に詣り、
俯伏拜表して至尊に賀す。
伏して驃人の新樂を獻るを見、
國史に書して子孫に傳へんと請ふ。
時に擊壤の老農夫有り、
暗に君の心を測りて閒に獨語す。
聞く君政化甚だ聖明、
人心を感せしめて太平を致さんと欲すと。
人を感せしむるは近きに在つて遠きに在らず、
太平は實に由りて聲に由るに非ず。
身を觀て國を理むれば國濟ふ可し、
君は心の如く民は體の如し。
體疾苦を生ずれば心憯悽なり、

【九】王子　舒難陁を指す。聖人は唐の天子を指す。
【一〇】俯伏　多く集る貌。
【一一】百辟　百官なり。
【一二】拜表　賀表を奉る。
【一三】憯悽　痛むこと。

民得和平君愷悌。
貞元之民若未安。
驃樂雖聞君不歡。
貞元之民苟無病。
驃樂不來君亦聖。
驃樂驃樂徒喧喧。
不如聞此芻蕘言。

民和平を得れば君愷悌なり。
貞元の民若し未だ安からずんば、
驃樂聞くと雖も君歡ばず。
貞元の民苟も病無くんば、
驃樂來らざるも君亦聖なり。
驃樂驃樂徒に喧喧たり、
此芻蕘の言を聞かんには如かず。

【一四】愷悌　やはらぎ楽む。
【一五】貞元　德宗の年號。
【一六】芻蕘　芻は草を刈ること、蕘は薪を採ること、賤民をいふ。

【題義】天子の德化の近きを先にして遠きを後にせられんことを望む旨を述べたのである。
【詩意】驃國の音樂は、大海西南の一隅より出たもので、其國王雍羌の子舒難陁が來朝して、其國の音樂を獻じ、唐の正朔を奉ずることになつた。德宗皇帝は儀仗を備へて宮庭に臨御し、黛黛耳を塞がずして之を聽きたまふ。玉螺を吹くと、槌の形の蠻人の髓が聳え立ち、銅鼓を擊ちて文身の人が踊り出す。珠玉を聯ね垂れた冠の紐が列星の動搖するが如く、花のかつらは龍蛇の動くが如くである。曲終りて王子舒難陁天子に啓奏するやう、「臣が父雍羌は、唐に臣屬して外藩を守らんことを願うて居ります」と。左右の朝臣歎呼して相聚合し、「天子聖德の廣く及ぶところで御座る」と申上げた。忽ちに

して百官宮門に至り、俯伏して賀表を捧げて、天子の德を頌し、伏して驃國人の新樂を獻ずるを聞き、國史に書して子孫に傳へんと願うた。時に壤を擊つの老農夫ありて、窃に天子の大御心を測り奉りて閒に獨語した。「聞けば天子の政化甚だ聖明にして、民心を感化して太平を致さんとし給ふといふ。民心を感化するは近きにありて遠きにあらず。太平は其實を主として聲を採らず。近く身に顧みて國を治むれば國自ら治まるのである。國家を以て人身に譬へて見れば、君は心の如く、民は身體の如きものである。身體に疾患あれば心の痛み悲むが如く、民に疾苦あるは君の憂である。民和平にして君も樂易するのである。貞元の民若し未だ安からざるところあれば、驃國の新樂を聞くも君樂まず、貞元の民に疾苦なくんば、驃國新樂を獻せざるも、君に聖人の德があるのである。驃樂は其聲徒に喧しきのみにて、何の效かあらん。寧ろ我等賤民の言を聽き、民の疾苦を察し、善政を施すにまさることはない」と。

縛戎人　達窮民之情也

縛戎人　窮民の情を達するなり

縛戎人。縛戎人。
耳穿面破驅入秦。

縛戎人、縛戎人、
耳穿たれ面破れ驅られて秦に入る。

【字解】【一】縛戎人　しばられたエビス。

天下矜憐不忍殺。
詔徙東南吳與越。
黃衣小使錄姓名。
領出長安乘遞行。
身被金瘡面多瘠。
扶病徒行日一驛。
朝飡飢渴費杯盤。
夜臥腥臊汚牀席。
忽逢江水憶交河。
垂手齊聲嗚咽歌。
其中一虜語諸虜。
爾苦非多我苦多。
同伴行人因借問。

天子矜憐して殺すに忍びず、
詔して東南の吳と越とに徙す。
黃衣の小使姓名を錄し、
領して長安を出て遞に乘じて行く。
身は金瘡を被り面多く瘠す、
病を扶けて徒行すること日に一驛。
朝飡には飢渴杯盤を費す、
夜臥には腥臊牀席を汚す。
忽ち江水に逢うて交河を憶ひ、
手を垂れ聲を齊うして嗚咽して歌ふ。
其中一虜諸虜に語る、
爾が苦み多きに非ず我が苦多しと。
同伴の行人因つて借問すれば、

【二】秦　長安の都。昔の秦の地なるゆゑにいふ。
【三】小使　小役人。
【四】遞　宿次馬車。
【五】朝飡　朝食。杯盤は杯や皿。
【六】腥臊　なまぐさいこと。
【七】江水　揚子江。交河は蓄地に在る川の名。

欲説喉中氣憤憤。
自云鄉管本涼原。
大曆年中沒落蕃。
一落蕃中四十載。
身著皮裘繫毛帶。
唯許正朝服漢儀。
斂衣整巾潸淚垂。
誓心密定歸鄉計。
不使蕃中妻子知。
暗思幸有殘筋骨。
更恐年衰歸不得。
蕃候嚴兵鳥不飛。
脫身冒死奔逃歸。

説かんと欲して喉中氣憤憤たり。
自ら云ふ鄉管は本と涼原、
大曆年中蕃に沒落す。
一たび蕃中に落ちて四十載、
身皮裘を著毛帶を繫く。
唯正朝漢儀に服するを許す、
衣を斂め巾を整へて潸に淚垂る。
心に誓つて密に歸鄉の計を定め、
蕃中の妻子をして知らしめず。
暗に思ふ幸に殘の筋骨有り、
更に恐る年衰へて歸り得ざらんことを。
蕃候兵を嚴にして鳥だに飛ばず、
身を脫し死を冒して奔逃し歸る。

【八】鄉管　原籍地。涼原は涼州の原、卽ち甘肅省涼州府。
【九】大曆　唐の代宗の年號。蕃は吐蕃。
【一〇】四十載　四十年。
【一一】正朝　正月の元日。
【一二】蕃候　蕃人の番兵。

晝伏宵行經大漠。
雲陰月黑風沙惡。
驚藏青塚寒草疎。
偸度黃河夜氷薄。
忽聞漢軍鼙鼓聲。
路傍走出再拜迎。
游騎不聽能漢語。
將軍遂縛作蕃生。
配向江南卑濕地。
豈無存卹空防備。
念此呑聲仰訴天。
若爲辛苦度殘年。
涼原鄉井不得見。

晝は伏し宵は行きて大漠を經、
雲陰く月黑うして風沙惡し。
驚きて青塚に藏るれば寒草疎に、
偸に黃河を度れば夜氷薄し。
忽ち漢軍の鼙鼓の聲を聞き、
路傍に走り出でて再拜して迎ふ。
游騎は聽かず能く漢語するを、
將軍遂に縛して蕃生と作す。
配せられて江南卑濕の地に向ふ、
豈に存卹無からん空しく防備す。
此を念うて聲を呑み仰いで天に訴ふ、
若爲ぞ辛苦殘年を度らん。
涼原の鄉井見るを得ず、

【一三】大漠　大きな沙漠。
【一四】青塚　漢の元帝の宮女で後匈奴に嫁し、遂に匈奴で死んだ王昭君の墓。歸化城の南三十里に在りといふ。
【一五】鼙鼓　馬上で打つ鼓。
【一六】游騎　巡行の騎兵。
【一七】蕃生　吐蕃人。
【一八】存卹　存問し恤れむ。

胡地妻兒虚棄捐。
沒蕃被囚思漢土。
歸漢被劫爲蕃虜。
早知如此悔歸來。
兩地寧如一處苦。
縛戎人。
戎人之中我苦辛。
自古此寃應未有。
漢心漢語吐蕃身。

胡地の妻兒虚しく棄捐す。
蕃に沒しては囚はれて漢土を思ひ、
漢に歸つては劫かされて蕃虜とせらる。
早く此の如きを知らば歸來することを悔いん、
兩地寧一處の苦みに如かんや。
縛戎人、
戎人の中に我苦辛す。
古より此寃應に未だ有らざるべし、
漢身漢語吐蕃の身。

【題義】困苦に泣く窮民の情を上に通ずる爲に作つた詩である。

【詩意】縛られた戎の人がある。耳には孔をあけられ顏はひつかかれて長安へ追ひ立てられて來た。天子は憐を垂れて殺すに忍びず、之を東南の呉越の地方に徙さしめ給うた。因つて黃衣を著た小役人が彼等の姓名を帳簿に書き留め、之を宰領して宿次馬車に乘つて呉越に送り行くことになつた。見れば彼等戎人は身に切瘡を受け面は痩せ枯れてゐる。病を押して歩行するのであるから、一日かかつても僅に一驛ぐらゐしか行けない。朝飯には飢ゑの爲に貪り食ひ、夜寢るには腥い身で牀席を汚すといふ狀態である。進んで揚子江まで行つた所が忽ち故郷の交河を思ひ出し、聲を合せて咽び泣いた。中に一人の虜が他の戎共に對して、「俺の苦は到底お前等の苦の比ではない」といふ。因つて同行の仲間が其譯を問ふと、大に辯じ立てる積りらしいが喉に憤激の情がつまつて頓には言葉も出ない。やや暫くして語る所に據れば、「俺の原籍地は涼州であるが、大曆年間に吐蕃の爲に捕獲せられた。其れ以來四十年の間、俺は蕃中の仲間にはひつて蕃人同樣の身裝をしてゐた。蕃人の規則では唯正月の元日だけは我我漢人が漢の身裝をすることを許すので、俺も衣巾を整へて漢の裝をすると悲みに堪へず、蕃中の妻子（この人は蕃人を妻としてゐたのであらう）にさへ知らせずに、こつそりと故郷の涼州へ逃げて歸らうと決心し心に思うた。今ならばまだ殘れる筋骨もあるから歸れるが、この上衰へては歸らうにも歸られない。今が倔强の逃げ時だと。が、蕃人の見張が嚴重で鳥さへ飛べないくらゐであつたが、辛うじて隙をねらつて逃げ歸つた。晝は草葉の蔭に匿れ夜は沙漠の中を行き、月暗く風悲しき時、驚いて靑塚のあたりに身を潛めると冬枯の草疎に、窃に黃河を渡れば氷が薄くて覺えず膽を冷やした。忽ち漢軍の鼓の音を聞き、やれ嬉しやと再拜して出迎へると、巡行の騎兵は俺が漢語をよく話すのも聽かずに將軍の處へつき出したので、將軍は俺を吐蕃人として縛つてしまつた。それが爲に今

【一九】兩地　漢と蕃。

【二〇】此寃　こんな無實の罪。

後江南の卑濕の地に流されて行くのだが、お上では憐恤を垂れて下さらぬのではないが、如何にせん慣れぬ風土であるから邪氣の防ぎやうもない。此事を思ひ聲を呑んで天に訴へる。涼州の故郷は復見るべからず、胡地の妻子は振り棄ててしまつて、どうして辛苦して衰老の身を送らうかと。ああ吐蕃に捕はれては漢土を思ひ、漢土に歸りては劫かされて蕃人と誤認せられた。こんなことと知つたら歸らないのであつた。兩地で苦むよりは寧ろ一地で苦んだ方がよい。多くの縛られた戎の中でも、俺は殊更苦がひどい。昔から俺ほど無實の罪に泣く者はあるまい。心も言葉も漢人でありながら身は吐蕃人として縛られてゐるのだ。」との話である。

白樂天詩集　卷四

諷諭四　新樂府下　三十首

驪宮高　美天子重惜人之財力也

驪宮高　天子の人の財力を重惜するを美するなり

高高驪山上有宮。　高高たる驪山上に宮有り、
朱樓紫殿三四重。　朱樓紫殿三四重。
遲遲兮春日。　遲遲たる春日には、
玉甃暖兮溫泉溢。　玉甃暖にして溫泉溢れ、
嫋嫋兮秋風。　嫋嫋たる秋風には、
山蟬鳴兮宮樹紅。　山蟬鳴いて宮樹紅なり。

【字解】【一】驪山　陝西省西安府臨潼縣に在る山の名。玄宗皇帝の開元十一年溫泉宮を此山に建て屢〻行幸あり、天寶六載華淸宮と名を改めた。
【二】遲遲　春の日の永くて容易に暮れぬさま。
【三】玉甃　浴場の石疊。
【四】嫋嫋　秋風のふく貌。

翠華不來兮歲月久。
墻有衣兮瓦有松。
吾君在位已五載。
何不一幸於其中。
西去都門幾多地。
吾君不遊有深意。
一人出兮不容易。
六宮從兮百司備。
八十一車千萬騎。
朝有宴飫暮有賜。
中人之產數百家。
未足充君一日費。
吾君修己人不知。

翠華來らずして歲月久し、
墻に衣有り瓦に松有り。
吾君位に在すこと已に五載、
何ぞ一たび其中に幸したまはざる。
西のかた都門を去ること幾多の地ぞ、
吾君の遊びたまはざるは深意有り。
一人出でたまふこと容易ならず、
六宮從つて百司備はる。
八十一車千萬騎、
朝には宴飫有り暮には賜有り。
中人の產數百家、
未だ君が一日の費に充つるに足らず。
吾君己を修む人知らず、

【五】翠華　天子の御旗、翠羽を以て飾る、故にかくいふ。
【六】瓦有レ松　屋根瓦の間に小さい松の生えること。
【七】吾君　吾君は唐の憲宗。五數は五年。
【八】都門　長安の都の門。
【九】一人　天子をいふ。
【一〇】六宮　天子の後宮をいふ。百司は百官。
【一一】八十一車　天子の鹵簿には八十一乘の屬車從ふ。
【一二】宴飫　盛宴なり。
【一三】中人　中產階級の人民。

不自逸兮不自嬉。
吾君愛人人不識。
不傷財兮不傷力。
驪宮高兮高入雲。
君之來兮爲一身。
君之不來兮爲萬人。

自ら逸せず自ら嬉まず。
吾君人を愛す人識らず、
財を傷はず力を傷はず。
驪宮高し高く雲に入る。
君の來るは一身の爲なり、
君の來らざるは萬人の爲なり。

【題義】天子が人民の財力を徒費することを憚り安に行幸し給はざることをほめて作つた詩である。

【詩意】高い高い驪山の上に天子の離宮があつて、朱樓紫殿三層も四層も重なつてゐる。長くのどかな春の日には、玉でたたんだ暖かな石疊に溫泉が溢れ、風そよぐ秋には蟬が鳴き御苑の樹がもみぢするが、天子の御車來らず、空しく歲月を經過し、墻は苔の衣を蒙り、瓦のぬひめには松が生ひ出づる有樣である。今の天子在位五年の久しき、一たびも此離宮に臨幸せられぬは何故であらう。西皇居を隔つること遠からず、然るに遊幸したまはざるは、深き思召のあることであらう。上御一人の出御は容易の事にあらず、六宮の妃嬪媵妾隨從して百官總べて扈從し、八十一車千萬騎の行列、朝には宴會暮には恩賜の品品、中產の人數百家の資財を費しても未だ天子御一人一日の御遊の費用を辨ずるには

足らない。吾君の德を修むること世人未だ知らず、上御一人にて自ら嬉遊したまはず、國民を愛撫したまふも人其聖意の在るところを知らず、國民の財力を傷損するを憚りて敢て遊幸したまはぬのである。されば驪山の離宮空しく高く雲に入りて聳ゆるのみ。天子此處に臨幸あらせらるるは御一身のためで、御臨幸なきは國家萬民のためである。

百鍊鏡　辨皇王鑒也

百鍊鏡。
鎔範非常規。
日辰置處靈且奇。
江心波上舟中鑄。
五月五日日午時。
瓊粉金膏磨瑩已。
化爲一片秋潭水。
鏡成將獻蓬萊宮。
揚州長吏手自封。
人間臣妾不合照。
背有九五飛天龍。
人人呼爲天子鏡。
我有一言聞太宗。
太宗常以人爲鏡。
鑒古鑒今不鑒容。
四海安危居掌內。
百王治亂懸心中。
乃知天子別有鏡。
不是揚州百鍊銅。

【訓義】天子は鏡を以て鑒みず、當に人を以て鑒となすべきことを辨明した詩である。

百鍊鏡　皇王の鑒を辨ずるなり

【字解】【一】鎔範　鑄形なり。常規の規は圓形をいふ。
【二】日辰　日時計。
【三】江心　揚子江のまんなか。異聞集に、天寶中、揚州逆二水心鏡一、背有二熊龍一、言鑄レ鏡時、有二老人一、自稱姓臨名護、以二五月五日一、於二揚子江心一鑄レ之とある。
【四】日午　正午。
【五】瓊粉　玉の如き粉。鏡を磨くに用ふ。
【六】秋潭水　明鏡を秋水に喩へたのである。
【七】蓬萊宮　唐の宮殿の名。
【八】揚州長吏　此句一に銅函金匣纔幾重に作る。
【九】人間　俗世間。
【一〇】九五　易にて天子の位を九五の位といふ。龍を天子に喩ふ。
【一一】太宗　唐第二代の英主。

【詩意】ここに百錬の銅鏡がある。（昔の鏡は青銅で作り其形は圓形である。）然も其鑄形は普通の圓さとはちがつて極めて正しい圓さである。此鏡を鑄る時には靈奇な處に日時計を据ゑつけ、五月五日の正午に、揚子江の中央の波上に漂ふ舟の中で鑄たのである。それから玉の粉や金の膏でみがきをかけると、一片の秋潭にも比すべき明鏡となつた。之を天子に獻上せんとして揚州の太守が自ら箱の中に封印をして藏めた。これは俗界の男女などが顏を照らすべきものではなく、背に飛龍が雕めてあるので、人皆天子の鏡と呼んだ。余は嘗て太宗皇帝から承つた言葉がある。太宗は平生人を以て鏡とせられ、又古今の成敗を鏡とせられて、己の姿を鑒る鏡は用ひられなかつた。かくて天下の安危を掌中に握り、百世の治亂を心中に懸けてゐられた。されば天子には別に臣民と違つた鏡があるので、揚州で鑄た百錬の銅鏡などではない。

青石　激忠烈也

青石出自藍田山。
青石は藍田山より出づ、
兼車運載來長安。
兼車運載して長安に來れり。
工人磨琢欲何用。
工人磨琢して何にか用ひんと欲する、

【字解】【一】藍田山　長安の南に在る山の名。
【二】兼車　數車といふが如し。

石不能言我代言。
石言ふ能はず我代つて言ふ。
不願作人家墓前神道碣。
人家墓前の神道の碣と作らんことを願はず。
墳土未乾名已滅。
墳土未だ乾かざるに名已に滅す。
不願作官家道傍德政碑。
官家道傍の德政の碑と作らんことを願はず、
不鐫實錄鐫虛辭。
實錄を鐫らずして虛辭を鐫る。
願爲段氏顏氏碑。
願はくは段氏顏氏の碑と爲つて、
雕鏤太尉與太師。
太尉と太師とを彫鏤せんことを。
刻此兩片堅貞質。
此兩片堅貞の質に刻んで、
狀彼二人忠烈姿。
彼二人の忠烈の姿を狀せん。
義心如石屹不轉。
義心石の如く屹として轉ばず、
死節如石確不移。
死節石の如く確として移らず。
如觀奮擊朱泚日。
朱泚を奮擊せし日を觀るが如く、
似見叱呵希烈時。
希烈を叱呵せし時を見るに似たり。

【三】人家　普通の人の家。神道碣は墓道に建つる碑。
【四】德政碑　官吏の德政を頌する碑。
【五】段氏　段秀實、建中四年朱泚が謀叛した時笏を以て朱泚を擊つた。死後太尉を贈られた。顏氏は顏眞卿、李希烈の叛を罵る。眞卿は太子太師となる。

各於其上題名謚。
一置高山一沈水。
陵谷雖遷碑獨存。
骨化爲塵名不死。
長使不忠不烈臣。
觀碑改節慕爲人。
慕爲人勸事君。

【題義】人臣の忠勇義烈を勵ます爲に作つたのである。

【詩意】藍田山から出た青石、數車に併せ載せられて長安の都に運ばれた。石工が之を琢磨して何に用ひんとするか、石自ら言ふ能はざれば我代りて言はう。「普通人家の墓碑となるを願はない。何となれば其墳墓の土未だ乾かざるに其人の名聲は世に傳らなくなつてしまふからである。又官家善政の頌德碑となることも願はない。何となれば事實を枉げて徒らに諛辭を刻するからである。願くは段太尉や顏太師の碑となりて、兩片の石に其忠烈の狀を現はしたいものだ。此二人忠義の心は屹然として石の轉ばすべからざるが如く、節に殉ずる志は確乎として石の移動せざるが如く、朱泚僭位の日死を犯して之を排擊したる實際を觀るが如く、叛臣李希烈の權威に屈せず、目前之を叱斥罵倒したる狀を目擊するが如くならしめたい。而して各姓名謚號を兩片の石に刻して、一は高山の上に置き一は水底に沈め、地の形勢變りて山は谷となり河は岡となるも其碑長く人間に傳はり、骨は朽ちて塵となるも二人の忠名は不朽に輝き、いつまでも世の不忠不義の臣をして此碑を觀て其志を改め、二人の忠烈を慕ひ天子に事ふるの道を盡さんことを勸めたいものだ。」

【訳】各其上に於て名謚を題し、一は高山に置き一は水に沈め、陵谷遷ると雖も碑獨存し、骨化して塵と爲るも名死せず、長く不忠不烈の臣をして、碑を觀て節を改め人と爲りを慕はしめん。人と爲りを慕はしめ、君に事ふるを勸めん。

【六】陵谷　丘と谷と地形の變ること。

兩朱閣　刺佛寺寢多也

兩朱閣　佛寺の寢く多きを刺るなり

(一)兩朱閣。
南北相對起。
(二)借問何人家。
(三)貞元雙帝子。
帝子吹簫雙得仙。
(四)五雲飄飄飛上天。
(五)第宅亭臺不將去。

【字解】【一】兩朱閣　二棟の朱塗の樓閣。
【二】借問　試に問ふ。
【三】貞元　唐の德宗の年號。雙帝子は二人の姫宮。
【四】五雲　五色の雲。
【五】第宅　邸宅なり。

化爲佛寺在人間。
化して佛寺と爲つて人間に在り。

粧閣妓樓何寂靜。
粧閣妓樓何ぞ寂靜なる、

柳似舞腰池似鏡。
柳は舞腰に似池は鏡に似たり。

花落黃昏悄悄時。
花落ちて黃昏悄悄たる時、

不聞歌吹聞鐘磬。
歌吹を聞かずして鐘磬を聞く。

寺門敕榜金字書。
寺門敕して金字の書を榜す、

尼院佛庭寬有餘。
尼院佛庭寬うして餘り有り。

青苔明月多閑地。
青苔明月閑地多く、

比屋齊人無處居。
比屋の齊人居るに處無し。

憶昨平陽宅初置。
憶ふ昨平陽宅初めて置きしとき、

呑併平人幾家地。
平人幾家の地を呑併せしことを。

仙去雙雙作梵宮。
仙し去りて雙雙梵宮と作る、

漸恐人家盡爲寺。
漸く恐る人家の盡く寺と爲らんことを。

【六】悄悄　淋しき貌。
【七】榜　立札を立てる。
【八】比屋　軒を並べる。齊人は平民。
【九】平陽　漢の武帝の姉、平陽公主。ここには德宗の姫君を指していふ。
【一〇】平人　平民。
【一一】仙去　薨去すること。
【一二】梵宮　佛寺。

【題義】佛寺が漸く多くなつて民居を侵すことを刺つたのである。

【詩意】二棟の朱塗の樓閣が南と北とに相對して聳えてゐる。何人の住居かと問へば德宗皇帝の二人の姫宮の御住居だとのことだ。この二人の姫宮樣は五色の雲に乘つて天に上られた。（薨去したこと、秦の穆公の女弄玉が蕭史といふ者の妻となり、簫を吹くことを敎へられ、倶に仙術を修めて鳳凰に乘つて昇天した故事を用ひたのである。）併し邸宅や亭臺は持ち去ることは出來ないので、此世に殘してあつたが、それが今では寺になつてゐる。化粧室や妓女の控室などはひつそりとして、庭前の柳に當日の舞腰を想ひ池の水を見て明鏡を想ふのみ。黃昏花落ちて音なき時、歌吹の聲ではなく、鐘磬の聲を聞くばかりである。寺の門には金泥で書いた立札が立てられ、尼院や庭園はからりとして廣く、夏は靑苔の蒸すに任せ、秋は明月の照すに任せてあるが、軒を竝ぶる平民どもは住宅難を訴へてゐる有樣である。初め此姫宮樣が此邸宅を造られた時は平民ども何戸分の土地を併呑したのであらうか。定めて多くの戸數をつぶしたのであらう。それが御薨去になると佛寺にされてしまふ。この調子では人民の家がしまひには皆寺になつてしまひはしまいかと氣遣はれる。

西涼伎　刺封疆之臣也

西涼伎　封疆の臣を刺るなり

(一) 西涼伎。
西涼の伎、

【字解】【一】西涼伎　甘肅省涼

假面胡人假獅子。
刻木爲頭絲作尾。
金鍍眼睛銀帖齒。
奮迅毛衣擺雙耳。
如從流沙來萬里。
紫髯深目兩胡兒。
鼓舞跳梁前致辭。
應似涼州未陷日。
安西都護進來時。
須臾云得新消息。
安西路絶歸不得。
泣向獅子涕雙垂。
涼州陷沒知不知。

假面の胡人假獅子。
木を刻して頭と爲し絲を尾と作し、
金を眼睛に鍍し銀を齒に帖す。
奮迅たる毛衣雙耳を擺ふ、
流沙より萬里に來るが如し。
紫髯深目の兩胡兒、
鼓舞跳梁前んで辭を致す。
應に涼州の未だ陷らざる日、
安西都護進め來る時に似たるべし。
須臾にして云ふ新消息を得たり、
安西路絶えて歸り得ず。
泣いて獅子に向つて涕雙び垂る、
涼州の陷沒せること知るや知らずや。

州の地から傳つた伎樂。
【三】胡人　えびす。
【四】眼睛　ひとみ。
【五】帖　はり紙すること。
【六】流沙　涼州地方の沙漠。
【七】鼓舞　鼓の音につれて舞ふ。跳梁はをどりあがる。
【九】安西都護　官名。

獅子回頭向西望。
哀吼一聲觀者悲。
貞元邊將愛此曲。
醉坐笑看看不足。
享賓犒士宴三軍。
獅子胡兒長在目。
有一征夫年七十。
見弄涼州低面泣。
泣罷斂手白將軍。
主憂臣辱昔所聞。
自從天寶兵戈起。
犬戎日夜呑西鄙。
涼州陷來四十年。

獅子頭を回らし西に向つて望み、
哀み吼ぶこと一聲觀る者悲む。
貞元の邊將此曲を愛し、
醉坐笑ひ看て看れども足らず。
賓を享し士を犒うて三軍を宴す、
獅子胡兒長く目に在り。
一征夫有り年七十、
涼州を弄するを見面を低れて泣く。
泣き罷んで手を斂めて將軍に白す、
主憂ふるとき臣辱めらるること昔聞く所なり。
天寶に兵戈起りしより、
犬戎日夜西鄙を呑む。
涼州陷つて來四十年、

【八】貞元　德宗の年號。
【九】三軍　一に監軍に作る。
【一〇】主憂臣辱　史記越世家に見ゆ。
【一一】天寶　玄宗皇帝の年號。
【一二】犬戎　吐蕃を指す。

河隴侵將七千里。
平時安西萬里疆。
今日邊防在鳳翔。
緣邊空屯十萬卒。
飽食溫衣閑過日。
遺民腸斷在涼州。
將卒相看無意收。
天子每思常痛惜。
將軍欲說合慙羞。
奈何仍看西涼伎。
取笑資歡無所愧。
縱無智力未能收。
忍取西涼弄爲戲。

河隴侵將す七千里。
平時には安西萬里の疆、
今日邊防鳳翔に在り。
緣邊空しく屯す十萬の卒、
飽食溫衣閑に日を過す。
遺民腸斷つて涼州に在り、
將卒相看て收むるに意無し。
天子思ふ每に常に痛惜す、
將軍說かんと欲して合に慙羞すべし。
奈何ぞ仍りに西涼の伎を看、
笑を取り歡びに資して愧づる所無き。
縱ひ智力無くして未だ收むる能はざるも、
西涼を取つて弄して戲と爲すに忍びんや。

【一三】 河隴　甘肅省の西部の地。隴・將の將はセッテの意で助辭的に用ひたのである。
【一四】 鳳翔　地名。

【題義】 國境を守る臣を刺つた詩である。

【詩意】 涼州の舞伎を見た。それは胡人が面をかぶつて獅子舞をするのである。その扮裝は木を刻して獅子の頭となし絲で尾を作り、且には鍍金の眼球をはめ齒には銀紙を貼り、毛衣を逆立て兩耳を振ひ、流沙の地方から萬里を越え中國に渡つて來た時の勢のやうだ。赤髯の目のくぼんだ二人の胡人が鼓の音につれて跳りながら觀客の前に進んで口上を述べる。「此獅子は涼州がまだ吐蕃の手に歸せぬ頃、安西都護が獻上した頃の儘で御座る。」と。やがて語を續けて「このごろ新しいたよりを得ましたが、安西の方は道路が絶えて歸られないと申します。」と。因つて泣いて獅子の方を向いて「お前は涼州が陷つたことを知つてゐるか」といふと、獅子は首を回らして西方を望み、悲しげに一聲吼える。之を見た觀客一同皆悲を催ほした。貞元の邊將某は此曲を好んで醉坐して笑ひながら之を見物し、賓客士卒を饗する時にも必ず此曲を演せしめる。或る時一人の七十ばかりになる從軍者があつて、此曲を演ずるを見うつ伏して泣いた。それから涙を拭つて邊將某に申出した。「主憂へ臣辱められるといふことは昔から聞く所であるが、天寶十四年に安祿山の亂が起つてから、吐蕃の兵が徐徐に西方の僻地を侵略し、涼州が彼等の手に陷つてから四十年になり、河隴七千里が侵略されてしまつた。平生は安西都護のゐた處は萬里の遠疆に在つたが、今日では都のすぐ鄰の鳳翔に防備を置くといふ狀態で、徒に十萬の兵卒を駐屯させてあるが、飽食暖衣して空しく日を送つてゐる。涼州の遺民は吐蕃の

領地になつたことを悲んでゐるが、邊防の將卒は少しも其土地を回復しようといふ氣はない。天子は常に此事を痛惜してゐる。邊將たる者は此事を口にするだに慙愧すべきである。いかなれば常にこの西涼の獅子舞の曲を見て笑ひ興じ、愧づることを知らぬのであるか、智謀がなくて回復が出來ぬとならば、まだ恕すべき所もあるが、涼州の獅子舞を取つて之を遊戯の資に供するとは何事であるかと。

八駿圖　誡奇物懲佚游也

八駿圖　奇物を誡め佚游を懲らすなり

穆王八駿天馬駒。
後人愛之寫爲圖。
背如龍兮頸如象。
骨竦筋高脂肉壯。
日行萬里疾如飛。
穆王獨乘何所之。
四荒八極踏欲遍。
三十二蹄無歇時。
屬車軸折趁不及。
黃屋草生棄若遺。
瑤池西赴王母宴。
七廟經年不親薦。
璧臺南與盛姬遊。
明堂不復朝諸侯。
白雲黃竹歌聲動。
一人荒樂萬人愁。
周從后稷至文武。
積德累功世勤苦。
豈知纔及五代孫。
心輕王業如灰土。
由來尤物不在大。

穆王八駿天馬の駒、
後人之を愛し寫して圖と爲す。
背は龍の如く頸は象の如く、
骨竦り筋高うして脂肉壯なり。
日に行くこと萬里疾きこと飛ぶが如し。
穆王獨り乘りて何れの所にか之きし。
四荒八極踏んで遍ねからんと欲す、
三十二蹄歇む時無し。
屬車軸折れて趁へども及ばず、
黃屋草生じて棄てて遺るるが如し。
瑤池西のかた王母の宴に赴き、
七廟年を經て親ら薦めず。
璧臺南のかた盛姬と遊び、
明堂復た諸侯を朝せしめず。
白雲黃竹歌聲動く、
一人荒樂して萬人愁ふ。
周は后稷より文武に至るまで、
德を積み功を累ねて世勤苦す。
豈に知らんや纔に五代の孫に及び、
心に王業を輕んずること灰土の如くなるを。
由來尤物は大に在らず、

【字解】【一】穆王　周の天子。八駿は八頭の駿馬。
【二】脂肉壯　肉つき獲せて健かなるをいふ。馬は獲せたのをよしとする。壯、或は少に作り、前句の象を鳥に作る。
【三】四荒　四方の遠地。八極は八方のはて。
【四】屬車　おともの車。
【五】黃屋　天子の車の幌。
【六】瑤池　池の名、仙女西王母の居る處。王母は西王母。
【七】七廟　天子の宗廟。
【八】盛姬　盛伯の女。
【九】明堂　天子が諸侯を會する堂。
【一〇】白雲、黃竹　歌の名。穆天子傳に見ゆ。
【一一】一人　天子をいふ。
【一二】五代　一に四代に作るは誤。
【一三】尤物　すぐれて珍奇な物。

能蕩君心卽爲害。
文帝却之不肯乘。
千里馬去漢道興。
穆王得之不爲戒。
八駿駒來周室壞。
至今此物世稱珍。
不知房星之精下爲怪。
八駿圖。君莫愛。

能く君の心を蕩する卽ち害を爲す。
文帝之を却けて敢て乘らず、
千里の馬去つて漢道興る。
穆王之を得て戒と爲さず、
八駿の駒來つて周室壞る。
今に至るまで此物世に珍と稱す、
房星の精下りて怪を爲すを知らず。
八駿の圖、君愛する莫かれ。

【一四】文帝　漢の天子。

【一五】房星　星の名。この星の精下りて駿馬となる。

【一六】君　廣く世人を指す。

【題義】珍奇の物を貴ぶことを戒め佚游に耽ることを懲らした詩である。

【詩意】周の穆王の八駿馬は後世の人が之を愛し畫圖として傳へた。其背は龍の如く其頸は象の如く筋骨太く逞ましく肉瘦せて健かで一日に萬里を行き飛ぶが如くに速かである。穆王は此の如き駿馬に乘りて何處に行くであらう。天下のすみずみまで走り廻り三十二の蹄休む時なく、隨從の車、軸折れて追隨する能はず、御召の乘輿も破れて草を生じ路傍に棄てられてゐる。さて穆王は西の方崑崙の瑤池に赴き西王母の宴席に招かれ、帝都は空虛となりて歷代の祖廟、天子の御親祭もなく、南は璧臺の盛姬と會遊して、諸侯の朝會も廢せられ、白雲黃竹の歌曲を聽きて神仙に伍して遊樂に耽り、天子一人は愉快ならんも天下の萬民は憂愁に沈んでゐた。周の祖先后稷より文王武王に至るまで功德を積み勤勞辛苦した結果、漸く得たる天下も纔か五代の孫穆王に及んで八駿馬のために王業を輕んずること土灰の如く天下の亂兆漸く現れて來た。由來珍奇な物は必ずしも大に在らず、區區の微と雖も、君の心を蕩かして害を爲すのである。故に漢の文帝は千里の馬の獻を却けて乘らなかつたので、漢の政道は隆興し、周の穆王は八駿馬を愛して戒むる所がなかつたので、周の王室は衰へた。今に至るまで世人は此八駿馬の圖を珍重するが、彼等は房星の精が地に下つて妖をなすものたることを知らないのである。諸君は、ゆめゆめ八駿圖などを愛好せぬがよい。

澗底松　念寒雋也

澗底松　寒雋を念ふなり

有松百尺大十圍。
生在澗底寒且卑。
澗深山險人路絕。

松有り百尺大さ十圍、
生じて澗底に在り寒く且つ卑し。
澗深く山險にして人路絕え、

【字解】【一】明堂　前の八駿圖に見ゆ。
【二】此求彼有　此は天子の方、彼は澗底を指す。

老死不逢工度之。　老死するまで工の之を度るに逢はず。
天子明堂欠梁木。　天子の明堂梁木を欠く、
此求彼有兩不知。　此に求め彼に有り兩つながら知らず。
誰諭蒼蒼造物意。　誰か諭らん蒼蒼たる造物の意、
但與之材不與地。　但だ之に材を與へて地を與へず。
金張世祿黃憲賢。　金張は世〻祿せられて黃憲は賢なり、
牛衣寒賤貂蟬貴。　牛衣は寒賤にして貂蟬は貴し。
貂蟬與牛衣。高下雖有殊。　貂蟬と牛衣と、高下殊なる有りと雖も、
高者未必賢。下者未必愚。　高者未だ必ずしも賢ならず、下者未だ必ずしも愚ならず。
君不見沈沈海底生珊瑚。　君見ずや沈沈海底に珊瑚を生じ、
歷歷天上種白榆。　歷歷天上に白榆を種ゑたるを。

【題義】　雋は俊に同じ、俊才の貧賤に沈淪してゐるのを憐んだ詩である。

【詩意】　高さ百尺大さ十圍の松、測底寒卑の地に生じ、深測險山人の行くべき路なく、老いて枯死するまで工匠も之を量らず、天子の明堂、梁となすべき巨材を求むるも、彼此の地隔絶して其需用に供せられない。蒼蒼たる天は折角巨材を賦與しながら、其用を全うすべき地位を與へざるは何事であらう。金張兩姓は漢代の貴族として其祿を世襲し、黃憲は賢才ありて其地位卑く且つ貧し。牛衣の人は寒微貧賤で貂蟬を著るものは富貴である。其間に貴賤の別はあるけれども、貴きもの必ずしも賢ならず、賤しきもの必ずしも愚ならず。沈沈として深き海の底にも珊瑚の如き貴き樹を生じ、彼の高き天上にも白榆の如き賤しき木を種うるが如く、人の賢愚は必ずしも地位の高卑によりて定まるものではなく、寒微の士にも英俊の士があるのである。

牡丹芳　美天子憂農也

牡丹芳。牡丹芳。　牡丹芳し、牡丹芳し。
黃金蘂綻紅玉房。　黃金の蘂綻びて紅玉の房あり。
千片赤英霞爛爛。　千片の赤英は霞爛爛、
百枝絳焰燈煌煌。　百枝の絳焰は燈煌煌。
照地初開錦繡段。　地を照して初めて開く錦繡の段、

【字解】　【一】黃金蘂　黃金色をした花の蘂。紅玉房は紅色の花ないふ。
【二】赤英　赤き花びら。爛爛は輝く貌。
【三】絳焰　赤き花の色。煌煌は輝く貌。
【四】蒼蒼　天の色。造物は萬物を作りし造物者、即ち天。
【五】金張　漢の金日磾と張安世。黃憲は後漢の人、其父は牛醫なり。雖高きも顯位に陞る能はずして卒した。
【六】牛衣　牛にきせる著物。漢の王章は貧にして牛衣を著てゐた。貂蟬は冠の飾。
【七】沈沈　深き貌。
【八】歷歷　分明なる貌。
【九】白榆　木の名。つまらぬ木也。

當風不結蘭麝囊。
仙人琪樹白無色。
王母桃花小不香。
宿露輕盈汎紫艶。
朝陽照耀生紅光。
紅紫二色間深淺。
向背萬態隨低昂。
映葉多情隱羞面。
臥叢無力含醉粧。
低嬌笑容疑掩口。
凝思怨人如斷腸。
穠姿貴彩信奇絶。
雜卉亂花無比方。

風に當つて結ばず蘭麝の嚢。
仙人の琪樹は白うして色無く、
王母の桃花は小にして香ばしからず。
宿露輕盈紫艶を汎べ、
朝陽照耀紅光を生ず。
紅紫二色深淺を間へ、
向背萬態低昂に隨ふ。
葉に映じては多情羞面を隱し、
叢に臥しては力無くして醉粧を含む。
低嬌は笑容口を掩ふかと疑ひ、
凝思は怨人腸を斷つが如し。
穠姿貴彩信に奇絶、
雜卉亂花比方無し。

【九】 錦繡段　錦の織物。
【一〇】 蘭麝囊　にほひ袋。
【一一】 琪樹　玉樹なり。
【一二】 王母　仙女西王母。その蟠桃は千年に一たび實を結ぶといふ。
【一三】 宿露　宵ごしの露。
【一四】 朝陽　朝日。
【一五】 低嬌　嬌面をたれる。
【一六】 穠姿　あでやかな姿。貴彩は貴ぶべき色彩。
【一七】 比方　たとへくらべる。

石竹金錢何細碎。
芙蓉芍藥苦尋常。
遂使王公與卿相。
遊花冠蓋日相望。
庫車輕轝貴公主。
香衫細馬豪家郎。
衛公宅靜閉東院。
西明寺深開北廊。
戲蝶雙舞看人久。
殘鶯一聲春日長。
共愁日照芳難駐。
仍張帷幕垂陰涼。
花開花落二十日。

石竹金錢何ぞ細碎なる、
芙蓉芍藥苦だ尋常なり。
遂に王公と卿相とをして、
遊花の冠蓋日に相望ましむ。
庫車輕轝の貴公主、
香衫細馬豪家の郎。
衛公宅靜にして東院を閉ぢ、
西明寺深うして北廊を開く。
戲蝶雙び舞うて看人久しく、
殘鶯一聲春日長し。
共に愁ふ日照して芳駐め難きを、
仍に帷幕を張つて陰涼を垂る。
花開き花落つること二十日、

【一八】 石竹、金錢　草花の名。
【一九】 遊花　花を賞して遊ぶ。冠蓋相望は車のひきつづくこと。
【二〇】 庫車　低い車。輕轝の轝は輿に同じ、車の箱をいふ。公主は天子の女をいふ。
【二一】 香衫　香を焚きこめた上衣。細馬は小作りな馬。豪家郎は富豪の少年。
【二二】 衛公　太宗の臣李靖、衛國公に封ぜられた。東院は奥座敷。
【二三】 西明寺　寺の名、牡丹を以て名あり。

一城之人皆若狂。
三代以還文勝質。
人心重華不重實。
重華直至牡丹芳。
其來有漸非今日。
元和天子憂農桑。
卹下動天天降祥。
去歳嘉禾生九穂。
田中寂寞無人至。
今年瑞麥分兩岐。
君心獨喜無人知。
無人知可歎息。
我願暫求造化力。
減却牡丹妖艶色。
少廻卿士愛花心。
同似吾君憂稼穡。

一城の人皆狂するが若し。
三代以還文質に勝ち、
人心華を重んじ実を重んせず。
華を重んずること直に牡丹の芳に至る、
其来るや漸有り今日に非ず。
元和の天子農桑を憂へ、
下を卹み天を動かして天祥を降し、
去歳嘉禾九穂を生ず、
田中寂寞として人の至る無し。
今年瑞麥兩岐を分つ、
君の心獨り喜んで人の知る無し。
人の知る無きは、歎息す可し。
我願はくは暫く造化の力を求め、
牡丹妖艶の色を減却し、
少しく卿士花を愛するの心を廻らし、
同じく吾君の稼穡を憂ふるに似せしめんことを。

【一九】三代　夏殷周なり。以還は以来。

【二〇】元和天子　憲宗皇帝。元和は其年號。

【二一】嘉禾　よき稲。

【二二】兩岐　穂のふたまたになること。

【二三】造化　造物者。

【題義】牡丹は世間の流行物であることは秦中吟の中の買花の篇にも述べてあるが、此詩は時の天子が牡丹を愛するよりも却つて農事に心を用ひさせ給ふことをほめて作つたのである。

【詩意】牡丹の花が芳しく咲いてゐる。黄金の蘂、紅玉の房、千片の赤英は霞の爛爛たるが如く、百枝の紅焔は燈の煌煌たるが如く、大地に錦繡をひろげたるが如く、風前に香囊の紐を解いた如くである。仙人の白玉樹は此に比すれば色彩なく、西王母の桃花は小くもあり香氣も無い。宿露は紫艶の色を浮べ、朝日照して光彩を生じ、紅紫二色、濃きあり淡きあり、正面背面、其姿致萬態、上下低昂おもひおもひの姿をしてゐる。葉に映ずるものは多情の美人が羞を含んで面を隠すが如く、叢に臥すものは美人の醉うて力なきが如く、低れたるものは芙蓉の口を掩ふが如く、又怨ある女の物思に沈んで断腸の思を抱くもののやうだ。濃艶の資質、珍貴の色彩、實に奇絶と云ふべく、平凡な草花などは到底比較するに足らない。石竹花金錢花などは零細論ずるに足らず、芙蓉芍藥など平凡で言ふに足らない。されば王公卿相以下の人人、牡丹を觀るがため冠蓋相望み、輕車に乘れる貴公主、美服を著

【二四】稼穡　農業。

け肥馬に跨れる富豪の少年、相率ゐて花見にでかけ、衞公の宅でも東院を閉ぢ家内總出で繰り出し、西明寺では北廊を開いて花見の客を迎へる。鶯歌ひ蝶舞ひ人と共に春の長き日を遊び暮し、但日光花を照して春色老い易きを愁へ、帳幕を張りて日を遮る。花の開落僅に二十日、其間滿城の人皆な狂ふが如くである。三代以來風俗澆漓にして文が質に勝り、華美を尙んで質實を重んぜず。その結果は花を重んじて牡丹を賞愛するに至つた。元和の天子下民を憫み、其聖德天を感動せしめて、天が祺祥を降し、去年は嘉禾九穗を生ずるの瑞を呈したが、其瑞を觀んとて田中に至る人はなく、今年兩岐の瑞麥ありしも、天子獨り之を喜びたまふのみで誰あつて知る者もない。實に歎息すべきことではないか。我は造化の力を借りて牡丹の妖艶を減殺し、公卿士大夫以下花を愛する心を廻して天子農を憂ふる大御心に似せしめんことを願ふ者である。

紅線毯　憂蠶桑之費也

紅線毯　蠶桑の費を憂ふるなり

紅線毯。
擇繭繰絲清水煮。
揀絲練線紅藍染。

【字解】【一】紅線毯　紅色の敷物。

染爲紅線紅於花。
織作披香殿上毯。
披香殿廣十丈餘。
紅線織成可殿鋪。
綵絲茸茸香拂拂。
線軟花虛不勝物。
美人蹋上歌舞來。
羅襪繡鞵隨步沒。
太原毯澀毳縷硬。
蜀都褥薄錦花冷。
不如此毯溫且柔。
年年十月來宣州。
宣州太守加樣織。

染めて紅線と爲し花よりも紅なり、織つて披香殿上の毯と作す。披香殿の廣さ十丈餘、紅線織り成して殿に鋪く可し。綵絲茸茸として香拂拂たり、線軟に花虛にして物に勝へず。美人蹋み上り歌舞し來る、羅襪繡鞵步に隨つて沒す。太原の毯は澀くして毳縷は硬し、蜀都の褥は薄くして錦花冷かなり。此毯の溫にして且つ柔かなるに如かず、年年十月宣州より來る。宣州の太守樣を加へて織り、

【二】披香殿　宮殿の名。
【三】綵絲　いろいと。茸茸は紛亂する貌。拂拂は湧きのぼる貌。
【四】羅襪　薄絹のタビ。繡鞵はぬひとりしたクツ。
【五】太原　山西省太原府。毳縷は細き絲筋。
【六】蜀都　四川省成都府。
【七】宣州　安徽省宣城縣。

自謂爲臣能竭力。　自ら謂ふ臣と爲つて能く力を竭せりと。
百夫同擔進宮中。　百夫同じく擔うて宮中に進る、
線厚絲多卷不得。　線厚く絲多くして卷き得ず。
宣州太守知不知。　宣州の太守知るや知らずや、
一丈毯用千兩絲。　一丈の毯は千兩の絲を用ふ。
地不知寒人要暖。　地は寒を知らず人は暖を要す、
少奪人衣作地衣。　人衣を奪つて地衣と作す少れ。

【題義】　蠶絲が無益に消費されることを憂へて作つた詩である。

【詩意】　紅線で織つた敷物がある。これを製するには繭を擇び絲を繰り清水で煮、更に紅藍で染め、之を織つて披香殿上の敷物にする。披香殿の廣さは方十丈餘あるが、この廣い殿上に隙間なく敷きつめることが出來る。色絲がふさふさと亂れ香氣が拂拂とあがり、絲は軟に花模樣は淡く、ふはふはとして抵抗力がない。美人が之を蹋んで歌ひつ舞ひつすれば、韈も鞵も一足毎に埋まつてしまふ。太原產の毯は滑でなく絲筋が硬く、蜀都產の褥は薄くて花模樣が冷かであつて、竝に此毯の溫柔なには及ばない。この毯が毎年十月に宣州から獻上せられる。これは宣州の太守が新工夫を凝らして織つたもので、自分でも人臣として能く力を竭したものだと自任してゐるくらゐだ。之を百人の人夫にかつがせて宮中に獻上するのであるが線が厚く絲が多いから容易に卷くことも出來ない。さて宣州の太守は知つてゐるかどうかわからないが、一丈の毯を織るには千兩の絲が入用なのである。地面は寒さを知らないが人は暖かなことを要する。人の著物の材料を奪ひ取つて、地面の著物(敷物)を作ることはせぬがよからう。

【八】千兩　目方の名。

杜陵叟　傷農夫之困也

杜陵叟　農夫の困を傷むなり

杜陵叟杜陵居。　杜陵の叟杜陵に居り、
歲種薄田一頃餘。　歲ごとに種う薄田一頃餘。
三月無雨旱風起。　三月雨無くして旱風起り、
麥苗不秀多黃死。　麥苗秀でずして多く黃死す。
九月降霜秋早寒。　九月降霜秋早く寒く、
禾穗未熟皆青乾。　禾穗未だ熟せず皆青乾す。

【字解】【一】杜陵　長安の東南十五里に在り。叟は老人。
【二】薄田　地味のよくない田地。一頃は面積百畝。
【三】青乾　青くて枯れること。

長吏明知不申破。
急斂暴徵求考課。
典桑賣地納官租。
明年衣食將何如。
剝我身上帛。
奪我口中粟。
虐人害物卽豺狼。
何必鉤爪鋸牙食人肉。
不知何人奏皇帝。
帝心惻隱知人弊。
白麻紙上書德音。
京畿盡放今年稅。
昨日里胥方到門。

長吏明かに知れども申破せず、
急斂暴徵して考課を求む。
桑を典し地を賣つて官租を納る、
明年の衣食將に何如せんとする。
我が身上の帛を剝ぎ、
我が口中の粟を奪ふ。
人を虐たげ物を害するは卽ち豺狼なり、
何ぞ必ずしも鉤爪鋸牙人肉を食むのみならんや。
知らず何人か皇帝に奏せし、
帝心惻隱人の弊を知る。
白麻紙上に德音を書し、
京畿盡く今年の稅を放す。
昨日里胥方に門に到り、

【四】申破　上の役所へ申告すること。
【五】考課　官吏の成績考査。
【六】典桑　典は質におくこと。
【七】鉤爪　かぎのやうに曲つた爪。
【八】惻隱　あはれむ。
【九】白麻紙　詔を書く紙。德音は、なさけ深き言葉。
【一〇】里胥　村役人。

手持尺牒牓鄉村。
十家租稅九家畢。
虛受吾君蠲免恩。

手に尺牒を持つて鄉村に牓す。
十家の租稅九家は畢る。
虛く吾が君の蠲免の恩を受く。

【題義】農民の困苦を憐んだ詩である。

【詩意】杜陵に住む老農がある。年年一頃餘の田地を耕作してゐる。今年は三月に雨が降らないので麥に穗が出ず黃色になつて枯れてしまつた。九月には霜が降つて寒さが早く來たので、稻の穗が熟せぬうちに靑い儘枯れてしまつた。長吏は其事をよく知つてはゐるが、敢て上司に申告して減稅の計などはせず、却つて租稅の取立をきびしくして己の功績を擧げようとした。農民は已むを得ず桑を質に入れたり土地を賣つたりして稅を納めた。來年の衣食をどうするかなどといふことは考へる遑がなかつた。官吏は我我農民の著物を剝ぎ食物を奪ふ所の豺狼である。鉤の如き爪、鋸の如き牙を以て人の肉を食ふのばかりが豺狼ではない。適〻誰か天子に饑饉の事を申上げた者があつたので、天子は憐憫の情を以て民の窮狀を御察しになり、詔書を下し給うて京畿の地方に今年の租稅を免除せられた。因つて昨日村役人が來て、一尺ばかりの札を村村に揭げて免稅の詔書の下つたことを布告した。併し其時は十戶の中で九戶は旣に納稅を終つてゐたから、折角の減免稅の御恩も後の祭で何の御利益もな

【一】尺牒　長さ一尺の竹札。牓は札をかけること。
【二】蠲免　租を減免すること。

かつた。

繚綾　念女工之勞也　繚綾　女工の勞を念ふなり

繚綾繚綾何所似。
不似羅綃與紈綺。
應似天台山上明月前。
四十五尺瀑布泉。
中有文章又奇絕。
地鋪白煙花簇雪。
織者何人衣者誰。
越溪寒女漢宮姬。
去年中使宣口敕。
天上取樣人間織。

繚綾繚綾何の似たる所ぞ、
羅綃と紈綺とに似ず。
應に天台山上明月の前、
四十五尺の瀑布泉に似たるべし。
中に文章有り又奇絕、
地に白煙を鋪き花雪を簇む。
織る者は何人ぞ衣る者は誰ぞ、
越溪の寒女漢宮の姬。
去年中使口敕を宣べ、
天上より樣を取つて人間に織らしむ。

【字解】【一】繚綾　あや織の絹。
【二】羅綃　うすぎぬ。
【三】越溪　浙江省の山溪。寒女は貧女。
【四】中使　宮中の使者。口敕は口頭のみことのり。
【五】天上　宮中なり。人間は民間をいふ。

織爲雲外秋鴈行。
染作江南春水色。
廣裁衫袖長製裙。
金斗熨波刀剪紋。
異彩奇文相隱映。
轉側看花花不定。
昭陽舞人恩正深。
春衣一對直千金。
汗沾粉汙不再著。
曳土蹋泥無惜心。
繚綾織成費功績。
莫比尋常繒與帛。
絲細繰多女手疼。

織つては雲外秋鴈の行を爲し、
染めては江南春水の色を作す。
廣く衫袖を裁ち長く裙を製す、
金斗波を熨して刀紋を剪る。
異彩奇文相隱映し、
轉側して花を看るに花定まらず。
昭陽の舞人恩正に深し、
春衣一對直千金。
汗に沾ひ粉に汙るれば再び著ず、
土に曳き泥を蹋んで惜む心無し。
繚綾織り成すには功績を費す、
比する莫かれ尋常の繒と帛と。
絲細く繰多くして女の手疼み、

【六】衫袖　上衣の袖。
【七】金斗　ひのし。
【八】轉側　あちこちとむきをかへること。
【九】昭陽　女官の居る宮殿の名。

札札千聲不盈尺。　札札たる千聲尺にだも盈たず。
昭陽殿裏歌舞人。　昭陽殿裏歌舞の人、
若見織時應也惜。　若し織時を見ば應に也た惜むべし。

【10】札札　機を織る音。

【題義】機を織る工女の苦勞を念ひて作つた詩である。

【詩意】繚綾は何に似てゐるか。羅綃や紈綺などには似てゐない。天台山上の明月に照されてゐる、四十五尺の瀑布の水に似てゐる。その表には美妙なる文章があつて、恰も地上に白煙を鋪き雪の如き花を聚めたやうである。誰が織つて誰が著るかといふと、越溪の貧女が織つて宮中の女官が著るのである。去年は宮中から使者が來て、宮中の考案に從つて民間で織らせた。模樣は雲外に飛ぶ秋雁の行列を織り出し、色合は江南の春水の色を染め成すことにした。そして上衣の袖を十分にし裙を長くし、火熨斗をかけて皺を伸ばし剪刀で紋樣を剪りなどしたので、異彩奇文が互にうつりあつて、あちこちと向をかへてすかして見ると花模樣が樣樣にかはる。昭陽殿中の舞人は今正に君寵を辱うしてゐる。その一襲の春著は値が千金もする。しかも汗がしみたり白粉で汙れたりすると二度とは著ないで棄ててしまひ、泥の上を曳きずつてあるいて惜しいとも思はない。この繚綾を織り成すには仲仲の手間がかかるので、普通の絹とはわけがちがふのである。細い絲を度度繰り女工の手も痛くなる。それを如何に精を出しても一尺織るのは容易ではないのである。昭陽殿中の歌舞の人も、織る時の苦を見たらば少しは惜む心も出るであらう。

賣炭翁　苦宮市也　賣炭翁　宮市に苦むなり

賣炭翁、
伐薪燒炭南山中。　薪を伐り炭を燒く南山の中。
滿面塵灰煙火色。　滿面の塵灰煙火の色、
兩鬢蒼蒼十指黑。　兩鬢蒼蒼として十指黑し。
賣炭得錢何所營。　炭を賣つて錢を得何の營む所ぞ、
身上衣裳口中食。　身上の衣裳口中の食。
可憐身上衣正單。　憐む可し身上衣正に單なるを、
心憂炭賤願天寒。　心に炭の賤きを憂へて天の寒からんことを願ふ。
夜來城外一尺雪。　夜來城外一尺の雪、

【字解】【一】南山　長安の南に在る終南山。
【二】蒼蒼　髮の毛の白くなること。

曉駕炭車輾氷轍。
牛困人飢日已高。
市南門外泥中歇。
翩翩兩騎來是誰。
黄衣使者白衫兒。
手把文書口稱敕。
廻車叱牛牽向北。
一車炭重千餘斤。
宮使驅將惜不得。
半匹紅綃一丈綾。
繫向牛頭充炭直。

【題義】唐の德宗の時、宦官が市中から品物を取つて來て宮内で商賣をした。之を宮市といふ。市民は安い代價で品物を勝手に持つて行かれるので其擾に堪へなかつたと唐書に見えてゐる。此詩は宮市の爲に人民が苦むことを述べたのである。

【詩意】炭を賣る老爺がある。終南山の中で木を斬つて炭を燒いてゐる。滿面塵や煙によごれ頭髮は胡麻鹽だが手の指は眞黑だ。炭を賣り錢を得て何にするかといへば、謂ふまでもなく衣食の料にするので道樂でやつてゐるのではない。いくら稼いでも身には暖な著物も著られないが、心では炭價の安きを憂へてウンと寒くなつてくれればよいと願つてゐる。昨夜から長安城外には雪が一尺も積つた。老爺は朝早く牛に炭車を牽かせて賣りに出かけた。やがて日も高くのぼり牛も人も飢ゑ疲れて來たので、長安の南門外の泥道の中に休息した。そこへ二人の騎士がやつて來た。見れば黄衣を著た使者（宦官）と白衣を著た若者とである。手には書附を持ち口には勅だと稱し、老爺の牛車を北の宮城の方に向つて進ましめた。この車の炭は千餘斤あるのだが、宮使が驅り立てるのだから惜しいけれども厭だとは言へない。そして僅に半匹の紅綃と一丈の綾絹とが炭の代價として牛の頭に投げ繫けられるだけだ。

曉に炭車に駕して氷轍に輾らしむ。
牛困み人飢ゑて日已に高け、
市の南門外の泥中に歇む。
翩翩たる兩騎來るは是れ誰ぞ、
黄衣の使者白衫の兒。
手に文書を把つて口に敕と稱し、
車を廻らし牛を叱し牽いて北に向はしむ。
一車の炭重さ千餘斤、
宮使驅將して惜み得ず。
半匹の紅綃一丈の綾、
繫けて牛頭に向つて炭の直に充つ。

【三】翩翩　馬の行く貌。

【四】宮使　上の黄衣使者なり。驅將の將はモツテの意で、驅りもてゆくこと。

【五】紅綃　紅色の絹。

母別子　刺新間舊也

母別子。子別母。
白日無光哭聲苦。

母は子に別れ、子は母に別る、
白日光無くして哭聲苦し。

(一)關西驃騎大將軍。
去年破虜(二)新策勳。
敕賜金錢二百萬。
洛陽迎得如花人。
新人迎來舊人棄。
掌上蓮花眼中刺。
迎新棄舊未足悲。
悲在君家留兩兒。
一始扶行一初坐。
坐啼行哭牽人衣。
以汝夫婦新嬿婉(三)。
使我母子生別離。
不如林中烏與鵲。
母不失鵠雄伴雌。
應似園中桃李樹。
花落隨風子住枝。
新人新人聽我語。
洛陽無限紅樓女。
但願將軍重立功。
更有新人勝於汝。

關西の驃騎大將軍、
去年虜を破りて新に勳を策し、
敕して金錢二百萬を賜ひ、
洛陽迎へ得たり花の如き人。
新人迎へ來つて舊人棄てらる、
掌上の蓮花眼中の刺。
新を迎へ舊を棄つるは未だ悲むに足らず、
悲みは君が家に兩兒を留むるに在り。
一は始めて扶けられて行き一は初めて坐す、
坐して啼き行きて哭し人の衣を牽く。
汝が夫婦の新に嬿婉たるを以て、
我が母子をして生きながら別離せしむ。
林中の烏と鵲と、
母は鵠を失はず雄は雌を伴ふに如かず。
應に園中の桃李の樹、
花は落ちて風に隨ひ子は枝に住まるに似たるべし。
新人新人我が語を聽け、
洛陽限り無き紅樓の女。
但だ願ふ將軍重ねて功を立て、
更に新人の汝に勝れるもの有らんことを。

【字解】【一】關西　關は函谷關をいふ。後漢書の虞詡傳に「關西ハ將ヲ出シ、關東ハ相ヲ出ス」とある。驃騎大將軍は將軍の名號。
【二】虜　えびす。
【三】嬿婉　親密なこと。
【參】無限　無數に同じ、多きこと。紅樓は倡家。

【題義】新しい妻が乘込んで來て舊來の妻が離間されることを刺つた詩である。
【詩意】母と子との生別の悲劇がある。太陽も爲に光なく泣き悲む聲がいたいたしい。事の起りは關西の驃騎大將軍が去年虜を破つて勳功を立てたので、天子から金錢二百萬を賜り、其金で洛陽から花のやうな美人を迎へ取つた。新婦が乘込んで來ると舊婦は棄てられ、一は掌上の蓮花の如く愛玩され、一は目の中の刺の如く嫌はれることになつた。自分が棄てられて去ることは敢て悲むに足らないが、最も悲むべきことは君（舊婦が其夫を指して謂ふ）の家に二人の子供を殘して去ることだ。其中

の一人はやつと人に扶けられて歩き、一人は自分で至ることが出來るくらゐのもので、坐する者は泣き行く者は號んで吾が衣を牽いて慕ふ。汝等夫婦が狎れ親む爲に我が母子をして生別をさせることになり、母子雌雄睦しく暮す林中の烏や鵲に及ばず、花は風に散り子だけ枝に殘つてゐる園中の桃李と同じだ。新人よ吾が言を聽け、洛陽には澤山の倡婦がゐて、將軍が更に軍功を立てて、汝より以上に美しい新人を迎へることを願つてゐるぞよ。

陰山道　疾貪虜也

陰山道、陰山道、　陰山道、陰山道、　貪虜を疾むなり

紇邏敦肥水泉好。
毎至戎人送馬時。
道傍千里無纖草。
草盡泉枯馬病羸。
飛龍但印骨與皮。
五十匹縑易一匹。

紇邏敦肥にして水泉好し。
戎人の馬を送る時に至る毎に、
道傍千里纖草無し。
草盡き泉枯れて馬病羸し、
飛龍は但だ骨と皮とに印す。
五十匹の縑一匹に易ふ、

【字解】【一】陰山　山脈の名。
【二】紇邏　地名か。
【三】戎人　えびす。回鶻をいふ。
【四】飛龍　駿馬をいふ。

縑去馬來無了日。
養無所用去非宜。
毎歳死傷十六七。
縑絲不足女工苦。
疎織短截充匹數。
藕絲蛛網三丈餘。
回鶻訴稱無用處。
咸安公主號可敦。
遠爲可汗頻奏論。
元和二年下新敕。
内出金帛酬馬直。
仍詔江淮馬價縑。
從此不令疎短織。

縑去り馬來つて了る日無し。
養ふも用ふる所無く去るは宜しきに非ず、
毎歳死傷すること十に六七。
縑絲足らずして女工苦み、
疎織短截匹數に充つ。
藕絲蛛網三丈餘、
回鶻訴へ稱す用ふる處無しと。
咸安公主可敦と號す、
遠く可汗の爲めに頻りに奏論す。
元和二年新敕を下し、
内より金帛を出して馬の直を酬ゆ。
仍りに敕す江淮馬價の縑、
此れより疎短に織らしめずと。

【五】藕絲　蓮根の絲。
【六】咸安公主　德宗皇帝の女。德宗の貞元三年回鶻婚を乞ふ。李泌の勸によりて之を許す。可敦は回鶻語で妃の意。
【七】可汗　回鶻の王をいふ。
【八】馬價縑　馬の價に酬ゆる爲の縑。

合羅將軍呼萬歲。　合羅將軍萬歲と呼び、
捧授金銀與縑綵。　金銀と縑綵とを捧授す。
誰知黠虜啓貪心。　誰か知らん黠虜貪心を啓く、
明年馬多來一倍。　明年馬多く來ること一倍す。
縑漸好。馬漸多。　縑漸く好く、馬漸く多し、
陰山虜。奈爾何。　陰山の虜、爾を奈何せん。

【題義】回鶻の貪慾を疾んで作つた詩である。

【詩意】陰山から唐に通ずる道筋の紇邏のあたりは土地も肥えて泉もよい。併し回鶻人が馬を送つてよこす時節になると、馬が食ひ盡して細い草すら無くなつてしまふ。あまり多くの馬を送つてよこす爲に、草は盡き泉は枯れて馬は病み衰へ、流石の駿馬も骨と皮ばかりになつた所へ燒印を押す。(すべて官馬には燒印を押す例である)そして縑五十匹と馬一匹と交易する習であつて、唐からは縑が出され、回鶻からは馬が來て、去來して終る時がない。唐では多くの馬を養つておいても用ふる所もないが、併し之を拒絶することは國交上都合がわるいので、仕方なく養つておくのだから世話が行屆かないので、毎年十中の六七は死傷する。又回鶻へ送つてやるのに絹絲が不足を告げたり女工が難儀したりする。因つて疎略に織り丈を短く切つて四數だけを整へる。中には藕絲や蜘蛛の巣などをまぜて織り、たけの三丈餘しかないのなどもある。すると回鶻ではこんな粗製品をよこされては役に立たないと故障を謂つてくる。咸安公主が回鶻王妃になつてからは、遠く回鶻王の爲に頻に縑の粗惡になつたことを奏論してくる。それゆゑ元和二年に新敕を下して宮中の御藏から金帛を出して馬の代價とすることになり、又江淮地方から出す馬價の代償としての縑は疎略に短く織つてはならないといふ詔が下つた。是に於て回鶻の使者たる合羅將軍は喜んで萬歲を唱へ、唐から受取つた金帛を回鶻王に捧げた。かくて狡黠な回鶻は味を覺えて慾心を起し、翌年は馬が一倍多く來るやうになつた。唐の縑が好くなればなるほど回鶻の馬が多く來る。ああ陰山の虜どもは實に憎みても餘ある奴ばらである。

【八】合羅將軍　回鶻の將軍の名か。
【一〇】黠虜　わるがしこいえびす。
【一一】陰山虜　回鶻を指す。

時世粧　儆戎也

時世粧。時世粧。　時世粧、時世粧、
出自城中傳四方。　城中より出でて四方に傳はる。
時世流行無遠近。　時世の流行遠近無く、
顋不施朱面無粉。　顋に朱を施さず面には粉無く、

【字解】【一】儆戎也　汪氏本には警戒也に作る。今全唐詩に據つて改めた。
【二】城中　都會をいふ。

烏膏注脣脣似泥。
雙眉畫作八字低。
妍蚩黑白失本態。
粧成盡似含悲啼。
圓鬟無鬢椎髻樣。
斜紅不暈赭面狀。
昔聞被髮伊川中。
辛有見之知有戎。
元和粧梳君記取。
髻椎面赭非華風。

【題義】時世粧とは時の流行の粧をいふ。この詩は世に奇異の粧が流行するのは、戎狄化せんとする前兆であるとなし、之を警める爲に作つたのである。

【詩意】今の流行の粧は都會から始つて四方の田舍までひろがる。然も遠近を論ぜず一樣にゆきわたる。その粧は如何といふに、口紅を施さず白粉をつけず、黑い脂を脣に注け、眉は八の字形に低れて畫き、美なるも醜なるも黑きも白きも本態を失ひ、化粧し終つた所は皆啼顏をしてゐるやうに見える。髮は鬢のないちよんまげに結ひ、斜に頰紅をさして赤面をなしてゐる。昔辛有は伊川で髮を被つてゐる者を見て、將來中國が夷狄化することを知つたといふが、元和の今日流行する粧も決して中國の風ではない。諸君は能く記憶しておくがよい。後日夷狄化するかも知れぬから。

烏膏脣に注けて脣泥に似、
雙眉畫いて八字の低を作す。
妍蚩黑白本態を失ふ、
粧成つて盡く悲啼を含めるに似たり。
圓鬟鬢無く椎髻の樣、
斜紅暈せず赭面の狀。
昔聞く髮を被る伊川の中、
辛有之を見て戎有るを知る。
元和の粧梳君記取せよ、
髻椎面赭華風に非ず。

【三】烏膏　黑き脂。
【四】八字低　八字形にたれた眉。
【五】妍蚩　美醜なり。
【六】椎髻　槌の形したマゲ。
【七】被髮云云　左傳僖公二十二年に、「初メ平王ノ東遷スルヤ、辛有伊川ニ適キ被髮シテ野ニ祭ル者ヲ見テ曰ク、百年ニ及バズシテ此レ其レ戎トナランカ、其禮先ヅ亡ビタリ」とある。
【八】元和　唐の憲宗の年號。粧梳は化粧。記取は記憶すること。取は助辭。
【九】華風　中國の風。

李夫人　鑒嬖惑也

漢武帝。初喪李夫人。
夫人病時不肯別。
死後留得生前恩。
君恩不盡念未已。
甘泉殿裏令寫眞。
丹青寫出竟何益。
不言不笑愁殺人。

【字解】【一】李夫人　漢の武帝の寵姬。
【二】君恩　武帝の寵愛。
【三】甘泉殿　漢の宮殿の名。

又令(四)方士合靈藥。
玉釜煎鍊金爐焚。
(五)九華帳深夜悄悄。
(六)反魂香降夫人魂。
夫人之魂在何許。
香煙引到焚香處。
既來何苦不須臾。
(七)縹緲悠揚還滅去。
去何速兮來何遲。
是邪非邪兩不知。
(八)翠蛾髣髴平生貌。
不似(九)昭陽寢疾時。
魂之不來君心苦。

又方士をして靈藥を合せしめ、
玉釜に煎鍊し金爐に焚く。
九華帳深うして夜悄悄、
反魂香は降す夫人の魂。
夫人の魂何の許にか在る、
香煙引き到る焚香の處。
既に來る何を苦みて須臾ならざる、
縹緲悠揚として還た滅去す。
去ること何ぞ速かに來ること何ぞ遲き、
是邪非邪兩つながら知らず。
翠蛾髣髴たり平生の貌、
昭陽に疾に寢ねし時に似ず、
魂の來らざるとき君の心苦しみ、

【四】方士　魔術師。少翁なり。事漢書外戚傳に見ゆ。
【五】九華帳　いろいろの色模様のある帳。
【六】反魂香　死者の魂を呼び返す香。
【七】縹緲　遠くかすかなる貌。悠揚はふはふはと漂ふ貌。
【八】翠蛾　美しき眉。
【九】昭陽　宮殿の名。

魂之來兮君亦悲。
背燈隔帳不得語。
安用暫來還見違。
傷心不獨漢武帝。
自古及今皆若斯。
君不見穆(一〇)王三日哭。
重璧臺前傷盛姬。
又不見泰(一一)陵一掬淚。
馬嵬坡下念楊妃。
縱令妍姿艶質化爲土。
此恨長在無銷期。
生亦惑。死亦惑。
尤(一二)物惑人忘不得。

魂の來るとき君亦悲む。
燈に背き帳を隔てて語ることを得ず、
安んぞ暫く來つて還違らるるを用ひん。
心を傷しむること獨り漢の武帝のみならず、
古より今に及ぶまで皆斯の若し。
君見ずや穆王三日哭し、
重璧臺前に盛姬を傷む。
又見ずや泰陵一掬の淚、
馬嵬坡下楊妃を念ふ。
縱令妍姿艶質を化して土と爲らしむるも、
此恨長に在り銷ゆる期無し。
生にも亦惑ひ、死にも亦惑ふ、
尤物人を惑はして忘れ得ず。

【一〇】穆王　前の八駿圖を見よ。
【一一】泰陵　唐の玄宗の陵。因つて玄宗を指す。
【一二】馬嵬坡　玄宗皇帝が安祿山の亂を避けて蜀に奔るとき、陳玄禮等に迫られて楊貴妃を殺した地。
【一三】尤物　美人なり。

人非木石皆有情。　人木石に非ず皆情有り、
不如不遇傾城色。　如かず傾城の色に遇はざらんには。

【題義】漢の武帝が李夫人の色香に迷ひ、たゐゐの限りを盡したことを述べて鑒戒としたのである。

【詩意】漢の武帝は李夫人を喪つた。李夫人の病氣の時にも肯て夫人の側を離れようとしなかつたが、死後にも恩寵を續け、夫人を念うて已まなかつた。因つて畫家に命じて甘泉殿に夫人の肖像を畫かしめたが、畫にかいた李夫人は物も言はねば笑ひもせず、却つて武帝の心をいやが上に愁へしむるのみであつた。故に武帝は更に方士をして反魂香を調合させ、玉の釜、金の爐で其香を煎錬せしめ、ひつそりとした眞夜中に九華帳の奥深き處に李夫人の姿を現さしめた。さて夫人の魂は現れたがなせか暫くも止らず、忽ちふはりふはりと滅え去つてしまつた。果して李夫人の姿であるか否か見定めもつかないうちに去つてしまつた。併し美しさは平生の李夫人とよく似てゐて、病中のやつれた姿とはちがつてゐた。夫人の魂が還つて來なければ武帝は悲み、還つて來ても亦悲んだ。燈を背にし帳を隔てて語ることも出來ず、ちよつと姿を見せて忽ち去られるとは何事であらうか。一體寵姫を喪つて心を傷ましめるのは武帝ばかりではない。周の穆王は三日の間大に哭して重璧臺の前で盛姫を傷み、唐の玄宗は一掬の涙を垂れて馬嵬坡下に楊貴妃を念うた。たとひ美しき姿は土に化するとも、思慕の情

【二】傾城　美人をいふ。

はいつまでも消えない。かくの如く生前にも死後にも美人の爲には惑ふのである。人は木石でないから美人に惑ふのは當然だから、なまなか美人などにめぐり遇はない方がましだ。

陵園妾　憐幽閉也　陵園の妾　幽閉を憐むなり

陵園妾。
顔色如花命如葉。
命如葉薄將奈何。
一奉寢宮年月多。
年月多。時光換。
春愁秋思知何限。
青絲髮落叢鬢疎。
紅玉膚銷繫裙緩。
憶昔宮中被妬猜。

陵園の妾、
顔色花の如く命葉の如し。
命葉の薄きが如く將に奈何せんとする、
一たび寢宮に奉りて年月多し。
年月多く、時光換る、
春愁秋思知る何ぞ限らん。
青絲髮落ちて叢鬢疎に、
紅玉の膚銷えて繫裙緩し。
憶ふ昔宮中妬猜せられ、

【字解】【一】憐幽閉也　汪本には託幽閉喻讒遭讒也とある。今全唐詩に據る。
【二】陵園　天子の陵墓。
【三】命　運命。
【四】寢宮　陵墓なり。
【五】青絲　絲の黑髮。
【六】繫裙　腰にまとふ裳。

因讒得罪配陵來。
老母啼呼趂車別。
中官監送鏁門廻。
山宮一閉無開日。
未死此身不令出。
松門到曉月徘徊。
柏城盡日風蕭瑟。
松門柏城幽閉深。
聞蟬聽燕感光陰。
眼看菊蘂重陽淚。
手把梨花寒食心。
把花掩淚無人見。
綠蕪墻遶青苔院。

讒に因つて罪を得陵に配せられて來りしを。
老母啼呼して車を趂うて別れ、
中官監送して門を鏁して廻る。
山宮一たび閉されて開く日無く、
未だ死せずんば此身出でしめず。
松門曉に到るまで月徘徊。
柏城盡日風蕭瑟。
松門柏城幽閉深く、
蟬を聞き燕を聽いて光陰を感ず。
眼菊蘂を看れば重陽の淚あり、
手に梨花を把れば寒食の心あり。
花を把り淚を掩ふも人の見る無く、
綠蕪の墻は遶る青苔の院。

【九】中官　宦官。
【八】山宮　陵墓の宮殿。
【九】柏城　陵墓なり。蕭瑟は風の淋しく吹く貌。
【一〇】重陽　九月九日の節句。菊花酒を飲みて病魔をはらふ例なり。
【一一】寒食　冬至から百四、五、六日目をいふ。この三日間は禁火として火を用ひない習慣がある。

四季徒支粧粉錢。
三朝不識君王面。
遙想六宮奉至尊。
宣徽雪夜浴堂春。
雨露之恩不及者。
猶聞不啻三千人。
我爾君恩何厚薄。
願令輪轉直陵園。
三歲一來均苦樂。

四季徒らに支す粧粉の錢。
三朝識らず君王の面。
遙に想ふ六宮至尊に奉ることを、
宣徽の雪夜浴堂の春。
雨露の恩及ばざる者、
猶ほ聞く啻に三千人のみならずと。
我と爾と君恩何ぞ厚薄ある。
願はくは輪轉して陵園に直し、
三歲一たび來つて苦樂を均うせしめん。

【一二】三朝　君主三代の間。
【一三】六宮　後宮をいふ。
【一四】宣徽　宮殿の名。浴堂も殿の名。
【一五】輪轉　順番に更代して。

【題義】天子の陵墓の近くの宮中に幽閉されてゐる宮女を憐んだ詩である。
【詩意】天子の陵墓に奉仕する宮女がある。その顏色は花のやうに美しいが運命は葉のやうに薄い。一たび陵墓に仕へるやうになつてから餘程の歲月を經た。その間春の愁、秋の思が限なく積つて、綠の黑髮も拔けて薄くなり、玉の肌も痩せて帶がゆるくなつた。昔を憶へば宮中に仕へてゐた頃他人か

ら妬まれ、讒言の爲に此陵に流されることになり、老母が泣き叫んで車の後を追つて來て別を惜み、宦官が護送して來て陵墓の門を鎖して立返つた。さて一たび陵宮に幽閉されては、生きて此中から出ることは出來ない。夜は曉に到るまで月の徘徊するを眺め、晝は終日淋しき風の音を聞くのみで、蟬や燕の聲を聞いて月日の移るを感じ、菊を見ては重陽になつたかと涙を流し、梨花を把つては寒食が來たかと驚き、涙にかきくれてゐても、見る人とてもなく、ただ雜草の生ひかぶさつた牆が苔蒸した奥庭を取り圍んでゐるのみである。季節のうつりかはるにつれて其れ相應に化粧の錢を支出して身嗜みをしてゐるが何の甲斐もなく、三代の間一度も天顏を拜することは出來ない。遙に後宮にゐて天子に奉仕する宮女の上に想を馳すれば、宣徽殿の雪の宵、浴堂殿の春の日と、日夜君側に奉侍してゐるが、それでも君恩に浴することの出來ないものが三千人以上もあるとの事であるから、こちらの方に恩寵の及ばう筈もない。さて君側に時めいてゐる者と我とを比べて見るに、どうしてかくも御恩の厚薄があるのであらう。願はくは順番に更代して陵墓に宿直せしめ、三年に一度ぐらゐは苦樂を平均に受けるやうにさせたいものだ。

鹽商婦　惡幸人也

鹽商婦　幸人を惡むなり

鹽商婦多金帛。

鹽商の婦、金帛多し、

不事田農與蠶績。
南北東西不失家。
風水爲鄉船作宅。
本是揚州小家女。
嫁得西江大商客。
綠鬢溜去金釵多。
皓腕肥來銀釧窄。
前呼蒼頭後叱婢。
問爾因何得如此。
壻作鹽商十五年。
不屬州縣屬天子。
每年鹽利入官時。
少入官家多入私。

田農と蠶績とを事とせず。
南北東西家を失はず、
風水を鄉と爲し船を宅と作す。
本是れ揚州小家の女、
西江の大商客に嫁ぎ得たり。
綠鬢溜去して金釵多く、
皓腕肥え來つて銀釧窄し。
前には蒼頭を呼び後には婢を叱す、
爾に問ふ何に因つて此の如くなるを得たる。
壻鹽商と作つて十五年、
州縣に屬せず天子に屬す。
每年鹽利を官に入るる時、
少しく官家に入れ多く私に入る。

【字解】【一】鹽商婦　鹽商人の妻。唐時の制度では鹽の專賣を許して其利を政府に收めしむる定めであつた。

【二】揚州　江蘇省揚州府江都縣地。

【三】西江　江西なり。

【四】綠鬢　黑髮のまげ。溜去は滑かに拂す意。

【五】皓腕　白い腕。銀釧は銀のうでわ。

【六】蒼頭　奴僕。

【七】官家　政府。

官家利薄私家厚。
鹽鐵尚書遠不知。
何況江頭魚米賤。
紅鮯黃橙香稻飯。
飽食濃妝倚柂樓。
兩朶紅顋花欲綻。
鹽商婦。
有幸嫁鹽商。
終朝美飯食。
終歲好衣裳。
好衣美食來何處。
亦須慚媿桑弘羊。
桑弘羊。死已久。

官家は利薄うして私家は厚し、
鹽鐵尚書遠くして知らず。
何ぞ況んや江頭魚米賤く、
紅鮯黃橙香稻の飯、
飽食濃妝して柂樓に倚り、
兩朶の紅顋花綻びんと欲するをや。
鹽商の婦、
幸有つて鹽商に嫁ぎ、
終朝飯食を美にし、
終歲衣裳を好くす。
好衣美食何處よりか來る、
亦須らく桑弘羊に慚媿すべし。
桑弘羊、死して已に久し、

【八】鹽鐵尚書　鹽及び鐵の專賣を掌る長官。
【九】柂樓　船上の樓。
【一〇】兩朶　兩片といふが如し。紅顋は紅頰。
【一一】桑弘羊　漢の武帝の時鹽鐵及び酒の專賣を始めた人。

不獨漢世今亦有。

獨り漢世のみならず今も亦有り。

【題義】世の僥倖にして榮華に耽る者を憎んで作つた詩である。

【詩意】鹽商の妻は金帛に富み、農蠶紡績の業も治めないで、東西南北どこへ行つても家室があり、船を家として風水の便に乘じて天下を横行してゐる。本揚州賤民の女であつたが、江西の豪商に嫁し、綠鬢に挿す金釵に富み、皓腕肥えて銀釧も窮屈になつてきた。前には奴僕を指呼し後を顧みては婢女を叱咤して威張りちらしてゐる。何により此くの如く驕奢の身となりしやと問ふに、夫が鹽商となりて十五年、州縣卽ち地方官の支配を受けずして天子に直屬し、毎年鹽を賣買して得る所の利益を官に入るる少く、自分の懷には多く入れるが、鹽鐵尚書は遠方にゐるのだから其情實を知らない。且つ江邊では魚米の價も低廉で、生活費もかからないから、日日美食に飽き厚化粧して船上の樓閣に倚り、これといふ仕事もせずに日を送つてゐる。鹽商の妻は、どうしてかくは多幸なのであらう。毎日旨い物を食つて美しい著物を著てゐる。この好衣美食は何處から來るのであらう。皆人民の懷から來るのである。されば此鹽商は漢の桑弘羊にも慚づべきほどの惡錢を貪つてゐるのだ。桑弘羊が死んで久しくなるが、今の世にも亦桑弘羊があるのである。

杏爲梁　刺居處僭也

杏爲梁。桂爲柱。
何人堂室李開府。
碧砌紅軒色未乾。
去年身沒今移主。
高其牆。大其門。
誰家第宅盧將軍。
素泥朱板光未滅。
今歲官收賜別人。
開府之堂將軍宅。
造未成時頭已白。
逆旅重居逆旅中。
心是主人身是客。

杏を梁と爲し、桂を柱と爲す、
何人の堂室ぞ李開府なり。
碧砌紅軒色未だ乾かざるに、
去年身沒して今主を移せり。
其墻を高うし、其門を大にす、
誰が家の第宅ぞ盧將軍なり。
素泥朱板光未だ滅せざるに、
今歲官收めて別人に賜ふ。
開府の堂將軍の宅、
造ること未だ成らざる時頭已に白し。
逆旅重ねて逆旅の中に居る、
心は是れ主人身は是れ客。

【題義】杏爲梁　居處の僭なるを刺るなり

【字解】【一】李開府　唐の宰相李林甫を指すか。林甫は玄宗の時開府儀同三司となつた。
【二】碧砌　青色の石壘。紅軒は朱塗のノキ。
【三】素泥　白色の壁。朱板は朱塗の板。
【四】逆旅　宿屋。

更有愚夫念身後。
心雖甚長計非久。
窮奢極麗越規模。
付子傳孫令保守。
莫教門外過客聞。
撫掌回頭笑殺君。
君不見馬家宅尚猶存。
宅門題作奉誠園。
君不見魏家宅屬他人。
詔贖賜還五代孫。
儉存奢失今在目。
安用高墻圍大屋。

更に愚夫の身後を念ふ有り、
心甚だ長しと雖も計久しきに非ず。
奢を極め麗を極めて規模に越え、
子に付し孫に傳へて保守せしむ。
門外の過客をして聞かしむる莫れ、
掌を撫し頭を回らして君を笑殺せん。
君見ずや馬家の宅尚ほ猶ほ存せるに、
宅門題して奉誠園と作すを。
君見ずや魏家の宅他人に屬せるに、
詔贖して五代の孫に賜ひ還せるを。
儉は存し奢は失へること今目に在り、
安んぞ高墻の大屋を圍むを用ひん。

【五】身後　死後なり。
【六】馬家宅　馬燧及び其子暢の家なり。後之を天子に獻じた。
【七】奉誠園　前の奉中吟の傷宅を見よ。
【八】魏家宅　元和四年官錢を以て魏徵の勝業坊の舊宅を贖ひ、其子孫に還し與へた。

【題義】身分に相應しない邸宅を營む者を刺つた詩である。

【詩意】杏の木を梁とし桂の木を柱とした立派な家がある。一體誰の邸宅かと問へば李開府の邸宅だといふ。碧の石疊や朱塗の軒のまだ乾かないうちに、去年早くも李開府は死んで、今は別な人が其邸に住んでゐる。又高い牆を圍らし大きな門を構へた邸宅がある。聞けば盧將軍の邸宅なさうだ。白壁や朱塗の板の光もまだ失せないのに、今年政府が之を沒收して別な人に賜はつた。李開府にしても盧將軍にしても、その建築がまだ竣工せぬうちに早くも白頭の老爺となつてしまつた。彼等は宿屋も同樣な天地（李白の春夜宴二桃李園一序に夫レ天地ハ萬物之逆旅、光陰ハ百代之過客云云とある）の間にゐて、更に其中に邸宅といふ宿屋を作つたので、謂はば二重の宿屋住ひをしたもので、自分の心では其邸宅の主人のつもりでゐたらうが、實際は一夜泊りの客も同樣であつた。世には更に輪をかけた馬鹿者があつて自分の死後の事まで考へてゐる。彼等は心に永遠の事を考へてゐるが其計畫は決して永く存續するものではない。然るに彼等は分に過ぎた立派な家などを建てて子子孫孫に維持させようと考へてゐる。そんな事は門外を通る人に聞かせぬがよい。人が聞いたら手を拍ち頭を回らして其愚を笑ふであらう。見給へ彼の馬家の宅は今尙ほ存してゐるが、今は奉誠園と標札が掛つてゐる。又魏徵の宅は一たび他人の所有に歸したのを詔を以て之を贖ひ五代の孫に還し賜はつたではないか。要するに儉約であれば永續するが奢侈であれば滅亡するものだ。その實例が眼前に橫はつてゐる。されば高い墻を圍らし大邸宅などを構へるのは愚の骨頂である。

【餘論】新唐書に、李師道私錢六百萬を上り魏徵の孫の爲に故第を贖はんとす。居易言ふ、徵は宰相に任ぜられ、太宗殿材を用ひて其正寢を成す。後嗣守る能はず。陛下猶ほ宜しく賢者の子孫を以ひ贖ひて之に賜ふべし。師道は人臣なり。美を掠むべからずと。帝之に從ふとある。又白樂天の文集に論二魏徵舊宅一狀がある。

井底引銀瓶　止二淫奔一也

井底引銀瓶。
銀瓶欲上絲繩絕。
石上磨玉簪。
玉簪欲成中央折。
瓶沈簪折知奈何。
似妾今朝與君別。
憶昔在家爲女時。
人言擧動有殊姿。

井底引銀瓶　井底に銀瓶を引く、
銀瓶は上らんと欲して絲繩絕ゆ。
石上に玉簪を磨す、
玉簪成らんと欲して中央より折る。
瓶沈み簪折る知んぬ奈何かせん、
妾が今朝君と別るるに似たり。
憶ふ昔家に在つて女たりし時、
人は言ふ擧動殊姿有りと。

【字解】【一】銀瓶　銀のつるべ。
【二】絲繩　つるべのなは。
【三】知奈何　知は下に疑問詞あるときは不知と同意。どうしてよいかわからないといふ意。
【四】殊姿　美しい姿。

嬋娟兩鬢秋蟬翼。
宛轉雙蛾遠山色。
笑隨女伴後園中。
此時與君未相識。
妾弄青梅倚短牆。
君騎白馬傍垂楊。
牆頭馬上遙相顧。
一見知君卽斷腸。
知君斷腸共君語。
君指南山松柏樹。
感君松柏化爲心。
暗合雙鬟逐君去。
到君家舍五六年。

嬋娟たる兩鬢は秋蟬の翼、
宛轉たる雙蛾は遠山の色。
笑つて女伴に隨ふ後園の中、
此時君と未だ相識らず。
妾は青梅を弄んで短牆に倚り、
君は白馬に騎つて垂楊に傍ふ。
牆頭馬上遙かに相顧み、
一見知る君が卽ち腸を斷つを。
君が腸を斷つを知りて君と共に語る、
君は南山松柏の樹を指す。
君が松柏化して心と爲るに感じ、
暗に雙鬟を合せて君を逐うて去る。
君が家に到つて舍すること五六年、

【五】嬋娟　美しき貌。
【六】宛轉　弓形に曲る貌。眉を形容する詞。雙蛾は兩方の美しき眉。
【七】女伴　女の遊び仲間。
【八】南山　終南山。長安の南に在り。
【九】合二雙鬟一　山遊示二小妓一詩に、雙鬟垂未合、三十纔過半とある。雙鬟を合せ結ぶこと、成人の姿をすること。

君家大人頻有言。
聘則爲妻奔是妾。
不堪主祀奉蘋蘩。
終知君家不可住。
其奈出門無去處。
豈無父母在高堂。
亦有親情滿故鄉。
潸來更不通消息。
今日悲羞歸不得。
爲君一日恩。
誤妾百年身。
寄言癡小人家女。
愼勿將身輕許人。

君が家の大人頻に言ふ有り。
聘すれば則ち妻たり奔るは是妾なり、
祀を主り蘋蘩を奉ずるに堪へずと。
終に君が家には住す可からざるを知るも、
其れ門を出でて去る處無きを奈せん。
豈に父母の高堂に在る無からんや、
亦親情の故鄉に滿つる有り。
潸みしより來更に消息を通せず、
今日悲羞して歸り得ず。
君が一日の恩の爲に、
妾が百年の身を誤る。
言を寄す癡小人家の女。
愼んで身を將て輕しく人に許すこと勿れ。

【一〇】大人　父をいふ。母をいふ場合もある。
【一一】聘則爲妻　禮記內則篇に見ゆ。聘禮を行つて迎へた女ならば妻となし、聘禮に由らず男の許に奔つて來た女ならば妾とする。
【一二】主祀　夫を助けて祖先の祭を主ること。妻の職なり。奉二蘋蘩一は水草を神に捧げて祭ること、これも妻の職なり。詩經召南の采蘋、采蘩を見よ。
【一三】百年　一生涯をいふ。
【一四】癡小　愚で年のわかい。

【題義】女子の淫奔を戒めた詩である。

【詩意】井戸の底から銀の釣瓶を引きあげるのに、もう少しで出來あがらうといふ時に中央から折れてしまふ。かうなつてはどうしたらよいか。殆ど途方にくれる。今朝君（情人を指す）と別れる妾の身の上は丁度此れと同じだ。憶へば昔親の家にゐた處女の頃は、臯動恰好が水際立つて美しいと人からもほめられ、左右の鬢は秋の蟬の翼のやうに美しく、一對の眉は遠山の綠と其色を競ひ、女伴と奥庭の中に笑ひさざめいてゐて、まだ君と識合にはならなかつた。ある日妾は青い梅の實を弄びつつ低い牆にもたれてゐた。君は白馬に跨つて牆の傍の楊に近づいて來た。互に目と目とを見かはして妾は忽ち君が我が爲に心魂を碎いてゐることを悟つた。それから君と語り合つたが、君は終南山の松柏を指して心變のないことを誓はれた。妾は君の心に感激して窃に君の許に奔つて夫婦の契を結んだ。君の家に行つてから五六年にもなるが、君の家の親御は聘禮に由ればこそ妻といへるが、勝手に奔つて來た女は妻とはいへぬ。正妻として祖先の祭に與らしめる譯には行かぬとの御意見である。どうしても君の家に居ることは出來ないと諦めはしたが、今君の家を出てこれから何處へ行くであらうか。兩親も存生であり近しい人もないではないが、君の處へ身を寄せて以來全く音信を絶つてゐたから、今更歸つて行くことは出來ない。今になつて見れば君が一時のなさけの爲に、妾は一生を誤つてしまつた。世の無智無經驗な少女に忠告するが、決して輕しく男に身を任せてはなりませぬ。

官牛　諷執政也

官牛官牛駕官車。
渟水岸邊驅載沙。
一石沙。幾斤重。
朝載暮載將何用。
載向五門官道西。
綠槐陰下鋪沙堤。
昨來新拜右丞相。
恐怕泥塗汚馬蹄。
右丞相馬蹄。
蹋沙雖淨潔。

官牛　官牛執政を諷するなり
官牛官牛官車に駕し、
渟水岸邊に驅られて沙を載す。
一石の沙、幾斤の重さぞ、
朝に載せ暮に載せて將に何にか用ひんとする。
載せて五門官道の西に向ひ、
綠槐陰下沙堤に鋪く。
昨來新に右丞相に拜せられ、
泥塗の馬蹄を汚さんことを恐怕す。
右丞相の馬蹄は、
沙を蹋んで淨潔なりと雖も、

【字解】【一】渟水　長安の東方を流るる川。
【二】一石　桁目の名。
【三】五門　大明宮の南の丹鳳門をいふ。
【四】沙堤　國史補に、「凡ソ相ヲ拜スレバ、府縣沙ヲ鼓セテ路ヲ塡メ、私第ヨリ城東街ニ至ル、名ヅケテ沙堤トイフ」とある。
【五】昨來　昨日から。
【六】恐怕　おそれ、氣づかふ。

牛領(七)牽車欲流血。　牛領は車を牽いて血を流さんと欲す。
右丞相。　右丞相、
但能濟人治國調陰陽。　但だ能く人を濟ひ國を治め陰陽を調へば、
官牛領穿亦無妨。　官牛領穿たるるも亦妨げ無し。

【題義】宰相を諷諫した詩である。

【詩意】官で飼養してゐる牛が官用の車を牽いて、滻水のほとりから追立てられながら沙を載せて行く。一石の沙は幾斤の重さあるか隨分重いであらうが、朝晩之を運んで何にするのであらう。丹鳳門の西に持つて行つて、槐の木の下に敷くのである。昨日から新に右丞相が任命されたので、泥途が丞相の馬の蹄をよごしはせぬかと恐れて沙堤を作る爲である。かくて右丞相の馬の蹄は沙を蹋んで淨潔ではあらうが、牛の頸は車を牽く爲に血が流れるやうだ。併し右丞相は能く人を濟ひ國を治め陰陽の氣を調へさへすれば、牛の頸に孔があいても差支はない。

紫毫筆　誡失職也　紫毫筆　失職を誡むるなり

紫毫筆。(一)　紫毫の筆、

【七】牛領　牛の頸。

【字解】【一】紫毫筆　紫色の毛の筆。

尖如錐兮利如刀。　尖れること錐の如く利きこと刀の如し。
江南石上有老兎。　江南の石上に老兎有り、
喫竹飲泉生紫毫。　竹を喫し泉を飲んで紫毫を生ず。
宣城(二)工人采爲筆。　宣城の工人采つて筆と爲し、
千萬毛中選一毫。　千萬毛中一毫を選ぶ。
毫雖輕。功甚重。　毫は輕しと雖も、功は甚だ重し。
管勒工名充歲貢。　管に工の名を勒して歲貢に充つ、
君兮臣兮勿輕用。　君や臣や、輕用する勿れ。
勿輕用。將何如。　輕用する勿くして、將に何如せんとする。
願賜東西府御史(三)。　願はくは東西府の御史に賜へ、
願頒左右臺起居(四)。　願はくは左右臺の起居に頒て。
搦管趨入黃金闕(五)。　管を搦り黃金の闕に趨入し、
抽毫立在白玉除(五)。　毫を抽きて立つて白玉の除に在り。

【二】宣城　安徽省宣城縣。

【三】御史　官名。非違を糾察する官。

【四】起居　起居郎と起居舍人。起居郎は左史で、君主の動止を記す。起居舍人は右史で君主の言を記す。

【五】白玉除　宮殿の階なり。

臣有奸邪正衙奏。　臣に奸邪有らば衙を正して奏せよ、
君有動言直筆書。　君に動言有らば筆を直くして書せよ。
起居郎。侍御史。　起居郎、侍御史、
爾知紫毫不易致。　爾紫毫の致し易からざるを知らん。
毎歳宣城進筆時。　毎歳宣城筆を進むる時、
紫毫之價如金貴。　紫毫の價金の如く貴し。
愼勿空將彈失儀。　愼んで空しく將て失儀を彈すること勿れ、
愼勿空將錄制詞。　愼んで空しく將て制詞を錄すること勿れ。

【六】彈失儀　失儀は失態。彈は糾彈すること。
【七】制詞　みことのり。

【題義】直言直筆を務むべき官吏が其職責を果さないのを誡めた詩である。
【詩意】紫の毫の筆がある。その尖つてゐることは錐の如く、利いことは刀の如くである。（筆鋒の犀利なこと）江南の石の上に老兎がゐる。竹を食ひ泉を飲んで其體に紫の毫が生える。宣城縣の筆工が其毫を採つて筆を作るに、千萬本の中から僅に一本を選んで此筆を作るのである。毫は輕い物であるが、筆に作りあげる骨折は大變なものだ。出來あがると軸に筆工の名を刻みつけ年年貢物として納める。かかる貴重な筆であるから、君も臣も決して輕しく用ひてはならない。然らばどうしたらよいのか。御史や起居の役人に頒ち與へられるがよい。さすれば彼等は宮廷に立ち此筆を掉つて、奸邪の臣があれば御座の前に正しく其罪狀を奏聞し、君主の言動をば詐らずに記述するであらう。起居郎や侍御史たる人人よ、諸君は此紫毫筆の容易に得難きを知つてゐるであらう。毎年宣城から獻納され、黄金のやうに貴いのである。されば徒に官吏の非違を糾彈したり、天子の制詔などを錄してはならない。

隋堤柳　憫亡國也

隋堤柳。　隋堤の柳、
歳久年深盡衰朽。　歳久しく年深うして盡く衰朽す。
風飄飄兮雨蕭蕭。　風飄飄として雨蕭蕭たり、
三株兩株汴河口。　三株兩株汴河の口。
老枝病葉愁殺人。　老枝病葉人を愁殺す、
曾經大業年中春。　曾て大業年中の春を經たり。

【一】隋堤　隋の煬帝が運河の傍に築いた堤防。煬帝は通濟渠を開き汴河を引き泗水に入れ淮水に達せしめた。又邗溝を開きて揚子江に通ぜしめた。其堤防に柳を植ゑた。
【二】愁殺　愁へしめる。殺は助辭。
【三】大業　隋の煬帝の年號。

大業年中煬天子。
種柳成行夾流水。
西至黄河東至淮。
綠影一千三百里。
大業末年春暮月。
柳色如煙絮如雪。
南幸江都恣佚遊。
應將此樹蔭龍舟。
紫髯郎將護錦纜。
青蛾御史直迷樓。
海内財力此時竭。
舟中歌笑何日休。
上荒下困勢不久。

大業年中煬天子、
柳を種ゑ行を成して流水を夾む。
西は黄河に至り東は淮に至る、
綠影一千三百里。
大業の末年春暮の月、
柳色煙の如く絮雪の如し。
南江都に幸して佚遊を恣にす、
應に此樹を將て龍舟に蔭せしなるべし。
紫髯の郎將錦纜を護り、
青蛾の御史迷樓に直す。
海内の財力は此時に竭き、
舟中の歌笑は何れの日か休まん。
上荒み下困しんで勢久しからず、

【四】煬天子　煬帝。
【五】絮　柳の花。
【六】江都　江蘇省揚州府江都縣。煬帝の離宮を置いた地。
【七】龍舟　天子の舟。
【八】青蛾　年わかき美女。御史は書記なり。迷樓は煬帝の建てた樓。入る者をして方向に迷はしむ。故に此名あり。

宗社之危如綴旒。
煬天子。
自言歡樂殊未極。
豈知明年正朔歸武德。
煬天子。
自言福祚長無窮。
豈知皇子封鄴公。
龍舟未過彭城閣。
義旗已入長安宮。
蕭牆禍生人事變。
晏駕不得歸秦中。
土墳數尺何處葬。
吳公臺下多悲風。

宗社の危きこと綴旒の如し。
煬天子、
自ら言ふ歡樂殊に未だ極らずと。
豈に知らんや明年正朔武德に歸するを。
煬天子、
自ら自ふ福祚長く窮り無しと。
豈に知らんや皇子鄴公に封せらるるを。
龍舟未だ彭城閣を過ぎらざるに、
義旗已に長安宮に入る。
蕭牆禍生じて人事變じ、
晏駕して秦中に歸るを得ず。
土墳數尺何れの處にか葬る、
吳公臺下悲風多し。

【九】宗社　宗廟社稷。國家なり。綴旒は旗の周圍につける布片。
【一〇】正朔　こよみ。武德は唐の高祖の年號。
【一一】福祚　帝位。
【一二】鄴公　唐の武德元年、隋の煬帝の孫恭帝を廢して鄴國公となす。
【一三】彭城閣　鄴帝が揚州府甘泉縣彭城村に建てた閣の名。閣の字は閣に作る。今唐宋詩醇に據つて改む。
【一四】義旗　唐の高祖が隋を伐つ爲に擧げた義兵をいふ。
【一五】蕭牆　家のまはりの牆。
【一六】晏駕　天子の崩御をいふ。秦中は長安をいふ。

二百年來汴河路。　二百年來汴河の路、
沙草和煙朝復暮。　沙草煙に和す朝復暮。
後王何以鑒前王。　後王何を以てか前王に鑒みん、
請看隋堤亡國樹。　請ふ看よ隋堤亡國の樹を。

【題義】隋の亡びたことを憫んだ詩である。

【詩意】隋堤の柳は年久しくなつたので今は皆衰朽してしまつた。雨風に打たれながら二本三本汴河の口に立つてゐる。其の老いた枝や枯れた葉は人をして坐に愁を催さしめるが、昔は大業の春を飾つたものである。煬帝は運河を夾んで柳の竝木を作り、西は黄河から東は淮水に至るまで、綠の影が千三百里に亙つた。江都の離宮に遊幸せられる時には、この樹の蔭に暫く舟を駐めたことであらう。其時は赤髯の郎將が錦の纜を護り、美貌の女史が迷樓に宿直した。かかる豪奢を極めた結果天下の財力は殆ど盡きたが、それでも歌笑の樂に耽つて已む時なく、上の者は歡樂に耽り下の者は困窮して國家は危難に瀕した。それでも煬帝はまだ歡樂が足りないと言つてゐたが、豈圖らんや其翌年には年號も唐の武德と改まり、自ら帝位の無窮を信じてゐたが、案外にも皇子（實は皇孫）恭帝は廢せられてしまつた。煬帝の乘つた龍舟はまだ彭城閣を過ぎないうちに、唐王李淵の義兵は早くも長安の宮殿に乘込んだ。其中に內部から反亂が起つて煬帝は臣下の手に斃れ、長安に歸ることも出來ないで吳公臺下悲風の吹きすさぶ處に葬られた。さて二百年このかた汴河のほとり沙原の草に煙たなびく中に朝も晩も亡國の記念として柳が立つてゐる。後世の天子は何に由つて前代の天子を鑒みるべきかとならば、何よりも先づ隋堤の柳を看て鑒戒とするがよい。

【餘論】唐宋詩醇に「一起諺に似、謠に似たり。最も古意あり。詳に興亡の事を敍し、仍ほ柳を以て結ぶ。俯仰情深し」と評してゐる。

【注】吳公臺　揚州府甘泉縣の西北四里に在り、煬帝を此に葬る。

草茫茫　懲厚葬也　草茫茫　厚葬を懲らすなり

草茫茫。土蒼蒼。　草茫茫たり、土蒼蒼たり。
蒼蒼茫茫在何處。　蒼蒼茫茫として何れの處にか在る、
驪山脚下秦皇墓。　驪山の脚下秦皇の墓。
墓中下涸二重泉。　墓中下に二重の泉を涸す、
當時自以爲深固。　當時自ら以て深固と爲す。
下流水銀象江海。　下には水銀を流して江海に象り、

【字解】【一】茫茫　廣き貌。
【二】蒼蒼　青黑き貌。
【三】在何處　在、一に此に作るを可とす。
【四】驪山　秦の始皇帝を葬りし山の名。陝西省西安府臨潼縣に在る。
【五】涸二重泉　漢書劉向傳に、秦始皇帝葬三於驪山之阿、下銅三泉、上崇三山墳とある。涸二は銅三に作

上綴珠光作烏兎。　上には珠光を綴りて烏兎と作す。
別爲天地於其間。　別に天地を其間に爲り、
擬將富貴隨身去。　富貴を將て身に隨へ去らんと擬す。
一朝盜掘墳陵破。　一朝盜掘墳陵破れ、
龍椁神堂三月火。　龍椁神堂三月火あり。
可憐寶玉歸人間。　憐む可し寶玉人間に歸す、
暫借泉中買身禍。　暫く泉中を借りて身の禍を買ふ。
奢者狼藉儉者安。　奢なる者は狼藉せられ儉なる者は安し、
一凶一吉在眼前。　一は凶一は吉眼前に在り。
憑君回首向南望。　君に憑りて首を回らし南に向つて望まん、
漢文葬在灞陵原。　漢文は葬られて灞陵原に在り。

【詩意】厚葬の愚を懲らす爲に作つた詩である。

【餘論】草原がひろびろとひろがり土の色が青黒い。ここは何處であるかといふに、驪山の麓の秦の始皇帝の墓である。此墓は地下三重の泉の流れる處まで封じ固めたもので、始皇帝自ら大磐石だと信じ、且つ下には水銀を流して江や海に象り、上には珠を綴つて日月の形を作り、墓穴の内部に別天地を營んで、生前の富貴を其儘に攜へ往かうと期してゐた。處が一朝盜掘を企てた者があつて陵墓は破られ、靈柩も祭靈所も燒拂はれて、地中に深く埋めた寶玉も再び此世の物となり、氣の毒にも始皇帝は墓の爲に一身の禍を買ひ發掘の憂目を見ることになつた。贅澤な寶玉などを一緒に埋めるから盜掘の厄にも遇ふので儉約な者は安全である。奢は凶、儉は吉なる證據がすぐ眼の前に在る。君にたのむが始皇帝の墓から更に首を回らして南方を見られよ。薄葬を以て聞えた漢の文帝の灞陵が今以て無事に殘つてゐるではないか。

古塚狐　戒艶色也

古塚狐　艶色を戒むるなり

古塚狐、妖且老。　古塚の狐、妖にして且つ老いたり、
化爲婦人顏色好。　化して婦人と爲つて顏色好し。
頭變雲鬟面變粧。　頭は雲鬟に變じ面は粧に變ず、
大尾曳作長紅裳。　大尾曳いて長紅裳と作る。

【字解】【一】雲鬟　雲の如き鬟のマゲ。

る可とす。鋼は堅く封じこむこと。三重泉は地を掘つて三度水の出る處に及ぶをいふ。

【六】水銀　漢書劉向傳に、水銀爲二江海一、黃金爲二鳧雁一とある。

【七】烏兎　日月をいふ。

【八】龍椁　天子の棺槨。神堂は墓中の祭靈所。三月火は項羽が秦の都を燒き、三個月間火が消えなかつたこと。

【九】人間　世間。

【一〇】狼藉　亂暴なり。

【一一】漢文　漢の文帝、節儉の名高し。灞陵は文帝の陵墓。

徐徐行傍荒村路。　徐徐行くゆく荒村の路に傍ふ、
日欲暮時人靜處。　日暮れんと欲する時人の靜なる處。
或歌或舞或悲啼。　或は歌ひ或は舞ひ或は悲啼し、
翠眉不舉花顏低。　翠眉擧らず花顏低る。
忽然一笑千萬態。　忽然一笑千萬の態、
見者十人八九迷。　見る者十人に八九は迷ふ。
假色迷人猶若是。　假色の人を迷はすこと猶是の若し、
眞色迷人應過此。　眞色の人を迷はすは應に此に過ぐべし。
彼眞此假俱迷人。　彼眞此假俱に人を迷はす、
人心惡假貴重眞。　人心假を惡んで眞を貴重す。
狐假女妖害猶淺。　狐の女妖を假るは害猶淺く、
一朝一夕迷人眼。　一朝一夕人眼を迷はすのみ。
女爲狐媚害却深。　女の狐媚を爲すは害却つて深く、
日增月長溺人心。　日に增し月に長じて人心を溺れしむ。
何況褒妲之色善蠱惑。　何ぞ況んや褒妲の色善く蠱惑するをや、
能喪人家覆人國。　能く人の家を喪し人の國を覆す。
君看爲害淺深間。　君看よ害を爲す淺深の間、
豈將假色同眞色。　豈に假色を將て眞色に同じうせんや。

【三】褒妲　周の幽王の寵姬褒姒と殷の紂王の寵姬妲己。蠱惑は人を迷はすこと。

【題義】美人の容色に迷はされぬやうに戒めた詩である。

【詩意】古塚に老狐がゐて、それが美しい婦人に化ける。頭は忽ち黑髮の鬢に變り面は化粧した顏に變り、大きな尾は長い紅の裳に變る。日暮れて人靜まつた頃に、そろそろと淋しき村の路にでかけ、或は歌ひ、或は舞ひ、或は翠の眉、花の顏を垂れて悲み啼くかと見ると、忽ち笑ひなどして樣樣の態を作る。之を見ると十人に八九人は迷つてしまふ。假の美人(狐の化けた)でさへ此の通りであるから、本物の美人が人を迷はすことは此れ以上であらう。且つ人は誰でも假よりは本物を貴ぶものである。狐が女の妖色を假るのは害が淺く、ただ一朝一夕人の眼を迷はすだけであるが、女が狐のやうに媚びるのは害が深くて、日に月にますます人心を溺れしめる。況んや褒姒・妲己の如き美人は人の心を惑はすことが上手で、國家をも覆すほどである。諸君よく見給へ、假の美人(狐の化けたの)と本物の

美人とはどちらが害が深いか。本物の美人の害毒の深いことは到底狐の化物の比ではない。

黒潭龍　疾貪吏也

黒潭水深色如墨。　黒潭水深うして色墨の如し、
傳有神龍人不識。　神龍有りと傳ふるも人識らず。
潭上架屋官立祠。　潭上屋を架して官祠を立つ、
龍不能神人神之。　龍神なる能はず人之を神にす。
豐凶水旱與疾疫。　豐凶水旱と疾疫と、
鄉里皆言龍所爲。　鄉里皆言ふ龍の爲す所と。
家家養豚漉清酒。　家家豚を養うて清酒を漉み、
朝祈暮賽依巫口。　朝に祈り暮に賽して巫口に依る。
神之來兮風飄飄。　神の來るや風飄飄たり、
紙錢動兮錦傘搖。　紙錢動き錦傘搖ぐ。

【字解】【一】豐凶　汪氏本には災凶に作る。今全唐詩に據りて改む。

【二】紙錢　紙で作った錢。神を祭るとき之を燒きて捧げる。錦傘は錦蓋に同じ。

神之去兮風亦靜。　神の去るや風亦靜なり、
香火滅兮盃盤冷。　香火滅して盃盤冷かなり。
肉堆潭岸石。　肉は潭岸の石に堆く、
酒潑廟前草。　酒は廟前の草に潑ぐ。
不知龍神享幾多。　知らず龍神享くる幾多ぞ、
林鼠山狐長醉飽。　林鼠山狐　長に醉飽す。
狐何幸。豚何辜。　狐は何の　幸ぞ、豚は何の辜ぞ、
年年殺豚將餧狐。　年年豚を殺して將に狐を餧はんとす。
狐假神龍食豚盡。　狐　神龍を假りて豚を食ひ盡す、
九重泉底龍知無。　九重泉底龍知るや無や。

【三】九重泉　泉は淵なり。唐の高祖の諱を避けて泉の字を代用す。深き淵をいふ。

【題義】慾の深い官吏が君主をだしに使つて民を苦め私利を貪ることを疾んで作つた詩である。

【詩意】黒ずんだ潭の水が非常に深くて色が墨のやうだ。そこに龍が住んでゐるさうだが誰も見た人はない。この潭の上に屋を構へ祠を立て龍を祭ることにした。村人の言に據れば豐凶も洪水も旱も疾

疫も皆此龍の仕業であるといふ。故にどこの家でも豚を養ひ酒を漉して龍に捧げ、巫の言ふままに朝晩祈願をこめたり禮參りをしたりする。龍神の來るときはさつと風が吹いて來て紙錢や錦傘がうごく。其の去るときは風が靜まり香火も消え酒や肉を盛つた盃盤も冷える。祭の後には潭邊の石に肉が堆く置かれ、廟前の草に酒がまきちらされる。此酒肉を龍神はどれだけたべるであらう。殆んどたべはしないで、山林に棲む鼠や狐が飲み食ひするのである。狐はなぜに幸を受け、豚は何の辜がある のであらう。年年豚を殺して其肉を狐にたべさせ、狐は龍神をだしに使つて豚を食ひ盡す。さても深淵に住む龍神は此事を知つてゐるのやら知らないのやら。

【餘論】全首すべて比喩を以て成る。龍を君に、狐鼠を貪吏に、豚を民に喩へたのである。

天可度　惡詐人也　天可度　詐人を惡むなり

天可度。地可量。　天度る可く、地量る可し、
唯有人心不可防。　唯だ人心の防ぐ可からざる有り。
但見丹誠赤如血。　但見る丹誠の赤くして血の如くなるを、
誰知僞言巧似簧。　誰か知らん僞言の巧にして簧に似たるを。

【字解】【一】簧　笙の舌。詩經小雅に巧言如簧とある。【二】掩鼻　鄭袖、楚王に美人を讒ぜんとして先づ美人に言つた。楚王は御身の鼻を嫌つてゐるから王の御前に出たらば鼻を掩ふがよいと。美人は其言のやうにした。楚王は之を見て鄭袖に其

勸君掩鼻君莫掩。
使君夫婦爲參商。
勸君掇蜂君莫掇。
使君父子爲豺狼。
海底魚兮天上鳥。
高可射兮深可釣。
唯有人心相對時。
咫尺之間不能料。
君不見李義府之
輩笑欣欣。
笑中有刀潛殺人。
陰陽神變皆可測。
不測人間笑是瞋。

君に勸めて鼻を掩はしむるも君掩ふ莫れ、
君が夫婦をして參商と爲らしめん。
君に勸めて蜂を掇らしむるも君掇る莫れ、
君が父子をして豺狼と爲らしめん。
海底の魚兮天上の鳥、
高きも射る可く深きも釣る可し。
唯だ人心相對する時、
咫尺の間も料る能はざる有り。
君見ずや李義府の輩笑つて欣欣たり、
笑中に刀有り潛に人を殺す。
陰陽神變皆測る可し、
測られざるは人間の笑是れ瞋なること
なり。

故を問うた。鄭袖答へて、彼女は王の惡臭を嫌ふ故でござると言つたので、王は怒つて、美人の鼻を斬らしめた。【三】參商　二星の名。相隔りて出で、相會することのない星である。【四】掇蜂　周の尹吉甫が後妻を娶つた。後妻は先妻の子なる伯奇が己に對して邪心あることを吉甫に讒したが吉甫は信じなかつたので、後妻の言ふやう、われ其證を示さん汝望見せよと。ある日毒蜂を衣の襟に置き伯奇をして之を掇らしめた。吉甫樓上から望見して大に怒り伯奇を放逐した。【五】李義府　唐の高宗の時の宰相。人と語るに嬉怡微笑す。而も狡險忌刻であつた。故に時の人は笑中に刀ありと謂つた。【六】瞋　怒ること。汪氏本には嗔に作る、今全唐詩に據つて改む。

【題義】 詐り多き人を惡んで作つた詩である。

【詩意】 天でも地でも測量することが出來るが、ただ人心の危險だけは豫防は出來ない。見た所では丹誠が血のやうに赤いやうでも、僞言が笙簧を動かすやうに上手な人もある。若し人が鼻を掩へと勸めても掩はぬがよい。若し鼻を掩うたならば、夫婦の仲をも參商のやうに隔ててしまふであらう。又人が蜂を掇れと勸めても掇らぬがよい。若し蜂を掇つたならば親子の間をも豺や狼のやうな恐ろしいものにしてしまふであらう。海底の魚でも天上の鳥でも射ることも出來、釣ることも出來る。ただ人の心は兩人相對する時、僅か一尺か八寸しか離れなくとも推量することは出來ない。見よ、かの李義府は欣欣として笑つてゐるが、笑の中に刀があつて陰に廻つて人を殺すのである。如何なる陰陽神變でも推測することが出來るが、推測の出來ないのは笑の中に怒の含まれてゐることである。

秦吉了　哀寃民也

秦吉了。出南中。
彩毛青黑花頸紅。
耳聰心慧舌端巧。
鳥語人言無不通。
昨日長爪鳶。
今朝大觜烏。
鳶捎乳燕一窠覆。
烏啄母雞雙眼枯。
雞號墮地燕驚去。
然後拾卵攫其雛。
豈無鵰與鶚。
嗉中肉飽不肯搏。
亦有鸞鶴羣。
閑立颺高如不聞。
秦吉了。
人云爾是能言鳥。

秦吉了、南中より出づ、
彩毛青黑にして花頸紅なり。
耳聰く心慧くして舌端巧みに、
鳥語人言通せざる無し。
昨日長爪の鳶、
今朝大觜の烏。
鳶は乳燕を捎めて一窠覆り、
烏は母雞を啄んで雙眼枯る。
雞は號んで地に墮ち燕は驚き去る、
然る後卵を拾うて其雛を攫す。
豈に鵰と鶚と無からんや、
嗉中に肉飽いて肯て搏たず。
亦鸞鶴の羣有り、
閑に立ち颺ることと高く聞かざるが如し。
秦吉了、
人云ふ爾は是れ能言の鳥なりと。

【字解】【一】秦吉了　九官鳥ともいふ。よく人語をまねる鳥である。
【二】南中　南方の地方。
【三】花頸　模樣のある頸。
【四】乳燕　子持ちの燕。窠は巣の巣。
【五】鵰、鶚　皆猛鳥の名。
【六】嗉中　胃袋の中。

豈不見雞燕之寃苦。豈に雞燕の寃苦を見ざらんや、
吾聞鳳凰百鳥主。吾聞く鳳凰は百鳥の主なりと。
爾竟不爲鳳凰之前致一言。爾竟に鳳凰の前に一言を致すことを爲さずんば、
安用噪噪閑言語。安んぞ噪噪たる閑言語を用ひん。

【題義】無實の罪に泣く窮民を憐んで作つた詩である。

【詩意】秦吉了は南方蠻夷の國に產する鳥で、青黑の彩毛があつて花模樣のある頸は紅である。耳さとく心さかしく舌巧にして鳥語人言皆通せざるはない。昨日は爪の長い鳶が來て乳燕を掠めて巢を覆し、今朝は嘴の大きな鳥が來て、母雞を啄いて兩眼をつぶし、雞は啼きつつ地に落ち、燕は驚いて逃げ去つた後で、其卵を取り其雛を攫み食つた。鴟と鶚とは肉に飽きて鳥鳶の爲す所を知らぬげに見遁して搏つことを爲さず、又鸞や鶴もゐるが此等は悠悠閑閑と立ちやすらひて其容姿を誇り、或は高く空に舞ひ上りて、雞燕の啼く聲を聞かぬふりをしてゐる。人は秦吉了を言語に巧みな鳥だといふが、雞燕の寃苦を知らない筈はあるまい。鳳凰は鳥中の王だと云ふから、秦吉了よ、お前は鳳凰の前に行つて一言鳥鳶の暴虐、雞燕の寃苦を訴へるがよい。さうでなければ無用の閑言語を弄するも何の役にも立たない。

【七】噪噪　騒がしき貌。閑言語は無用の言語。

【餘論】これも全首比喩から成つてゐる。雞燕を寃民に、烏鳶を貪吏に、鵰鶚を武官に、鸞鶴を公卿に、鳳凰を天子に、秦吉了を諫官に喩へたのである。

鴟九劍　思決壅也

歐冶子死千年後。歐冶子死して千年の後、
精靈暗授張鴟九。精靈暗に張鴟九に授けらる。
鴟九鑄劍吳山中。鴟九劍を鑄る吳山の中、
天與日時神借功。天日時を與へ神功を借す。
金鐵騰精火翻燄。金鐵精を騰げ火燄を翻へす、
踴躍求爲鏌鋣劍。踊躍して鏌鋣の劍と爲らんことを求む。
劍成未試十餘年。劍成つて未だ試みず十餘年、
有客持金買一觀。客有り金を持ち買うて一たび觀る。
誰知閉匣長思用。誰か知らん匣に閉ぢられて長く用ひられんことを思ふを、

【字解】【一】歐冶子　古の刀工の名。
【二】張鴟九　人名。
【三】踴躍　をどりあがる。莊子大宗師篇に「金踴躍シテ我必ズ鏌鋣ヲ得ントストイハバ、大冶必ズ以テ不祥ノ金トナサン」とある。鏌鋣は名劍の名。

三尺青蛇不肯蟠。
客有心劍無口。
客代劍言告鵶九。
君勿矜我玉可切。
君勿誇我鐘可剉。
不如持我決浮雲。
無令漫漫蔽白日。
爲君使無私之光及萬物。
蟄蟲昭蘇萌草出。

三尺の青蛇肯て蟠らず。
客に心有り、劍に口無し、
客劍に代り言うて鵶九に告ぐ。
君我が玉を切る可きを矜ること勿れ、
君我が鐘を剉る可きを誇ること勿れ。
我を持つて浮雲を決し、
漫漫として白日を蔽はしむること無く、
君が爲めに無私の光をして萬物に及び、
蟄蟲昭蘇し萌草を出でしめんには如かず。

【題義】 壅蔽の害を除かんことを思うて作つた詩である。鵶九は刀工の名。

【詩意】 古の刀工歐冶子が死んで千年を經た後に、その靈魂が暗に張鵶九に授けられた。張鵶九が吳山の中で劍を鑄るに方り、天は時日を與へ神は功力を貸し、金鐵は精氣を發し火は焰を吐き、鑄型の中の金鐵は踊りあがつて、あつぱれ古の鏌鋣の如き名劍とならうと意氣ごんでゐた。さて劍が出來あがつてから十年あまりになるが、まだ一度も使つたことがなかつた。或る人が其劍を買取つて觀た。すると劍は箱の中に閉ぢこめられてから以來久しく用ひられんことを望んでゐたので、いつまでも箱の中に蟠つてゐることを屑しとしなかつた。劍には口がないから何とも言はなかつたが、其人は忽ち其意を悟り、劍に代つて鵶九に告げた。張君よ、我（劍自ら謂ふ）は玉をも鐘をも切ることが出來るが、決して君はそれを誇りなさるな。それよりも我を持つて天上の浮雲を一掃し、天日を蔽ふことの出來ないやうにし、天日の無私公平な光を萬物に及ぼし、冬籠の蟲は這ひ出し、春草は若芽をふき出すやうにさせるがよい。

采詩官　監前王亂亡之由也

采詩官　采詩官　前王亂亡の由を監みるなり

采詩官。
采詩聽謌導人言。
言者無罪聞者誡。
下流上通上下泰。
周滅秦興至隋氏。

詩を采り謌を聽きて人言を導く。
言ふ者罪無く聞く者誡む、
下流上に通じて上下泰し。
周滅び秦興つてより隋氏に至るまで、

【字解】【一】 采詩官　周の時代に置かれた官職で、各地を巡行して其地に行はれる詩を採り集め、天子に獻上することを掌る。天子は其詩を見て政事の得失民俗の良否を知ることを得た。
【二】 下流　下の民情の流れ。

【五】 漫漫　雲のひろがる貌。
【六】 蟄蟲　冬の間地中にこもつてゐる蟲。昭蘇は夜があけてよみがへる意で、蟲が穴から出ること。禮記樂記篇の字面。

【四】 三尺青蛇　劍をいふ。

十代采詩官不置。
郊廟登歌讚君美。
樂府豔詞悅君意。
若求興諭規刺言。
萬句千章無一字。
不是章句無規刺。
漸恐朝廷絶諷議。
諍臣杜口爲冗員。
諫鼓高懸作虛器。
一人負扆常端默。
百辟入門皆自媚。
夕郎所賀皆德音。
春官每奏唯祥瑞。

十代采詩の官置かれず。
郊廟の登歌君の美を讚し、
樂府の豔詞君の意を悅ばす。
若し興諭規刺の言を求めば、
萬句千章一字無し。
是れ章句の規刺無きならず、
漸く恐る朝廷の諷議を絶たんことを。
諍臣口を杜ぎて冗員と爲り、
諫鼓高く懸つて虛器と作る。
一人扆を負うて常に端默し、
百辟門に入つて皆自ら媚ぶ。
夕郎の賀する所は皆德音、
春官の每に奏するは唯祥瑞。

【三】郊廟　郊は天を祭ること。廟は祖先を祀ること。登歌は堂上に登つて歌ふこと。
【四】樂府　音樂を掌る役所。又は其役所で作つた詩歌をいふ。
【五】興諭　物にたとへて諭ふこと。規刺はいましめそしること。
【六】諫鼓　昔君主を諫めんとする時に打つた太鼓。
【七】一人　天子をいふ。扆は天子の御座の後に立てる屏風の如きもの。
【八】百辟　百官。
【九】夕郎　黃門侍郎なり。夕に青瑣門に入對する故なり。德音は天子より賜はる恩德の深きことば。
【一〇】春官　禮を掌る官。

君之堂兮千里遠。
君之門兮九重閟。
君耳唯聞堂上言。
君眼不見門前事。
貪吏害民無所忌。
奸臣蔽君無所畏。
君不見厲王胡亥之末年。
羣臣有利君無利。
君兮君兮願聽此。
欲開壅蔽達人情。
先向歌詩求諷刺。

君の堂は千里遠く、
君の門は九重閟づ。
君の耳は唯聞く堂上の言、
君の眼は見ず門前の事。
貪吏民を害して忌む所無く、
奸臣君を蔽うて畏るる所無し。
君見ずや厲王胡亥の末年、
羣臣は利有つて君は利無かりしを。
君よ君よ願はくは此を聽け。
壅蔽を開いて人情に達せんと欲せば、
先づ歌詩に向つて諷刺を求めよ。

【一一】厲王　周代の暗君。胡亥は秦の二世皇帝。

【題義】前代の帝王が國家を亂亡せしめた事に鑑み、采詩官を置いて民情を知る料とせられんことを希うた詩である。

【詩意】昔周の代には民間から詩を采り集める官を置いて、民をして心に思ふ所を歌はしめるやうにした。そは言ふ者には何の罪もなく、聞く者は自分の戒とするに足るからである。かくして下の民情が上に通じて上下安泰になるのである。周が滅びて秦が興つてから隋に至る十代の間は采詩官を置かない。だから郊廟の祭に歌ふ詩はただ君徳を讃美し、樂府で作る艶詞は君意を悅ばすのみで、諷刺諫誡の詩などは萬に一つもなかつた。詩歌に諷刺がないだけならばまだしもであるが、これでは朝廷に諷諫が絶えるやうになる恐れがある。卽ち諫官は口を杜いで冗員となり、諫鼓は懸けられてあつても虛器となり、上御一人は扆を背にして端然と默坐し、百官は宮門に入りて媚を呈し、黃門侍郎は君のありがたい御言葉を賀するに止り、禮官はいつも祥瑞を奏聞するのみになる。君主の堂は千里も遠く下民を離れ、君主の門は九重の奧に鎖され、君はただ堂上百官の諛言を聞くのみで、門外の世情は少しも知らないことになる。かくては貪吏は民を害して憚る所なく、奸臣は君を壅蔽して忌む所なくなるであらう。君も周の厲王や秦の胡亥の末年に羣臣が私利を貪つて、君は全く利を失つたことを御覽なされたで御座らう。ああ君よ君よ、我が下の言を聽き給へ。壅蔽を開き下情に通達せんと欲し給はば、先づ詩歌に就いて諷刺を求められるがよい。

【餘論】此篇は新樂府五十篇の總結であるから、自家作詩の旨意を述べたのである。唐宋詩醇にも、末章總結、言ふ者罪なく聞く者誡むの一語、作詩の旨を申明し、隱然として自ら三百篇の義に附くなり。諸篇全く杜甫の新安・石壕・垂老・無家等の作に倣ひ、時事を諷刺し、婉にして風多し、其の杜に及ばざる者は只筆力の縱橫、格調の變化のみ」とある。

309
65

終